ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

－朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2020

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

－朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2020

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、富山市婦中町下条地内に所在する友坂遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、富山市教育委員会学校施設課が事業主体となる朝日小学校プール改築工事に伴うものである。富山市教育委員会学校施設課の依頼を受けて、令和元年度に富山市教育委員会埋蔵文化財センター監理のもと、有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。

3　発掘調査・整理調査期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

調査期間：現地調査　令和元年 11 月 13 日～令和元年 12 月 26 日

整理調査　令和元年 12 月 27 日～令和 2 年 12 月 25 日

調査面積：152 ㎡

監理担当者：富山市教育委員会埋蔵文化財センター　専門学芸員　堀内大介

調査担当者：有限会社毛野考古学研究所　常深尚

4　本書の執筆は、第 1 章･第 2 章･第 5 章第 2 節を堀内が、その他を常深が行い、編集は常深が担当した。自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、佐伯史子氏・澤田純明氏（新潟医療福祉大学）に委託し、第 4 章にその成果を掲載した。

5　現地調査から報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（敬称略）

相羽重徳　九千房百合　鈴木重治　竹部佑介　藤田邦雄

富山県埋蔵文化財センター　富山市立朝日小学校　東武建設株式会社

6　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。方位は真北、水平水準は海抜高である。

2　遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず 01 からの通し番号を付した。竪穴建物については、SI ではなく、発掘調査時の SK をそのまま使用した。

SA（柵）　SB（礎石建物）　SD（溝）　SK（竪穴建物・土坑）　SP（ピット）

3　土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著　財団法人日本色彩研究所）を使用した。

4　挿図中の網掛けは次のとおりである。

遺　構：　旧プールによる撹乱、SK107 推定範囲

遺　物：　煤　　黒色処理　　油煙

目　　次

例　言
凡　例

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　発掘作業及び整理等作業の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査成果 …… 9
　第１節　調査の方法 …… 9
　第２節　層　序 …… 9
　第３節　遺　構 …… 10
　　１．概　要 …… 10
　　２．柵 …… 10
　　３．礎石建物 …… 10
　　４．竪穴建物 …… 15
　　５．溝 …… 16
　　６．土坑 …… 20
　　７．ピット …… 24
　第４節　遺　物 …… 25
　　１．概　要 …… 25
　　２．遺構出土遺物 …… 25
　　３．包含層出土遺物 …… 33
　　４．表土出土遺物・表採遺物 …… 34

第４章　自然科学分析 …… 43
　第１節　放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析 …… 43
　第２節　友坂遺跡出土焼骨の人類学的報告 …… 52

第５章　総　括 …… 55
　第１節　友坂遺跡における中世遺構の調査歴 …… 55
　第２節　中世前期の土師器皿の諸様相～富山県内の城館遺跡出土遺物を中心に～ …… 60
　第３節　友坂遺跡中世館跡の変遷 …… 67

引用・参考文献 …… 71
写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　友坂遺跡調査位置図 …… 2
第２図　友坂遺跡主要部平面図 …… 4
第３図　周辺遺跡図 …… 6
第４図　層序 …… 9
第５図　調査区全体図 ……11
第６図　調査区遺構位置図１ ……12
第７図　調査区遺構位置図２ ……13
第８図　SA128・129 遺構図 ……14
第９図　SA133・SB119 遺構図 ……15
第10図　SK21・85・86 遺構図 ……16
第11図　SD06・24・25・65・93・94・102 遺構図 ……17
第12図　SD36・37・106・117・118 遺構図 ……18
第13図　SD125遺構図 ……19
第14図　SK05・16・43・44・54・57・61・63・122遺構図 ……21
第15図　SK101・103・107・108、SP08・22・23・34・35・84・124遺構図……23
第16図　SA128・SB119 遺物図 ……25
第17図　SK21・85・86 遺物図 ……26
第18図　SD06・36・37 遺物図 ……27
第19図　SD93・102・106・125 遺物図 ……28
第20図　SK05・16 遺物図 ……29
第21図　SK43・44・54・61・101・107 遺物図 ……31
第22図　SK107遺物図 ……32
第23図　SK107遺物図 ……33
第24図　SP08・22・23・34・56・84・120・124 遺物図 …34
第25図　包含層・表土・表採遺物図 ……35
第26図　暦年較正結果 ……45
第27図　花粉分析・珪藻化石 ……51
第28図　友坂遺跡出土焼成人骨 ……54
第29図　友坂遺跡過去調査出土遺物 ……56
第30図　友坂遺跡平成８年度農道調査遺構図・遺物図 …58
第31図　土師器皿の分類図 ……61
第32図　土師器皿の編年案 ……64
第33図　ロクロ土師器・古瀬戸・貿易陶磁の編年案 ……65
第34図　珠洲・八尾の編年案 ……66
第35図　友坂遺跡中世遺構変遷図……69

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 7
第２表　ピット一覧表 ……24
第３表　遺物観察表(1) ……36
第４表　遺物観察表(2) ……37
第５表　遺物観察表(3) ……38
第６表　遺物観察表(4) ……39
第７表　遺物観察表(5) ……40
第８表　遺物観察表(6) ……41
第９表　遺物観察表(7) ……42
第10表　放射性炭素年代測定結果 ……45
第11表　珪藻分析結果 ……46
第12表　花粉分析結果 ……47
第13表　友坂遺跡過去調査遺物一覧表 ……57
第14表　土師器皿の分類比較表 ……61
第15表　友坂遺跡遺構変遷 ……68

図　版　目　次

図版01　遺構(1)　調査区全景（空撮、南東から）
　　礎石建物 SB119 全景（南東から）
図版02　遺物(1)　中世土師器（SK107）
　　青磁・白磁
図版03　遺構(2)　調査地区全景（空撮、南から）
　　調査地区全景（空撮、右下が北）
図版04　遺構(3)　SA128 全景（北西から）
　　SA129 全景（南西から）
　　SA128・129・133, SB119 全景（北から）
図版05　遺構(4)　SB119-SP07 礎石検出状況（南東から）
　　SB119-SP26 礎石検出状況（北西から）
　　SB119-SP20 礎石検出状況（北西から）
　　SK05 人骨検出状況（南東から）
　　SK16・61 全景（南東から）
　　SD106 全景（北西から）
図版06　遺構(5)　SK21 全景（西から）
　　SK86 全景（南から）
図版07　遺構(6)　SD37 全景（南西から）
　　SD37, SK43・44 検出状況（南西から）
　　SK43・44 全景（南東から）
　　SD36全景(西から)
図版08　遺構(7)　SK107 全景(北から)
　　SD125全景(南東から)、SD125全景(北西から)
図版09　遺物(2)　SA128, SB119, SK21・85・86, SP08・22・23・34・120・124 出土遺物
図版10　遺物(3)　SD06・36・37・106, SK85・86 出土遺物
図版11　遺物(4)　SD37・93・106・125, SK05 出土遺物
図版12　遺物(5)　SK16・54・61・101 出土遺物
図版13　遺物(6)　SK61・101・107 出土遺物
図版14　遺物(7)　SK107, SP84 出土遺物
図版15　遺物(8)　SK107 出土遺物
図版16　遺物(9)　SK107 出土遺物
図版17　遺物(10)　包含層出土遺物, 表採遺物, 石製品, 土製品
図版18　遺物(11)　鉄製品, 土製品

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

友坂遺跡は古くから知られた遺跡で、地元の住民が遺物を採集したことで確認された。昭和 49 年刊行の文化庁文化財保護部監修『全国遺跡地図 16　富山県』には既に登載されている。現在は、平成 25 年刊行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に「友坂遺跡」（市№.2010429）として登載している。現在の包蔵地面積は 624,800 ㎡である。

友坂遺跡では、昭和 50 年代後半から、各種開発に先立ち試掘調査・本調査が行われてきた。特に本報告の対象である富山市立朝日小学校内においては、昭和 56 年・平成 4 年に続き 3 回目となる。

平成 29 年 3 月に作成された「第 2 次富山市総合計画」において、学校施設の整備充実を目的に学校プール建設事業として朝日小学校を含む 6 校のプール改築計画（平成 29 ～ 33 年）が盛り込まれ、平成 30 年 6 月～平成 31 年 3 月に朝日小学校プール改築工事の実施設計が行われた。

平成 31 年 4 月、事業担当課の市学校施設課と朝日小学校プール改築工事について協議を行い、朝日小学校内では何度も発掘調査が行われていることから、遺跡が周知される以前の昭和 44 年に建設された既存プール改築に伴い工事で影響が及ぶ範囲の試掘調査を実施することとなった。

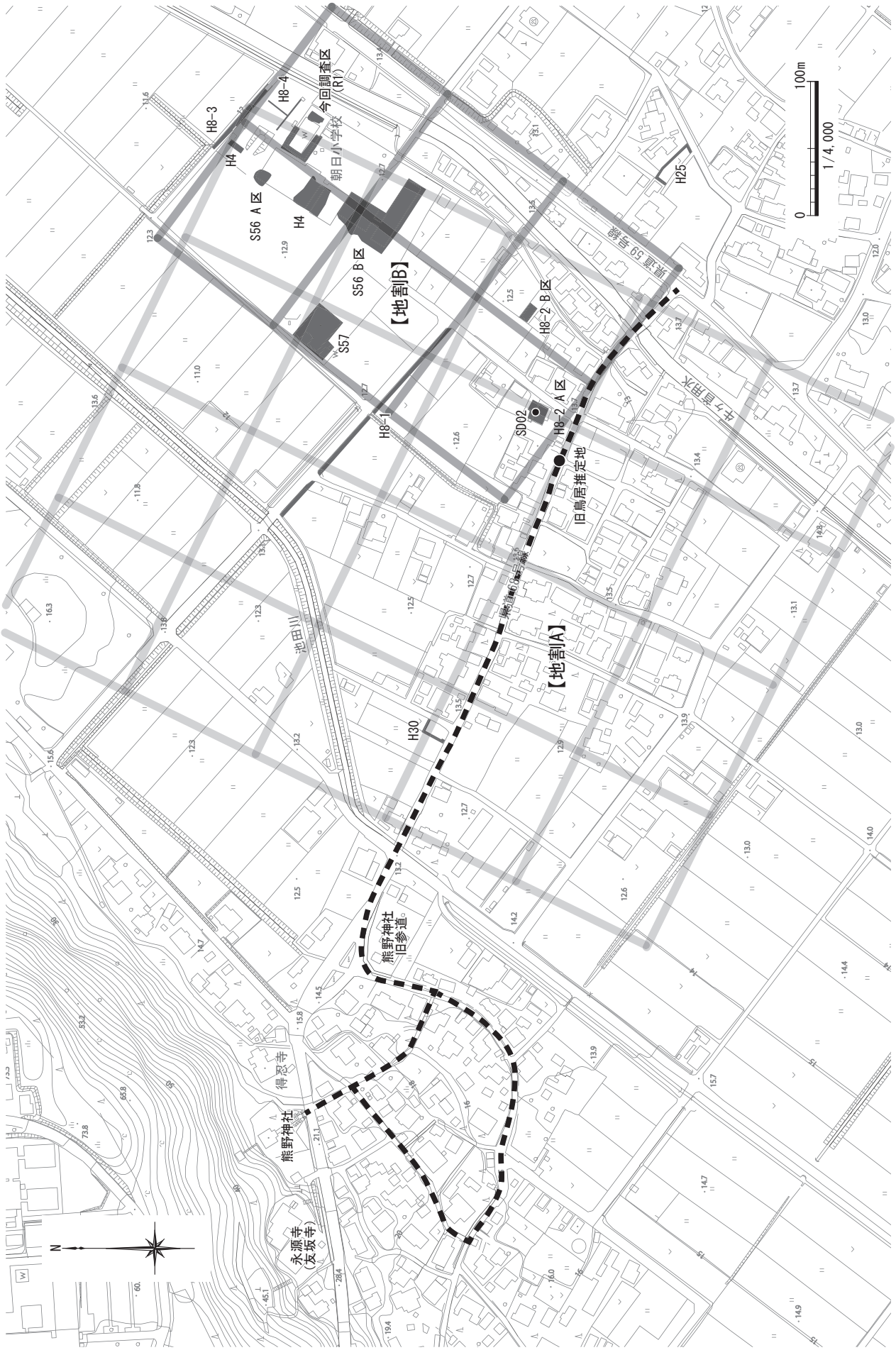
令和元年 5 月 14 日、既存プール周辺部で試掘調査を実施した。その結果、遺跡の遺存を確認し、既存プールの範囲内にも遺跡が遺存する可能性が高いことから、市学校施設課と再度協議を行い、既存プール解体時に追加の試掘調査を実施することとした。同年 7 月「朝日小学校プール改築工事」が採択され、8 月 26 日から既存プール解体が着手された。解体中の 9 月 13 日、20 日に試掘調査を実施し、その結果、既存プール内 280 ㎡の範囲に遺跡が遺存することが分かった。この結果を受けて、市学校施設課と埋蔵文化財の保護措置について協議を行い、新規プール建設で遺跡の保護ができない範囲 152 ㎡について、本調査を行い記録保存することとなった。

文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、令和元年 10 月 17 日付けで市学校施設課から提出され、10 月 23 日に富山県教育委員会へ副申した。また、文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、11 月 27 日に富山県教育委員会へ提出した。

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業　発掘作業は、市学校施設課から民間発掘会社である有限会社毛野考古学研究所に発掘調査業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が発掘調査の監理にあたった。作業期間は、令和元年 11 月 13 日から 12 月 26 日である。

11 月 13 日からバックホウによる表土掘削を実施し、18 日に既存プール西側にも上層遺構の広がりを確認したので、既存プール西側にも調査区を拡張した。その結果、表土掘削により調査面積は 320 ㎡に広がったが、広範囲に旧プール建設時の撹乱を確認し、撹乱部分を除外すると実際に調査できた面積は 138 ㎡である。18 日から 22 日に作業員による上層の遺構検出を行い、併行して遺構概略図を作成した。23 日にドローンによる検出状況の写真撮影を行った。27 日から検出した上層遺構の掘削を開始した。掘削を終えた遺構から順次、断面図・平面図を作成した。測量作業は世界測地系座標により、電子平板を用いて行った。



第１図　友坂遺跡調査位置図

上層遺構完掘後の 12 月 16 日にドローンによる上層完掘の写真撮影を行った。同日、朝日小学校の 6 年生児童 10 名の現地見学会を実施した。

翌 17 日から 20 日まで下層包含層の掘削を行ったが、下層には遺構・遺物は確認できなかった。21 ～ 25 日に断割りなど調査を終え、26 日に現場ハウス・トイレを撤去して発掘作業を完了した。

現地見学会（12 月 16 日）

整理作業　整理作業は令和元年 12 月 27 日から令和 2 年 12 月 25 日まで行った。遺物は、口縁部や底部が残るものはできるだけ図化するよう努めた。また、遺構の年代比定や地山土壌の検討のため、自然科学分析（AMS、珪藻花粉分析など）をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。焼骨は新潟医療福祉大学澤田純明准教授に鑑定を依頼した。併行して原稿作成、遺物写真撮影を行い、令和2年12月25日に本書を刊行した。　（堀内）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

友坂遺跡は、富山市街地から西南西約 7.0km に位置し、富山市婦中町友坂・下条・小泉地内に所在する。昭和 48 ～ 51 年に行われたほ場整備前の地籍図などをみると、下条・小泉集落の東には井田川の旧流路、上友坂集落と下友坂集落の間には池田川の旧流路が復元される（婦中町教委 1997）。遺跡は、井田川左岸の氾濫平野の微高地上に立地し、標高 13 ｍを測る。

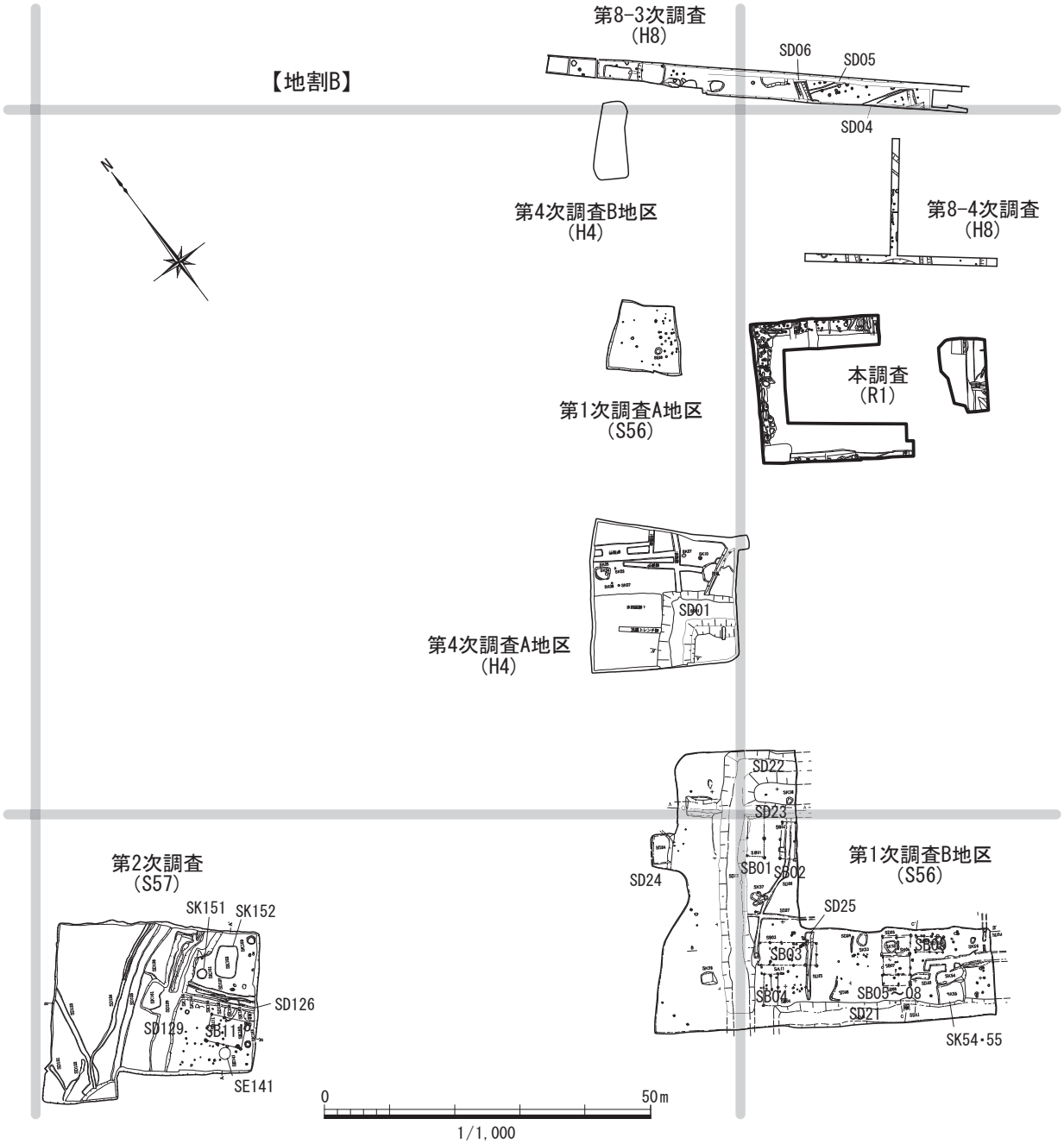
遺跡の西には富山県を二分する呉羽丘陵がある。呉羽丘陵は、北西端の富山市八ヶ山から南西端の富山市境野新にかけて約 7 kmの長さがある。最大幅約 2.5 kmで、東斜面は呉羽断層の断層崖により急崖となっている一方、西斜面は緩やかな馬背状の尾根が続く。丘陵の形成は約 100 万年前頃の海成層に始まり、その後の隆起により陸化し、50 ～ 30 万年前には旧神通川から運ばれた砂礫が堆積した。その後、さらに隆起し、河道が丘陵東側に移り、浸食により直線的な急崖をつくって、ほぼ現在の状態となった（高瀬監修 1994）。

第２節　歴史的環境

令和 2 年 7 月末時点で、富山市には 1043 ヶ所の遺跡が所在する。友坂遺跡が立地する井田川左岸の平野部と、西側の呉羽丘陵･射水丘陵および境野新扇状地周辺では、遺跡の内容･数が大きく異なる。このうち呉羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺は、富山市の遺跡のおよそ 5 分の 1 にあたる約 200 ヶ所の遺跡があり、県内の遺跡密集地帯の一つであり、旧石器時代から江戸時代まで集落、生産、墳墓、山城などと様々な種類の遺跡が連綿と続いている。一方、井田川左岸の平野部は、古代・中世

を中心とする集落や城館、生産遺跡が広がる。

旧石器時代　呉羽丘陵・境野新扇状地周辺に遺跡が点在する。古沢Ａ遺跡[20]ではナイフ形石器・掻器など、開ヶ丘中山Ⅳ遺跡[42]では関東系の茂呂型ナイフ形石器、北押川Ｂ遺跡[31]では東山系の石刃と掻器、杉久保系のナイフ形石器が出土した（富山市教委 1982・1983・2001a・2008a）。向野池遺跡[30]では、県内でも数少ない黒曜石細石刃核が見つかっているほか、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器も出土した（富山市教委 2000a）。境野新遺跡[29]は石核･剥片が出土し、製作遺跡とみられる。石器の出土数の多い境野新遺跡、北押川Ｂ遺跡以外は、完形の石器が単独あるいは少量出土する傾向があり、短期間の行動の痕跡と評価された（西井・藤田 1976）。



第２図　友坂遺跡主要部平面図

縄文時代　呉羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺で多くの集落遺跡がある。

草創期は、旧石器時代同様に呉羽丘陵の中位段丘で尖頭器の出土する杉谷遺跡[27]、平岡遺跡[44]、千坊山遺跡[50]、鏡坂Ⅰ遺跡[58]などが点在する（西井・藤田 1976、婦中町教委 2000）。前期になると中位段丘に人々が定住しはじめ、集落を形成するようになった。平岡遺跡[44]では、前期中葉～末葉の建穴建物 14 棟、掘立柱建物 5 棟などが墓域を取り囲むように検出され、墓域の外側に居住域を同心円状に配置する環状集落の構造を持つことが判明した。遺跡からは、これまでに採集品を含め玦状耳飾 77 点出土していることは特筆される（富山県財団 2015）。北押川Ｃ遺跡[32]では、竪穴建物 1 棟を検出した（富山市教委 2003a）。古沢遺跡[19]では、前期～中期の貯蔵穴 8 基を検出した（富山市教委 1973a）。

中期は、射水丘陵東端の高位段丘にある開ヶ丘地区で集落形成が活発になる。開ヶ丘中山Ⅲ遺跡[40]では中期前葉～中葉の竪穴建物 6 棟を検出した（富山市教委 2002a・2003b）。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡[37]では中期前葉の竪穴建物 24 棟で構成される北群集落、中期中葉の竪穴建物 51 棟、掘立柱建物 6 棟で構成される南群集落の 2 時期の環状集落を確認した（富山市教委 2003b・2003c・2003d・2004a・2004b）。遺跡からは、千葉銚子産琥珀製品が出土している（粟島 2012）。山田川左岸の中位段丘にある鏡坂Ⅰ遺跡[58]では、中期前葉～中葉の竪穴建物 3 棟、大量の土器が廃棄された谷地形を検出した（婦中町教委 2000）。中期後葉になると、高位段丘の大規模集落が衰退し、再び低位・中位段丘に小規模集落が展開する。上堤池遺跡[34]では竪穴建物 1 棟、池多東遺跡[39]では竪穴建物 2 棟を検出した（富山市教委 1973b・2002b）。北押川Ｃ遺跡[32]、池多東遺跡[39]、野下・新開遺跡[43]などではこの時期と推定されている落とし穴状遺構がある（富山市教委 1985・2003a・2008c・2009、富山県財団 2016）。

後期～晩期は検出遺構が減少し、空白期に近い状態となる。開ヶ丘中山Ⅰ遺跡[38]では、後期の竪穴建物 3 棟、晩期の竪穴建物 4 棟（富山市教委 2003d）、古沢Ａ遺跡[20]では、晩期の平地式建物、巨大柱穴群などを検出した（富山市教委 1983）。

弥生・古墳時代　弥生時代中期以前の遺跡はほぼ見つかっておらず、後期以降に呉羽丘陵・羽根丘陵・富崎丘陵周辺に、集落遺跡や墓などが増加する。呉羽丘陵南部にある杉谷Ａ遺跡[26]では、弥生時代終末期の方形周溝墓群から素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材等が出土した（富山市教委 1975b）。杉谷古墳群[25]では、山陰地方との関係性の強い四隅突出型墳丘墓である杉谷 4 号墳、前方後方墳である杉谷 1 番塚古墳のほか円墳や方墳が築造された（富山市教委 1974）。杉谷古墳群の北東には、呉羽山丘陵古墳群[7]がある（富山市教委 1984）。羽根丘陵・富崎丘陵においては、古墳出現期の動向を集落と墳墓両面から追える弥生時代後期から古墳時代前期の集落・墳墓で構成される千坊山遺跡群（婦中町教委 2002）があり、そのうち千坊山遺跡[50]（集落）、六治古塚墳墓[56]・富崎墳墓群[62]（四隅突出型墳丘墓）、向野塚墳墓[55]（前方後方型墳丘墓）、王塚古墳[53]・勅使塚古墳[54]（前方後方墳）、富崎千里古墳群（前方後円墳 1 基、円墳 1 基、方墳 15 基）は、国史跡王塚・千坊山遺跡群である。

古墳時代中期になると、呉羽丘陵南部に前方後円墳の古沢塚山古墳が築かれ、後期になると富山県最後の後期前方後円墳と評価される呉羽山№26 号墳が築かれるほか、群集墳である金屋陣の穴横穴墓群[5]も築かれる（富山市教委 1976）。羽根丘陵には、二本榎遺跡[45]において横穴式石室を持つ円墳が築かれる。

古墳時代中期以降の集落遺跡は少ないが、境野新遺跡[29]では古墳時代中期の竪穴建物 2 棟、古沢Ａ遺跡[20]では古墳時代中期の竪穴建物 1 棟を検出した（富山市教委 1974・1983）。古墳時代後期になると、砂子田Ⅰ遺跡[65]で竪穴建物 1 棟、中名Ⅵ遺跡[72]で竪穴建物 5 棟検出され、井田川右岸の

第３図　周辺遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種類	主な時代	主な文献
1	友坂遺跡	集落・城館	縄文・弥生・古代・中世・近世・近代	本書、婦1984『友坂遺跡調査報告書』、婦1993『友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』、婦1997『友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』、市2014『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅺ－北代村巻Ⅴ遺跡・友坂遺跡・吉作遺跡－』、市2019『富山市内遺跡発掘調査概要21－友坂遺跡－』
2	友坂天神遺跡	集落	縄文・古代・中世	
3	安田城跡	城館	古代・中世・近世	婦1993『国指定史跡 安田城跡』
4	金屋南遺跡	集落・墓・生産	縄文・古墳・古代・中世・近世	市2007『金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
5	金屋陣の穴横穴墓群	古墳	古墳（後）	市1984『呉羽丘陵古墳分布調査』
6	法尻窯跡	窯	奈良	
7	呉羽山丘陵古墳群	古墳群	古墳（前～後）	市1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
8	白鳥城跡	集落・城館	弥生・古墳・平安・中世	市1981『白鳥城跡』、市1983『白鳥城跡Ⅱ』、市1984『白鳥城跡Ⅲ』
9	呉羽山古道	道路	弥生・古代・中世	西井龍儀・小林高範2005「呉羽山古道の調査」『大境』第25号
10	住吉Ⅳ遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安	市2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』
11	金草第一古窯跡	窯	白鳳	市1970『金草第１号窯址発掘中間報告書』
12	花ノ木Ｃ遺跡	集落	縄文・古代・中世・近世	堀沢祐一2008「富山市花ノ木Ｃ遺跡の祭祀具について」『富山市考古資料館報　No.45』
13	西金屋高山窯跡	窯	飛鳥白鳳	
14	西金屋遺跡	集落・窯	縄文・弥生・奈良・平安	市2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ－西金屋・西金屋窯跡 米田大覚遺跡－』
15	下堤Ｂ遺跡	集落	縄文・奈良・平安	
16	古沢下堤池東遺跡	集落・生産	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	
17	古沢・西金屋窯跡群	窯・集落・生産	縄文・奈良	市・富山市埋蔵文化財調査委員会2000『西金屋窯跡発掘調査概要』、市2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ－西金屋・西金屋窯跡 米田大覚遺跡－』
18	センガリ山窯跡	窯	飛鳥	
19	古沢遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安	市1975『富山市古沢遺跡発掘調査報告』
20	古沢Ａ遺跡	集落・窯	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代	市1983『古沢Ａ遺跡発掘調査概要』
21	古沢Ｂ遺跡	墓等	縄文	
22	栃谷南遺跡	集落・生産	縄文・白鳳・奈良・近世	市1999『栃谷南遺跡』、市2002『栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
23	中老田Ｃ遺跡	集落・生産	縄文・古墳・古代・中世・近世	県1992『古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告書－中老田Ｃ遺跡・塚越Ａ遺跡』
24	塚越Ａ遺跡	集落・生産	縄文・弥生・古代・近世	県1992『古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告書－中老田Ｃ遺跡・塚越Ａ遺跡』
25	杉谷古墳群	古墳群	縄文・弥生・古墳	市1984『呉羽丘陵古墳分布調査』
26	杉谷Ａ遺跡	墓・集落	弥生～古墳・奈良・平安	市1975『杉谷（Ａ・Ｇ・Ｈ）遺跡発掘調査報告書』
27	杉谷遺跡	集落	縄文	市1976『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』
28	杉谷67番遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安	市1973『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 富山市杉谷（67・81・64）遺跡』
29	境野新遺跡	集落	旧石器・縄文・古墳・古代・近世	市1974『境野新遺跡発掘調査報告書』
30	向野池遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	市2000『向野池遺跡』、市2001『向野池遺跡発掘調査報告書』、市2002『向野池遺跡発掘調査報告書』、市2006『向野池遺跡発掘調査報告書』
31	北押川Ｂ遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	市2008『北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』、市2009『北押川Ｂ遺跡・北押川Ｃ遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』
32	北押川Ｃ遺跡	集落	縄文・奈良・平安	市2003『北押川Ｃ遺跡発掘調査報告書』、市2008『北押川Ｃ遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書』、市2009『北押川Ｂ遺跡・北押川Ｃ遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』
33	御坊山遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安・近世	市2002『御坊山遺跡発掘調査報告書』、市2008『北押川Ｃ遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書』
34	上堤池遺跡	集落	縄文・古代・中世・近世	市1973『上堤池遺跡』
35	開ヶ丘狐谷遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安	市2002『開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2002『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
36	開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安・中世	市2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
37	開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安	市2003『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』、市2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』、市2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
38	開ヶ丘中山Ⅰ遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安	市2002『開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
39	池多東遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安・近世	市2002『境野新南Ⅱ遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』、市2009『北押川Ｂ遺跡・北押川Ｃ遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』
40	開ヶ丘中山Ⅲ遺跡	集落・生産	縄文・奈良・平安	市2002『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
41	開ヶ丘中遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安	市2002『開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』、市2007『開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書』
42	開ヶ丘中山Ⅳ遺跡	集落・生産	旧石器・縄文・奈良・平安	市2001『開ヶ丘中山Ⅳ遺跡発掘調査報告書』、市2002『開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2002『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』、市2003『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
43	野下・新開遺跡	集落	旧石器・縄文・奈良・平安	市1985『野下遺跡発掘調査概要』、財2016『野下・新開遺跡発掘調査報告』
44	平岡遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・古代	財2015『平岡遺跡発掘調査報告』
45	二本榎遺跡	集落・古墳	縄文・古墳・古代・中世	市2012『二本榎遺跡発掘調査報告書』、市2015『二本榎遺跡確認調査報告書』
46	下邑遺跡	散布地・集落	縄文・古代・中世・近世	
47	鶴ヶ城跡	城館	戦国	
48	下邑東遺跡	集落	飛鳥～平安・中世・近世	堀内大介1998「婦中町下邑東遺跡出土の高台付平瓶」『大境』第19号
49	添ノ山古墳群	古墳	弥生～古墳	婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
50	千坊山遺跡	集落・塚・屋敷	旧石器・縄文・弥生・古代・中世・近世	婦1995『千坊山遺跡（１）』、婦1996『千坊山遺跡（２）』、婦1998『千坊山遺跡（３）』、婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
51	各願寺前遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・平安・鎌倉・室町・近世	婦1994『富山県婦中町各願寺前遺跡発掘調査報告』、婦2004『富山県婦中町各願寺前遺跡発掘調査報告Ⅱ』
52	新町Ⅱ遺跡	集落	縄文・古代・鎌倉・室町・近世	婦1985『富山県婦中町新開遺跡・新町Ⅱ遺跡』、婦1986『新町Ⅱ遺跡の調査』
53	王塚古墳	古墳	古墳（前）	富大1990『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告』
54	勅使塚古墳	古墳	古墳（前）	財2003『勅使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』
55	向野塚墳墓	墓	弥生～古墳	婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
56	六治古塚墳墓	墓	弥生・古代・中世・近世	婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
57	鏡坂墳墓群	墓	弥生（終）・中世	婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
58	鏡坂Ⅰ遺跡	集落	旧石器・縄文・古代・中世	婦2000『富山県婦中町外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』
59	鍛冶町遺跡	集落	弥生・古墳・古代・中世・近世	婦2003『富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告』
60	蓮花寺遺跡	社寺	古墳・室町	婦1984『蓮花寺遺跡の調査』
61	富崎城跡	集落・城館	縄文・弥生・室町・戦国・安土桃山・近世	県2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
62	富崎墳墓群	墓	縄文・弥生・古代・中世・近世	婦2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
63	富崎遺跡	集落・墓	弥生・古墳・古代・中世・近世	市2008『富崎遺跡発掘調査報告書』
64	上吉川Ⅰ遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	婦2000『県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査』
65	砂子田Ⅰ遺跡	集落	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	婦2004『砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』、財2005『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』、婦2005『砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』
66	道場Ⅰ遺跡	集落	奈良・平安・鎌倉・室町・近世	財2004『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』
67	道場Ⅱ遺跡	集落	鎌倉・室町・近世	財2004『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』
68	堀Ⅰ遺跡	塚・墓	鎌倉・室町・近世	婦1996『富山県婦中町堀Ⅰ遺跡発掘調査報告』
69	中名Ⅰ遺跡	集落	古墳・古代・鎌倉・室町・戦国・近世	財2003『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』
70	中名Ⅱ遺跡	集落	古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・近世	婦1995『富山県婦中町中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』、財2002『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
71	中名Ⅴ遺跡	集落	奈良・平安・室町・戦国・近世	財2003『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』、財2005『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
72	中名Ⅵ遺跡	集落	古墳・古代・鎌倉・室町・近世	財2005『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
73	持田Ⅰ遺跡	集落	奈良・平安・鎌倉・室町・近世	財2002『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』

※市＝富山市教育委員会、婦＝婦中町教育委員会、富大＝富山大学、財＝（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、県＝富山県埋蔵文化財センター

氾濫平野にも集落が形成され始める（県財団 2005）。

飛鳥白鳳～平安時代　飛鳥白鳳～平安時代には、呉羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺に須恵器窯、瓦窯、土師器焼成遺構、炭窯、製鉄炉などが築かれ一大手工業生産地帯が広がる。須恵器窯は、飛鳥白鳳時代に操業された県史跡金草第一古窯跡 (11)（富山市教委 1970）、奈良時代に操業された古沢・西金屋窯跡群 (17)（富山市教委 1988・2000b）などが知られている。市史跡栃谷南遺跡 (22) では、奈良時代の瓦陶兼業窯・灰原・掘立柱建物・粘土採掘坑・井戸跡などが発掘され、粘土採掘から土器・瓦の焼成までの一連の作業を行う生産工房があったことが分かった（富山市教委 1999a・2002e）。土師器焼成遺構は、向野池遺跡 (30)、開ヶ丘中遺跡 (41)、御坊山遺跡 (33)、西金屋遺跡 (14)、住吉Ⅳ遺跡 (10) などで確認した（2002c・2002f・2003b・2008c・2012a・2012b・2014b）。製鉄関連では、塚越Ａ遺跡 (24) で８世紀末の長方形箱型炉（富山県教委 1992）、御坊山遺跡 (33)・開ヶ丘中山Ⅲ遺跡 (40) で半地下式円形竪型炉が検出されている（富山市教委 2002d・2003b）。

花ノ木Ｃ遺跡 (12) では、８世紀後半の溝から人形・斎串の祭祀具が出土し、律令祭祀が行われていたことが明らかとなった（堀沢 2008）。そのほか、呉羽山を越える直線道路遺構として、呉羽山古道 (9) の存在が確認された（西井・小林 2005）。

井田川流域においては、左岸の平野部では、友坂遺跡 (1) で奈良時代後半の竪穴建物３棟（婦中町教委 1993）が検出されており、大宝年間創建とされる熊野神社や友坂寺の門前町の性格をもつ集落が広がっていたと考えられる（富山市教委 2019）。金屋南遺跡 (4) では、平安時代の竪穴建物棟６棟を検出した（富山市教委 1999b、2003）。羽根丘陵周辺には、大宝元（701）年開基とされる各願寺があり、その周辺に飛鳥白鳳時代の竪穴建物１棟、奈良時代の竪穴建物３棟が見つかった鍛冶町遺跡 (59) があり、各願寺の開基に関連する集落の可能性が示唆されている（婦中町教委 2003）。また、新町Ⅱ遺跡 (52) では、平安時代の掘立柱建物群が見つかっている（婦中町教委 1986）。

一方、井田川右岸では、墾田開発集落が増加し始める。砂子田Ⅰ遺跡 (65) で竪穴建物６棟、中名Ⅰ遺跡 (69) で竪穴建物 10 棟、中名Ⅴ・Ⅵ遺跡 (71・72) で竪穴建物 11 棟、道場Ⅰ遺跡 (66) で竪穴建物３棟が検出され、古墳時代以来井田川左岸地域に勢力を持つ集団が井田川右岸の墾田開発に携わった可能性が示唆されている（婦中町教委 2004・2005、県財団 2003・2004・2005）。

中世　井田川左岸にある友坂遺跡 (1) では二重にめぐる堀などを持つ鎌倉～室町時代の武家居館跡が発掘された（婦中町教委 1984・1993）（第２図）。その北東約 2.5 ㎞にある金屋南遺跡 (4) では、12 世紀～ 16 世紀にかけての大規模集落があり、14 世紀後半～ 15 世紀に鋳物生産が行われていた（富山市教委 2007b）。

井田川右岸には、文献史料に 14 世紀中頃から現れる中世荘園・宮川荘があったと推定されており、熊野神社を中心に中名Ⅰ～Ⅵ遺跡 (69～72)、持田Ⅰ遺跡 (73)、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡 (66・67) などの中世の遺跡が広がっている（婦中町教委 1995、県財団 2002・2003・2004・2005）。また中世墓である市史跡堀Ⅰ遺跡 (68) も存在する（婦中町教委 1996）。

呉羽丘陵には、天正 13（1585）年の「富山の役（佐々攻め）」で、富山城に籠る佐々成政を攻めるに際し、羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）の本陣が置かれたとされる戦国時代末期の白鳥城跡 (8) があり、東側の平野部にはその出城とされる国史跡安田城跡 (3)、大峪城跡がある。近年の研究では、白鳥城は秀吉の本陣ではなく、先遣隊の総大将であった織田信雄の本陣が置かれた可能性があるとされる（富山市郷土博物館 2010、佐伯 2017）。その他にも、神保氏の支城であった富崎城跡 (61)、平城の鶴ヶ城跡 (47)、山城の長沢東城・長沢西城などがある。（堀内）

第３章　調査成果

第１節　調査の方法

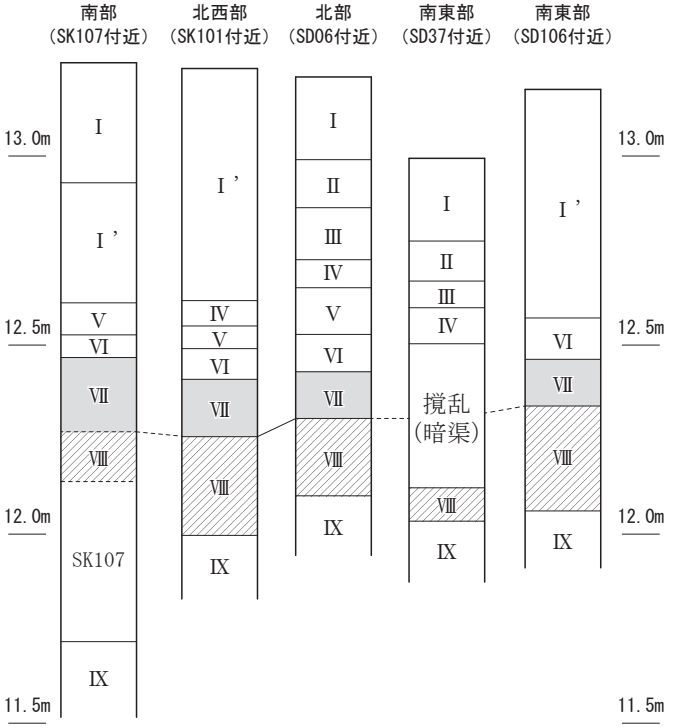
調査区は、旧プール解体工事の周囲を取り囲む形で、北西部と南東部の２箇所に分かれた。

表土掘削は重機を使用し、遺物包含層（Ⅶ層）は重機と人力を併用しながら、中世の遺構検出面（Ⅷ層）まで掘削した。遺構調査は、検出状況の空中写真撮影後に掘削を開始した。遺構番号は、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「SK21」・「SD37」のように呼称した。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板で行った。平面図の縮尺は1/20、等高線は10 cm間隔とした。遺構の写真は、デジタル 1 眼レフカメラ（NikonD850）を使用し、RAWデータ撮影をした。遺跡の全景写真は、遺構検出時と遺構掘削終了時に、ドローン（DJI社 Phantom 2 Vision+）を使用して撮影した。

遺物注記はインクジェットプリンターにて行い、遺跡記号・遺構名・日付を「TMSK SD37 №.01 191203」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタル１ 眼レフカメラ（NikonD850）を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成ともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で入稿した。

第２節　層　序

地表面の標高は13.2m前後である。表土（Ⅰ層）ないし旧プールの造成土（Ⅰ’）の下には、ブロック土を含む黒褐色土（Ⅱ層）がある。その下には褐灰色土（Ⅲ層）、灰黄褐色土（Ⅳ層）、青灰色土（Ⅴ層）があり、いずれも近世以降の水田土壌と思われる粘質土である。Ⅴ層の下面には鉄分の沈殿が認められた。Ⅱ～Ⅴ層の堆積は調査区北端で厚くなる傾向があり、地形的にやや高くなっている。Ⅴ層の下には暗紫灰色土が２層（Ⅵ層・Ⅶ層）あり、とくに下部のⅦ層はⅧ層のブロック土や炭化物を含み、中世の遺物が出土することから、中世の遺物包含層と判断された。包含層中の遺物量は調査区北側でより多く確認された。Ⅶ層の下には、中世の地山となるにぶい黄褐色シルト質土（Ⅷ層）が堆積する。層厚は20～30 cmあり、上面で中世の遺構を検出した。Ⅷ層は、古代の遺物包含層である可能性も想定されたが、調査区内では古代の遺物は出土しなかった。Ⅷ層下のⅨ層は、灰白色のシルト質土で古代の地山である。調査区内ではⅨ層上面で遺構は検出されなかった。



第４図　層序

第３節　遺　構

１．概　要

Ⅷ層の上面で中世の遺構を検出した。内訳は柵３条、礎石建物１棟、竪穴建物３基、溝13条、土坑13基、ピット77基である。旧プール跡地の遺構の状況が不明であるが、竪穴建物や土坑・ピットは調査区の北西部に明らかな偏りがあり、溝が散在する南東部と対照的である。SD37やSD125がその境界に位置している。柵・竪穴建物・礎石建物の切り合いや溝の掘り直しなどから、６段階程度の変遷があり、12世紀後半～15世紀にわたって断続的に遺構が形成されている。

なお、Ⅸ層の上面を古代の遺構確認面として調査したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

２．柵

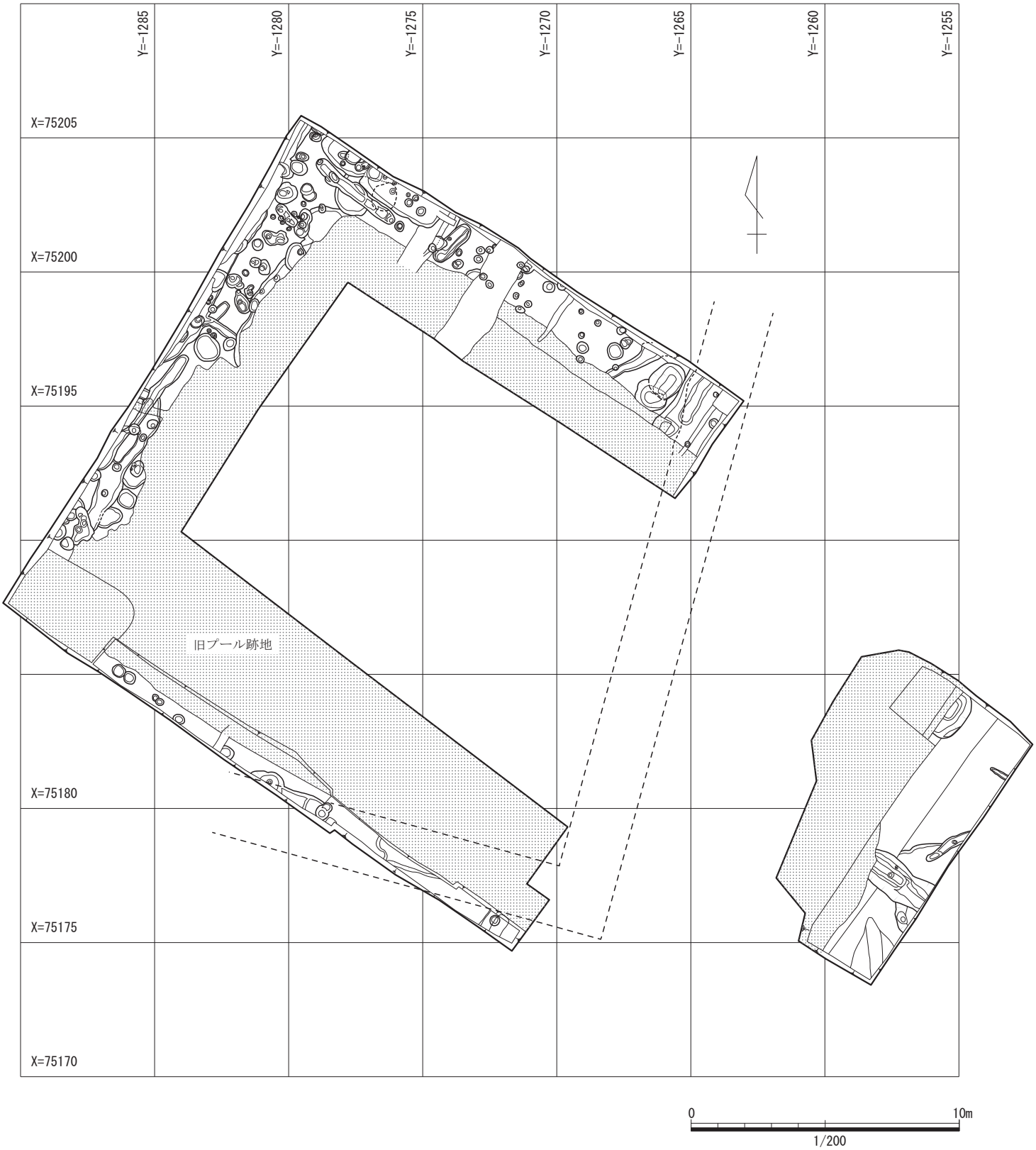
SA128（第８図）　北西部に位置する柵列で、７基のピットが並んで検出された。北西側からSP18・131・96・121・55・58・112の順で、SK16と重複するSP131・96の間にもう１基のピットが想定される。総長は9.88ｍであるが、北西側は調査区外へ延びる可能性がある。方位はＮ－125°－Ｅ、柱間距離は1.09～1.49ｍである。柱穴はSP96を除き、円形ないし楕円形基調で、規模は径25～48㎝、深さは40～57㎝である。SP96は一辺35㎝の隅丸方形で、深さ75㎝を測り、他に比べて深くなる。SK16より古く、SK85より新しい。遺物はSP18・55から土師器皿、SP55から須恵器（1）・珠洲（2）が出土した。

SA129（第８図）　北西部に位置する柵列で、６基のピットが並んで検出された。南西側からSP67・04・10・30・132・130の順に並び、方位はＮ－28°－Ｅである。総長は6.12ｍであるが、北東側は調査区外へ延びる可能性がある。柱間距離は0.83～1.60ｍである。柱穴は円形ないし楕円形で、規模は径17～73㎝、深さ33～46㎝を測る。SP10が礎石建物SB119のSP09に切られる。遺物はSP10・30・67から土師器皿が出土した。

SA133（第９図）　北西部に位置する柵列である。南西側からSP95・134・01・29の４基が並ぶ。総長は4.47ｍで、方位はＮ－35°－Ｅである。北西側調査区外の状況によっては掘立柱建物になる可能性がある。柱間距離は1.40～1.60ｍである。柱穴は円形で、規模は径27～44㎝、深さは39～50㎝である。礎石建物SB119より古く、柵SA129より新しい。遺物はSP29から土師器皿が出土した。

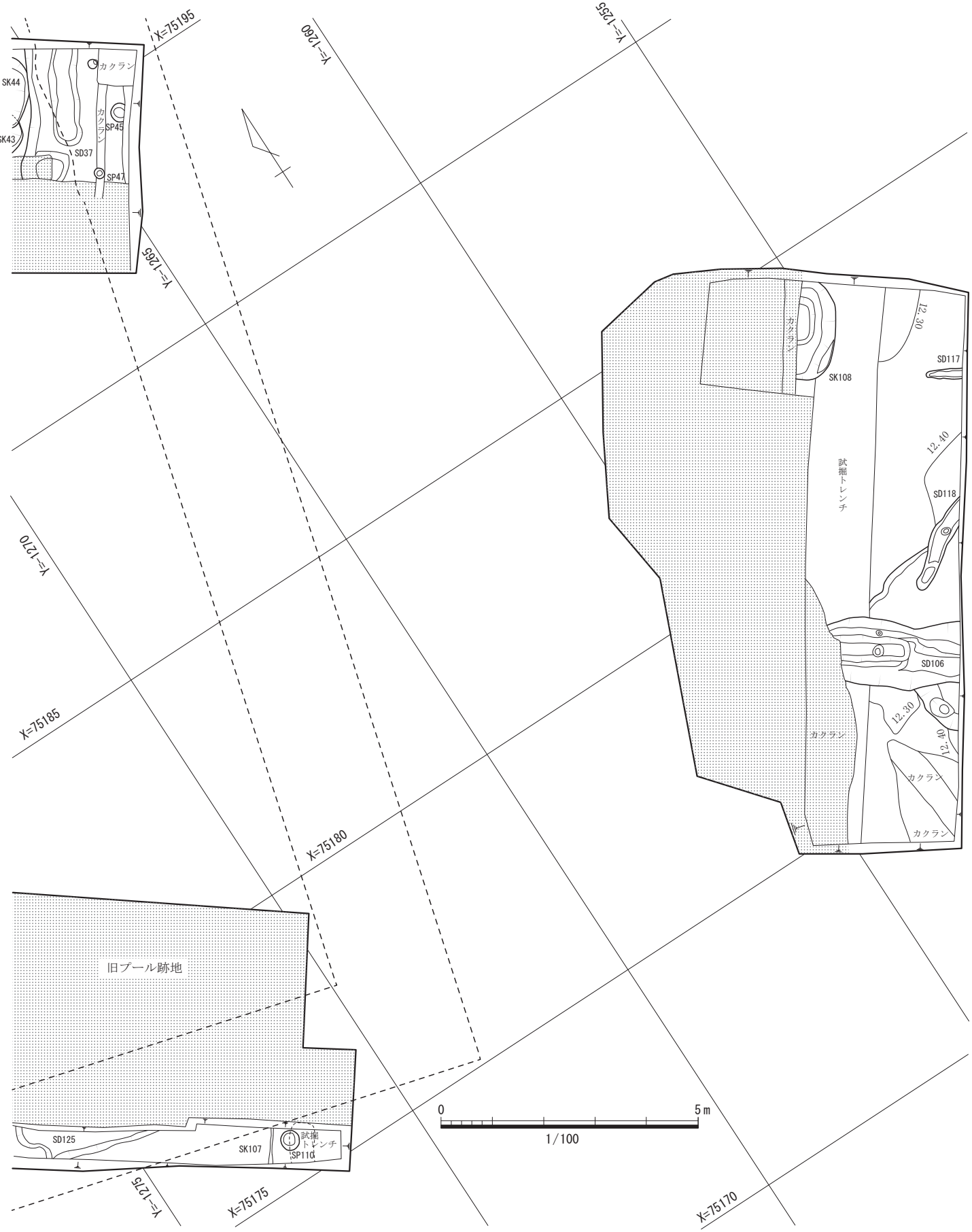
３．礎石建物

SB119（第９図）　北西部に位置する礎石建物で、５基のピットが並んで検出された。南西側からSP64・07・09・26・20の順に並び、方位はＮ－43°－Ｅである。総長は8.64ｍであるが、南西・北東側ともに調査区外へ延びる可能性がある。SP64を除く４基でやや角のある円盤状の礫が水平に置かれ、礎石建物と判断した。建物の中心は北西側調査区外にあると想定される。礫の大きさは17～26㎝である。柱間距離は2.12～2.22ｍで揃う。礎石上面の標高は最も低いSP09で12.23ｍ、最も高いSP20で12.30ｍである。柱穴は隅丸方形ないし円形基調で、規模は径49～68㎝、深さは17～54㎝である。柵SA129・SA133、竪穴建物SK21より新しい。遺物は全てのピットから土師器皿が、SP20からは珠洲が出土した。SP20から土師器皿（3）が、SP07からは鉄釘（4）が出土した。

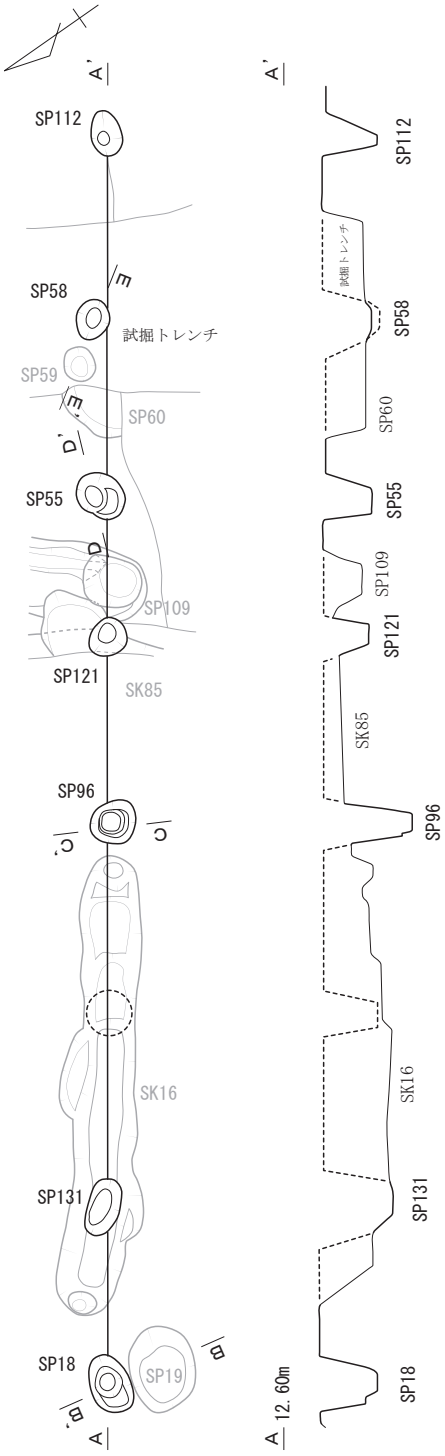

Y=-1285
Y=-1280
Y=-1275
Y=-1270
Y=-1265
Y=-1260
Y=-1255
X=75205
X=75200
X=75195
X=75180
X=75175
X=75170
旧プール跡地
0
10m
1/200

第５図　調査区全体図

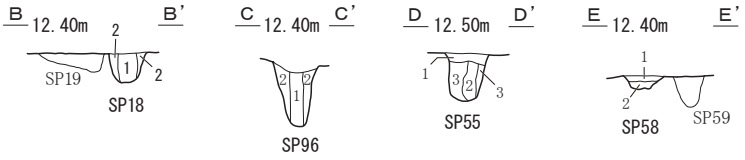
第６図　調査区遺構位置図１



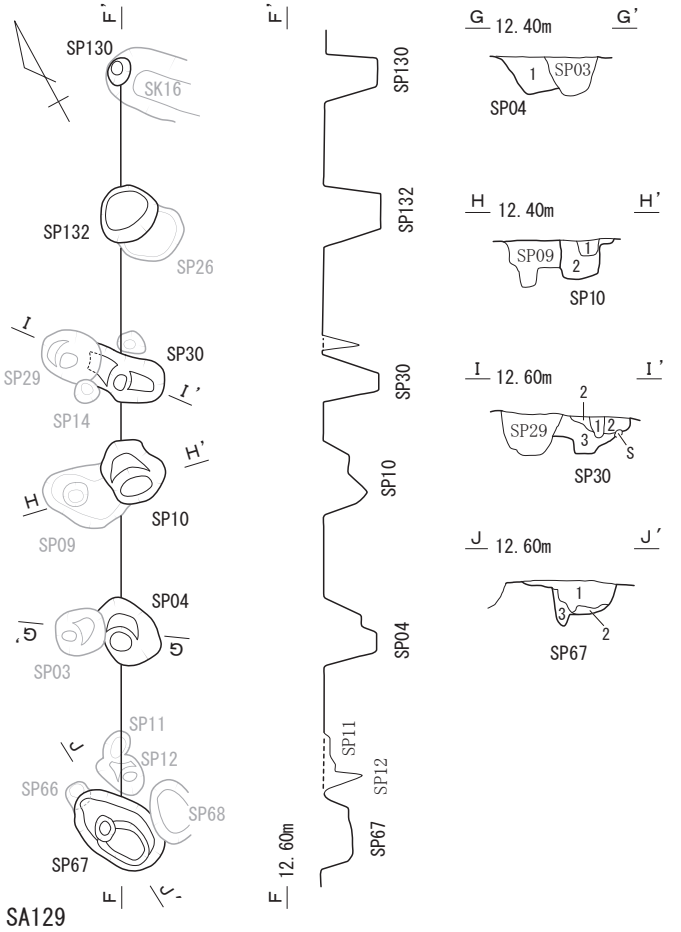
第７図　調査区遺構位置図２



SA128



SP18
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物・地山粒多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
SP55
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
2　黒褐色粘質土（10YR3/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
SP58
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
2　黒褐色粘質土（10YR3/1）　地山ブロック（φ2cm以下）少量含む
SP96
1　黒褐色粘質土（10YR3/1）　炭化物少量、地山粒少量含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

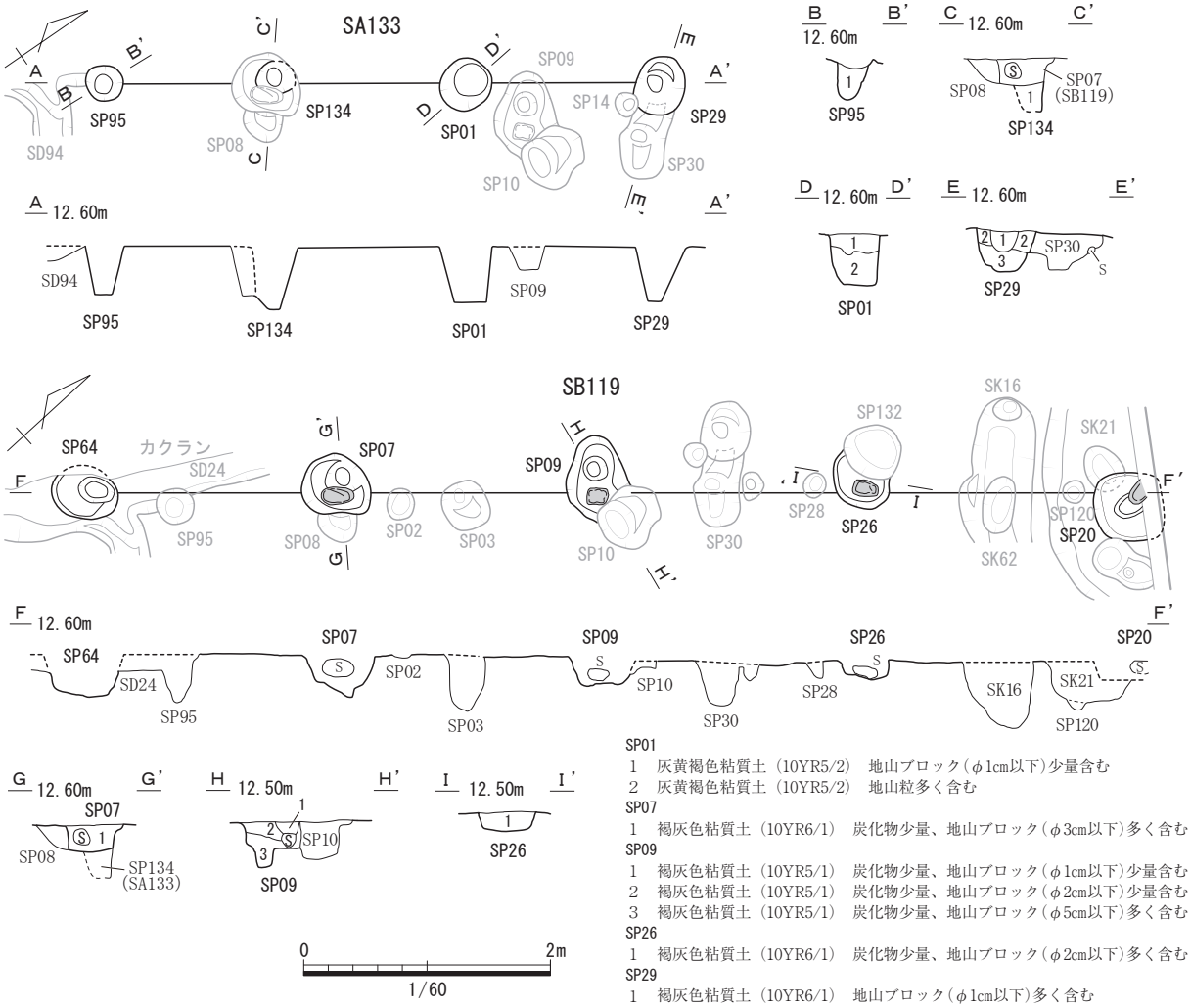


SA129

SP04
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP10
1　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
SP30
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山粒多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
SP67
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
3　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

0　2m
1/60

第８図　SA128・129 遺構図



SP01
1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　地山粒多く含む
SP07
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP09
1　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）少量含む
3　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
SP26
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
SP29
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP95
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山粒多く含む
SP134
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

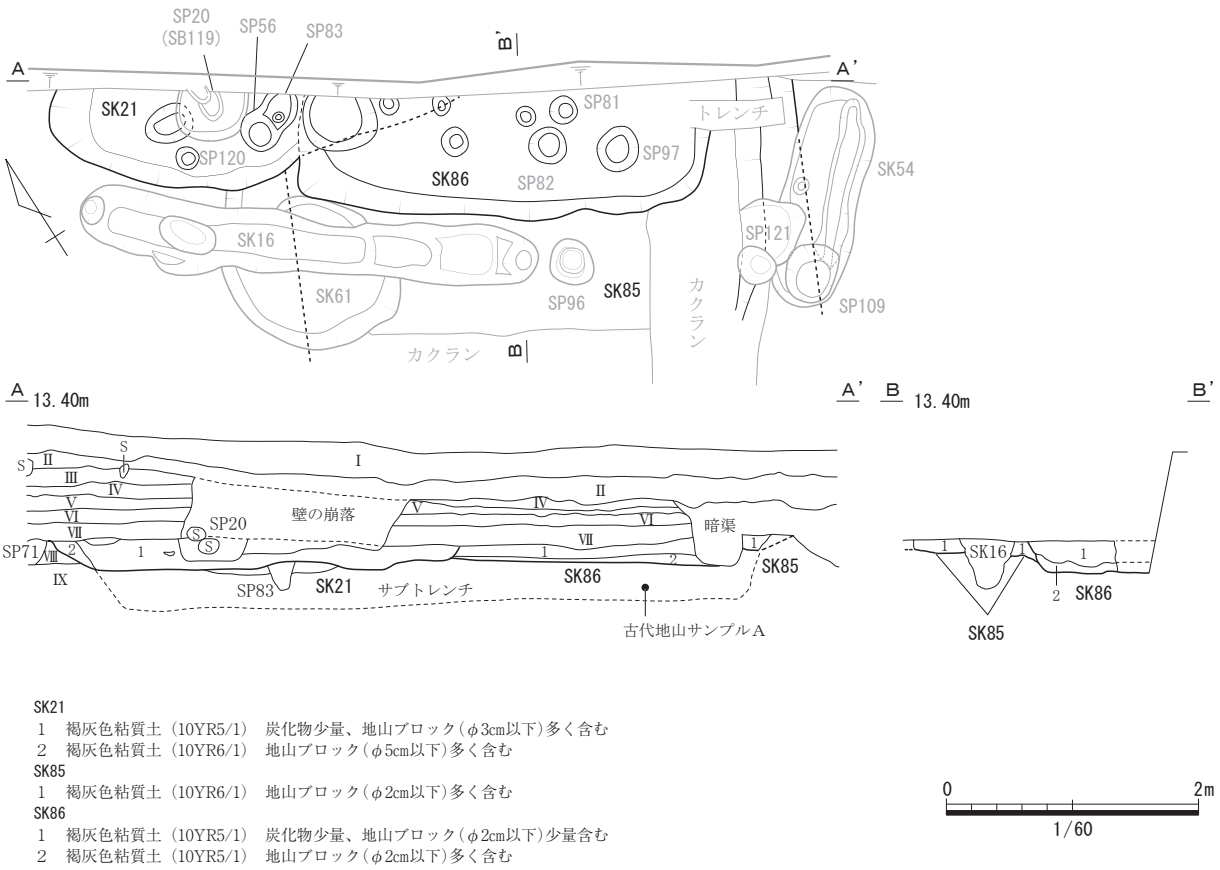
第９図　SA133・SB119 遺構図

４．竪穴建物

SK21（第 10 図）　北西部に位置する竪穴建物である。礎石建物 SB119 より古く、竪穴建物 SK85・86 より新しい。調査区壁断面をみると東側へ延びており、一辺 3.0 m程度の隅丸方形ないし不整円形になると推定される。深さは約 25 cmあり、床面は西側では概ね平坦で、東側はやや凹凸がある。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土のほぼ単層である。遺物は土師器皿（5 ～ 14）、珠洲、土錘（15 ～ 17）、刀子（18）、鉄釘（19）が出土した。出土炭化物の年代測定結果を第 4 章第 1 節に記載した。

SK85（第 10 図）　北西部に位置する竪穴建物である。柵 SA128、竪穴建物 SK21・86、土坑 SK16・61 より古い。検出状況をみると、一辺 4.1 m程度の方形になると推定される。方位は南東壁でＮ－27°－Ｅである。深さは 10 ～ 15 cmで、床面は概ね平坦である。覆土は地山ブロックを多く含む褐灰色土の単層である。遺物は土師器皿（20 ～ 27）・椀（28）、珠洲（29・30）、土錘（31 ～ 33）、鞴羽口（34）が出土している。

SK86（第 10 図）　北西部に位置する竪穴建物である。竪穴建物 SK21 より古く、竪穴建物 SK85 より新しい。人骨の出土した SK05 も本遺構より新しい。一辺 3.2 mの方形になると推定される。南西壁の方位はＮ－ 125°－Ｅである。深さは 25 cmあり、床面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿（35 ～ 39）、珠洲（40）、鉄釘（41）が出土した。



第 10 図　SK21・85・86 遺構図

５．溝

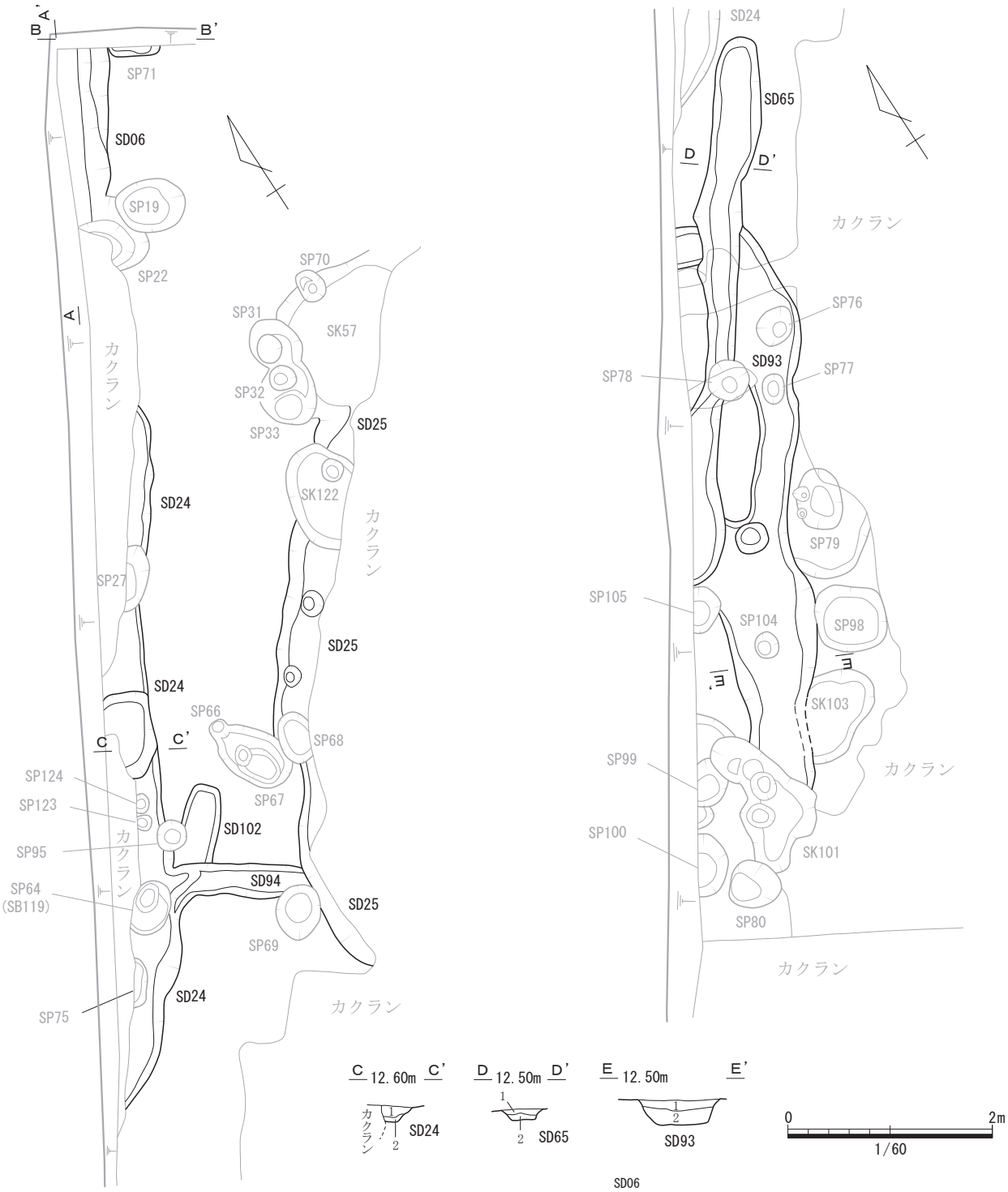
SD06（第 11 図）　調査区北隅に位置する。Ｎ－ 33°－Ｅの方位に直線的に延びる溝であるが、大部分が調査区外になり、全容は明らかでない。SP22・71 より新しい。幅は不明であるが、深さは約 35 cmあり、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿、珠洲（42）が出土した。

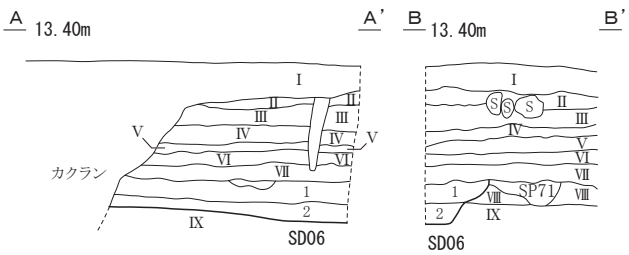
SD24（第 11 図）　調査区北西部に位置する。Ｎ－ 35°－Ｅの方位に約 7.0 ｍの長さで延びるが、両端は屈曲ないし途絶する。SD94 より新しい。撹乱のため幅は不明であるが、深さは約 15 cm、底面は概ね平坦である。覆土には地山ブロックが多く含まれる。遺物は土師器皿が出土した。

SD25（第 11 図）　調査区北西部に位置し、SD24 と並走する。約 5.3 ｍの長さで弧状に延び、両端は屈曲ないし途絶する。SD94・SK57・SK122 より新しい。撹乱のため幅は不明であるが、深さは約 10 cmで、底面は平坦である。覆土は褐灰色粘質土である。遺物は土師器皿、珠洲が出土した。

SD36（第 12 図）　調査区北東部に位置する。Ｎ－ 66°－Ｅの方位に直線的に延びるが、東端はやや蛇行する。幅は 30 ～ 85 cmあり、深さは約 12 cm、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む黄灰色土ないし褐灰色土である。遺物は珠洲（43）が出土した。

SD37（第 12 図）　調査区北東部に位置する。調査区壁断面で二度の掘り直しが確認され、覆土の 1 層を新段階、2･3 層を中段階、4 ～ 6 層を古段階と判断した。古段階はSK44 より古く、SD36 より新しい。古段階はＮ－ 26°－Ｅの方位に直線的に延び、全幅が 3.0 ｍ以上あり、北西側 0.7 ｍは深さ 20 cmの





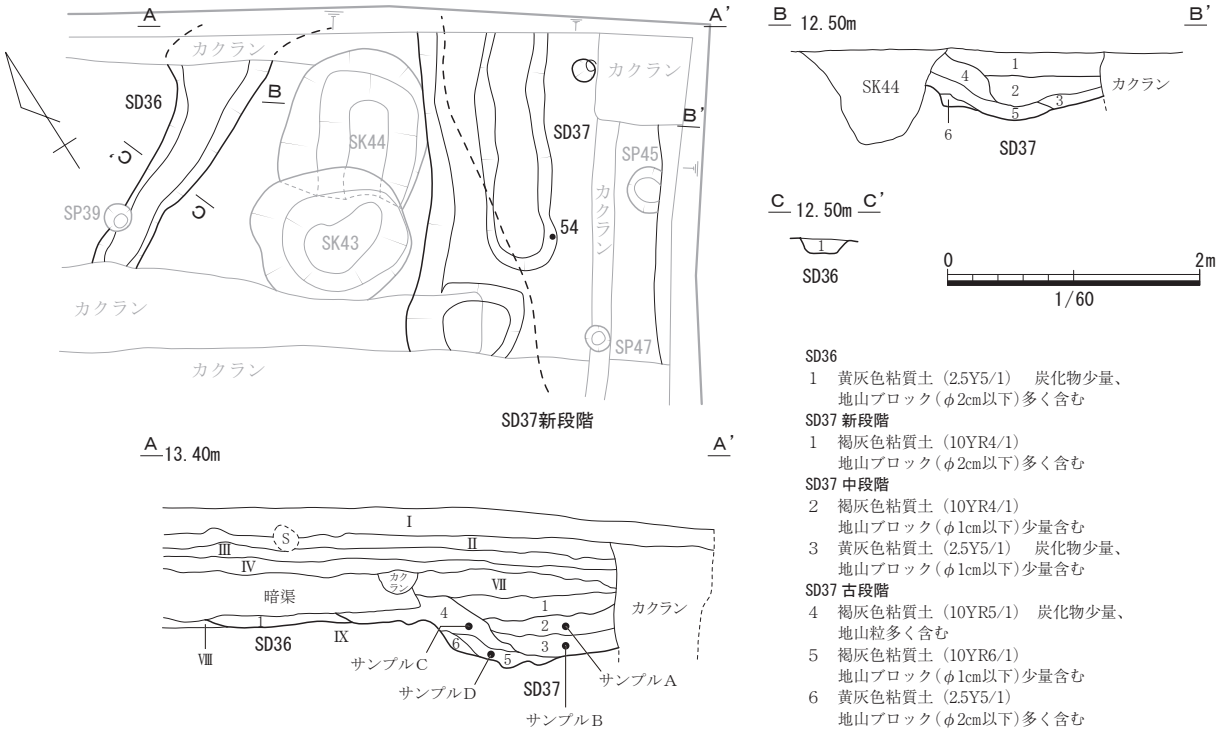
SD06
1　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

SD24
1　灰褐色粘質土（7.5YR6/2）　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR6/2）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む

SD65
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

SD93
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む

第 11 図　SD06・24・25・65・93・94・102 遺構図

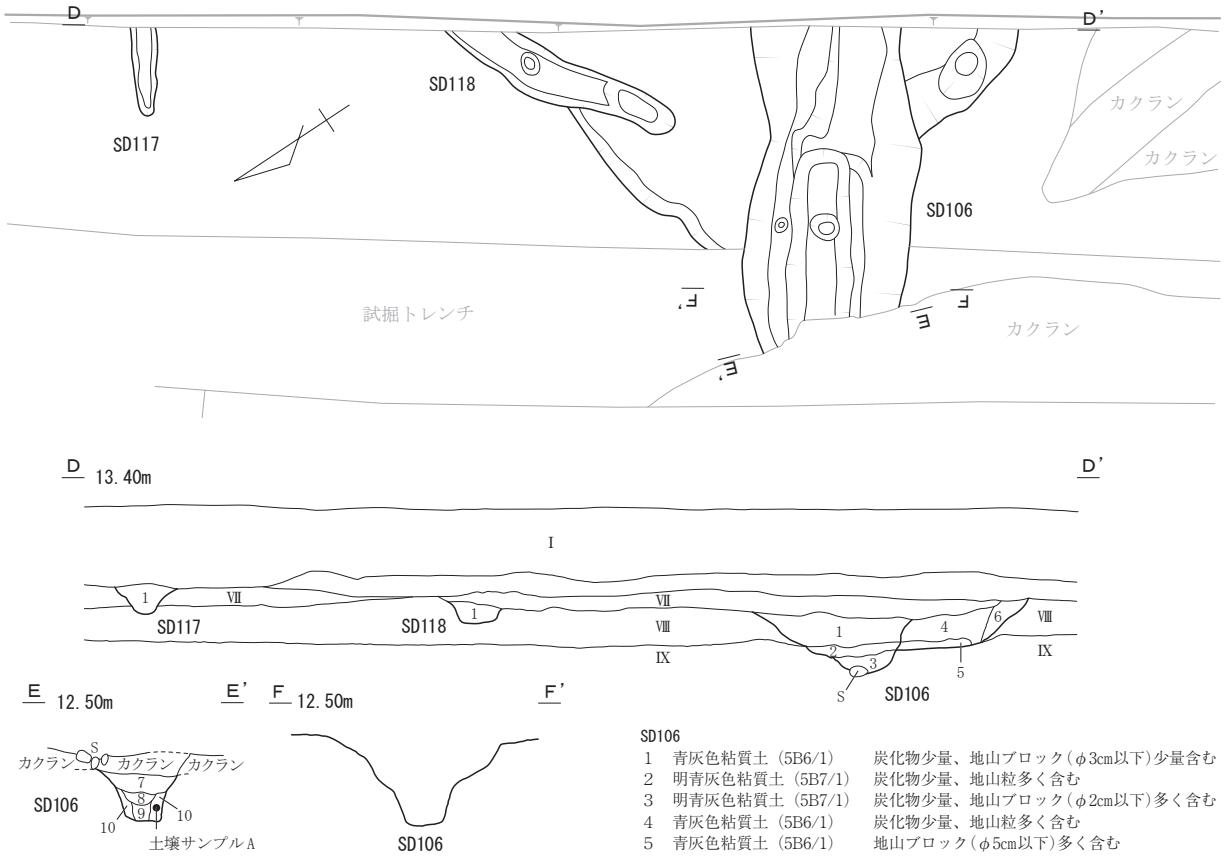


SD36
1　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む

SD37 新段階
1　褐灰色粘質土（10YR4/1）地山ブロック（φ2cm以下）多く含む

SD37 中段階
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
3　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む

SD37 古段階
4　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山粒多く含む
5　褐灰色粘質土（10YR6/1）地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
6　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）地山ブロック（φ2cm以下）多く含む

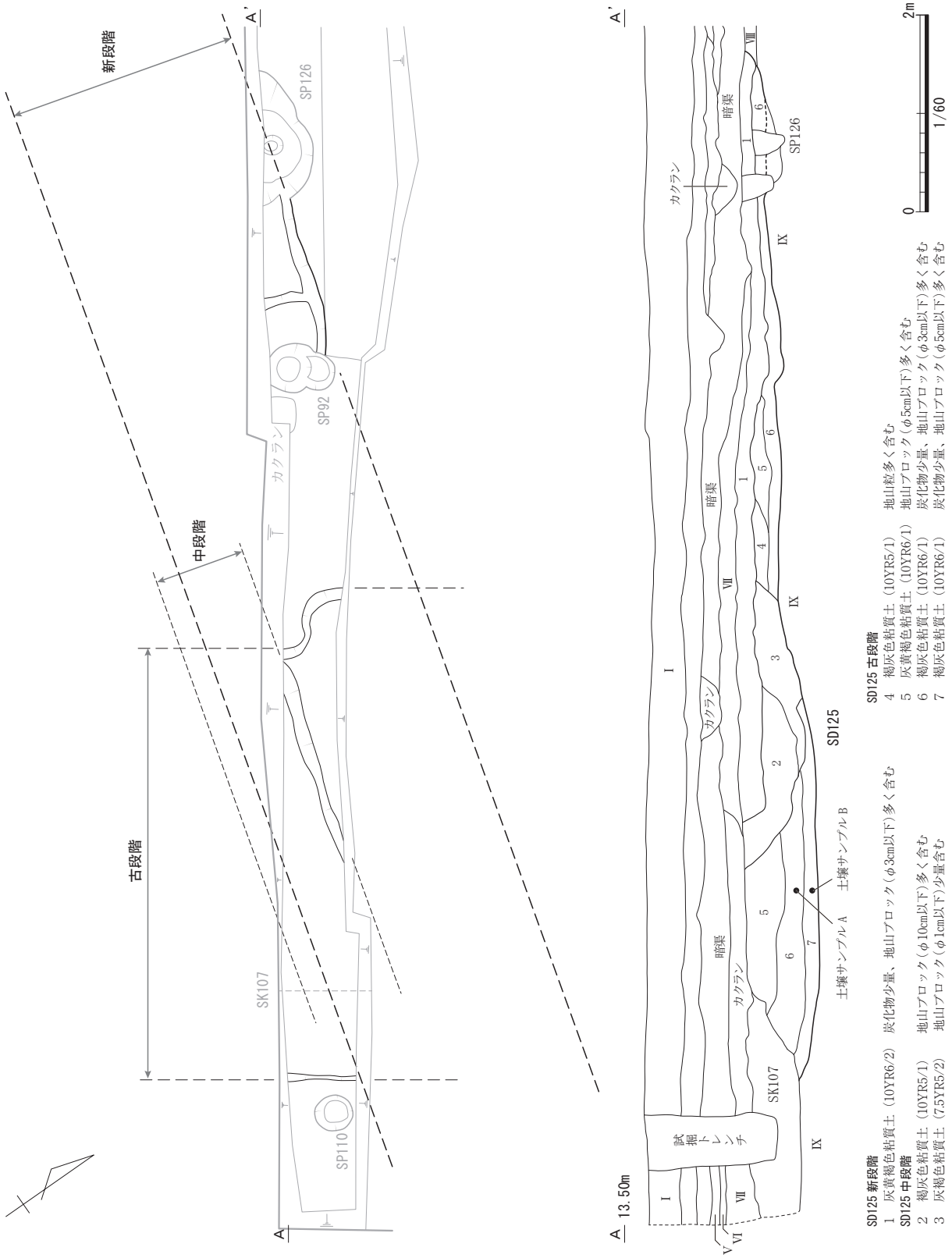


SD117
1　青灰色粘質土（5B6/1）　炭化物少量

SD118
1　青灰色粘質土（5PB6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

SD106
1　青灰色粘質土（5B6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）少量含む
2　明青灰色粘質土（5B7/1）　炭化物少量、地山粒多く含む
3　明青灰色粘質土（5B7/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
4　青灰色粘質土（5B6/1）　炭化物少量、地山粒多く含む
5　青灰色粘質土（5B6/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
6　青灰色粘質土（5B6/1）　地山ブロック（φ10cm以下）多く含む
7　青灰色粘質土（5PB6/1）　炭化物少量、地山粒多く含む
8　灰色粘質土（N6/）　地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
9　青灰色粘質土（5PB6/1）　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
10　青灰色粘質土（5PB6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

第 12 図　SD36・37・106・117・118 遺構図



第 13 図　SD125 遺構図

段があり、それより南側は深さ 50 ㎝まで深くなる。その最深部には幅 55 ㎝、深さ 5 ㎝の掘り込みがあるが、南西側は途切れる。中段階・新段階は、検出状況や断面観察によりＮ－ 17°－Ｅの方位に延びると推定される。中・新段階は規模が小さくなり、幅 2.2 ｍ前後、深さは中段階が 50 ㎝、新段階が 20 ㎝で、断面逆台形となる。遺物は土師器皿（44 ～ 56）、八尾（57）、珠洲（58 ～ 60）、土錘（61）、鉄製品の鎹（62）が出土した。八尾は新段階の 1 層から出土している。

SD65（第 11 図）　調査区北西部に位置する。Ｎ－ 37°－Ｅの方位に直線的に延びるが、北東端は途切れ、南西側は屈曲ないし途絶する。幅は 25 ～ 50 ㎝あり、深さは約 12 ㎝、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿が出土した。

SD93（第 11 図）　調査区北西部に位置する。Ｎ－ 37°－Ｅの方位を主軸として直線的に延びるが、北端は西へ屈曲し、中央部でも西へ分岐する。幅は 35 ～ 90 ㎝あり、深さは 25 ㎝、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿（63 ～ 65）が出土した。

SD94・102（第 11 図）　調査区北西部に位置する小規模な溝である。SD94 は SD24・25 より古く、SD102 より新しい。SD94 はＮ－ 122°－Ｅの方位に直線的に延び、幅 30 ～ 35 ㎝、深さ 10 ㎝である。SD102 はＮ－ 49°－Ｅの方位を主軸とし、北東端は途切れる。幅 35 ㎝、深さ 5 ㎝である。遺物は SD94 から土師器皿、SD102 から土錘（66）が出土した。

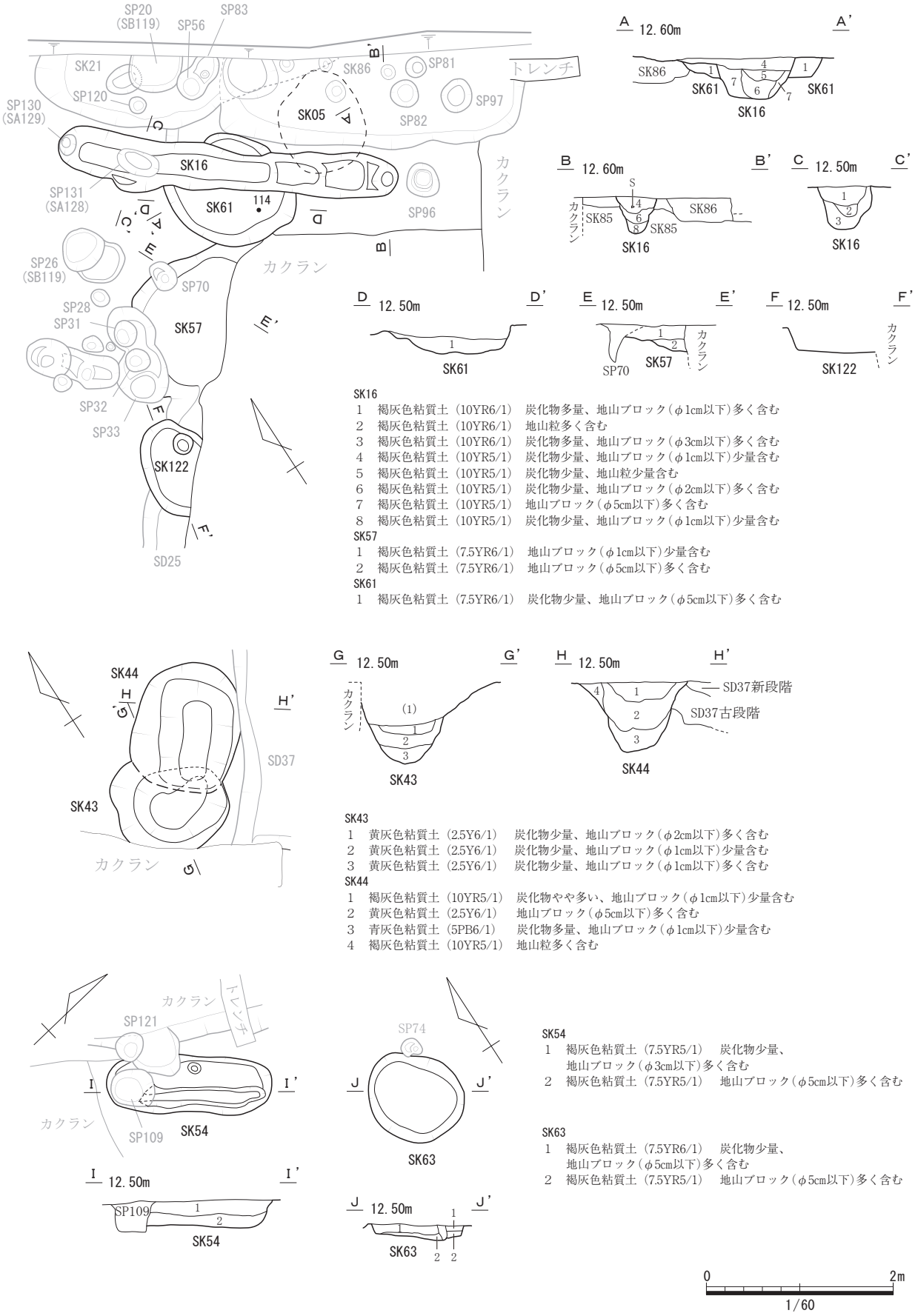
SD106（第 12 図）　調査区南東部に位置する。Ｎ－ 116°－Ｅの方位に直線的に延び、SD37・125 の古段階と直交する。幅は 1.15 ～ 1.30 ｍで、南東側には幅 90 ㎝、深さ 20 ㎝の張り出しがある。溝は南東側では断面逆台形を呈し、深さは 45 ㎝であるが、北西側では断面が薬研堀り状になり、深さ 70 ㎝と深くなる。底面標高は北西へ緩やかに下がる。覆土は青灰色粘質土を基調とし、南東側には炭化物を含む層がある。遺物は土師器皿（67 ～ 69）、珠洲（70）が出土した。

SD117・118（第 12 図）　調査区南東部に位置する小規模な溝である。SD117 がＮ－ 123°－Ｅ、SD118 がＮ－ 60°－Ｅを主軸とする。SD117 は幅 20 ㎝、深さ 25 ㎝である。SD118 は幅 20 ～ 35 ㎝、深さ 15 ㎝である。SD117 はⅦ層上面から掘り込まれるため、中世より新しい遺構と判断される。覆土はいずれも青灰色粘質土の単層である。遺物は出土しなかった。

SD125（第 13 図）　調査区南西部に位置する。調査区南西の壁断面で二度の掘り直しが確認され、覆土の 1 層を新段階、2・3 層を中段階、4 ～ 7 層を古段階と判断した。古段階は SK107 より古い。古段階の方位は SD37 古段階と同じＮ－ 26°－Ｅを示し、同一の溝となる可能性がある。中・新段階の方位はＮ－ 107°－Ｅを示し、SD37 の中・新段階と直交する。古段階は下端幅で 4.8 ｍで規模が大きく、深さは中心部で 79 ㎝、一段高くなる北寄りで 42 ㎝である。中段階は幅 1.0 ｍ、深さ 66 ㎝となり、断面はやや丸みのある逆台形になる。覆土上層の 2 層は地山の大ブロックを含む埋戻し土である。新段階は幅 2.2 ｍ、深さ 23 ㎝と浅くなり、断面は整った逆台形となる。遺物は土師器皿（71）、八尾（72）、珠洲（73）が出土した。71 は古段階の底面から出土したものである。

６．土坑

SK05（第 14 図）　調査区北東部に位置する。Ⅷ層上面での遺構検出時に、SK86 を切って確認された。径 1.0 ｍの不整円形の範囲で人骨（焼骨）が出土した。土壙墓と考えられたが、掘り込みがほとんど残存せず、上部も旧プール建設による撹乱を受けていたため、確証を得られなかった。人骨については、第 4 章第 2 節に分析結果を掲載している。人骨を取り上げるために周囲の土を掘削した際に出土した土師器皿（74 ～ 79）、珠洲、土錘（80）は、本来は重複する SK86 に帰属するものと判断される。



SK16
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物多量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山粒多く含む
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物多量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
4　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
5　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山粒少量含む
6　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
7　褐灰色粘質土（10YR5/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
8　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む

SK57
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む

SK61
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む

SK43
1　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
2　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
3　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

SK44
1　褐灰色粘質土（10YR5/1）　炭化物やや多い、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
3　青灰色粘質土（5PB6/1）　炭化物多量、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
4　褐灰色粘質土（10YR5/1）　地山粒多く含む

SK54
1　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む

SK63
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）　地山ブロック（φ5cm以下）多く含む

第 14 図　SK05・16・43・44・54・57・61・63・122 遺構図

SK16（第 14 図）　調査区北東部に位置する。長さ 3.6 ｍ、幅 50 ㎝の溝状になる土坑である。SK61・86 より新しい。Ｎ－ 125°－Ｅの方位を主軸とするが、北西端はやや北へ曲がる。深さは中央部が 55 ㎝で最も深く、南東側は緩やかな階段状に浅くなる。覆土は褐灰色粘質土を基調とし、炭化物を含む層が多い。遺物は比較的量が多く、土師器皿（81 ～ 97）、珠洲（98 ～ 100）、土錘（101 ～ 106）、鉄製品の鎹（107）が出土した。

SK43（第 14 図）　調査区北東部に位置する。SK44 と重複し、検出状況をみると SK44 より古い。1.1 × 1.2 ｍの隅丸方形に近い平面形で、深さは 94 ㎝である。覆土は黄灰色土を基調とし、上層は地山ブロックを多量に含む。遺物は土師器皿、白磁皿（108）が出土した。

SK44（第 14 図）　調査区北東部に位置する。SD37・SK43 より新しい。1.1 × 1.4 ｍの隅丸長方形と推定される。深さは 92 ㎝である。覆土は下層の 3 層が青灰色粘質土で、中層の 2 層は地山ブロックを多量に含む埋め戻し土である。SK43 を大型の柱穴とした場合には、SK44 がその抜き取り穴になることが考えられる。上層の 1 層は後世のピットの埋土の可能性があり、径 70 ㎝、深さ 20 ㎝程度のピットが想定される。遺物は土師器皿（109）、珠洲が出土した。

SK54（第 14 図）　調査区北東部に位置する。長さ 1.75 ｍ、幅 65 ㎝の隅丸長方形を呈する。南半が溝状に深く、深さは北半で 16 ㎝、南半で 35 ㎝である。長軸方位はＮ－ 44°－Ｅを示す。SP109 に切られる。覆土は褐灰色土を基調とする。遺物は珠洲（110）が出土した。

SK57（第 14 図）　調査区北西部に位置する。一辺 1.3 ｍほどの隅丸方形と推定される。検出状況をみると、SD25 より古い。深さは 21 ～ 30 ㎝で、底面は凹凸がある。覆土は褐灰色粘質土を基調とする。遺物は土師器皿、珠洲が出土した。

SK61（第 14 図）　調査区北東部に位置する。径 1.2 ～ 1.4 ｍの不整円形の平面形である。断面は逆台形で、深さは 33 ㎝である。SK16 より古く、SK85・86 より新しい。覆土は褐灰色粘質土の単層である。遺物は土師器皿（111 ～ 117）、珠洲（118・119）、土錘（120）、鉄釘（121）が出土した。

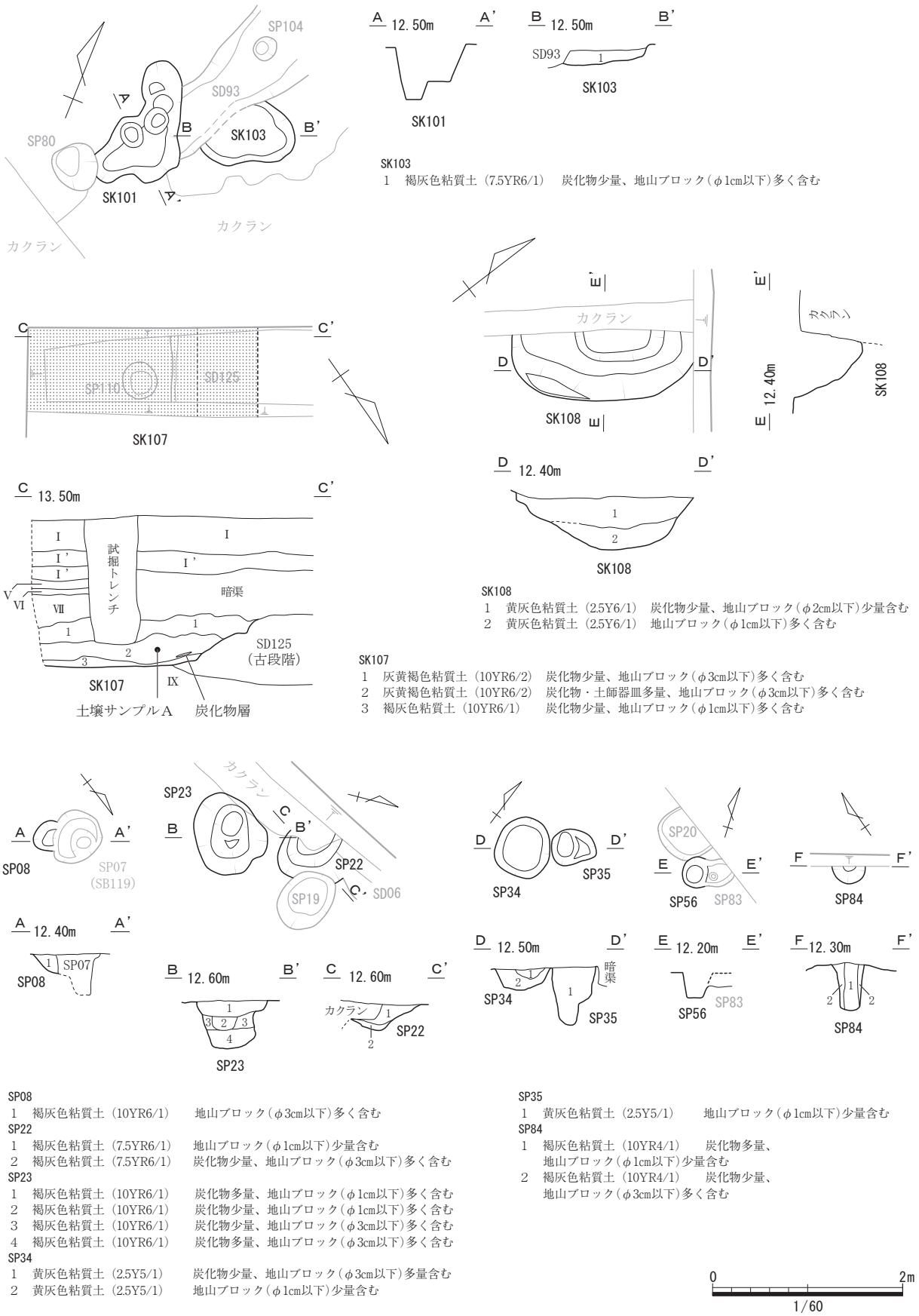
SK63（第 14 図）　調査区北西部に位置する。径 0.90 ～ 1.05 ｍの不整円形を呈する。最深部は南側があり、深さは 21 ㎝である。覆土は褐灰色粘質土を基調とする。遺物は土師器皿、八尾が出土した。

SK101・103（第 15 図）　調査区北西部に位置する。SK101 は径 0.8 ～ 1.2 ｍの不整形を呈し、深さは 43 ㎝である。底面に深さ 19 ㎝と 16 ㎝のピットがあるが、SK101 とは別のピットの可能性もある。SK103 は 0.7 × 1.0 ｍ程度の不整楕円形と推定され、深さは 18 ㎝である。覆土は褐灰色土の単層である。遺物は SK101 から須恵器（122）、土師器皿（123）が出土、SK103 からは出土しなかった。

SK107（第 15 図）　調査区南西隅に位置する。北側は旧プール建設による撹乱のため全容は不明であるが、調査区南壁をみると幅 2.3 ｍ以上の大型土坑と想定される。SD125 古段階より新しい。断面は逆台形状で、深さは 55 ㎝である。土坑内は、褐灰色土が薄く堆積した上に、灰黄褐色土が上下 2 層堆積していた。灰黄褐色土は炭化物や土師器皿を多く含み、とくに下層（2 層）で顕著であった。炭化物は西壁の立ち上がり部分に特に多く、一部は薄く層をなしていた（第 4 章第 1 節に年代測定結果を記載した）。廃棄土坑と考えられ、遺物は土師器皿（124 ～ 192）、同安窯の青磁（193・194）、砥石（195）が出土した。

SK108（第 15 図）　調査区南東部に位置する。北西側を撹乱で壊されるが、1.1 × 2.0 ｍの隅丸長方形と推定される。深さは 56 ㎝で、さらに中央部に深さ 18 ㎝の掘り込みがある。覆土は黄灰色土を基調とする。遺物は出土しなかった。

SK122（第 14 図）　調査区北西部に位置する。径 0.7 ～ 1.0 ｍの楕円形と推定され、深さは 30 ㎝である。検出状況をみると SD25 より古い。北東側に深さ 12 ㎝のピットがある。遺物は出土しなかった。



SK103
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

SK108
1　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ2cm以下）少量含む
2　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

SK107
1　灰黄褐色粘質土（10YR6/2）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
2　灰黄褐色粘質土（10YR6/2）　炭化物・土師器皿多量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む

SP08
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP22
1　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（7.5YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP23
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物多量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
4　褐灰色粘質土（10YR6/1）　炭化物多量、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SP34
1　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　炭化物少量、地山ブロック（φ3cm以下）多量含む
2　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む

SP35
1　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
SP84
1　褐灰色粘質土（10YR4/1）　炭化物多量、
　地山ブロック（φ1cm以下）少量含む
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）　炭化物少量、
　地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

第 15 図　SK101・103・107・108、SP08・22・23・34・35・84・124 遺構図

７．ピット

ピットは100基検出し、このうち柵、礎石建物のピットを除くと77 基である（第6･7･15 図、第2表）。北側に偏って分布し、周辺にはさらなる柵や掘立柱建物の存在が想定される。SP84・49・53・97 はＮ－ 117°－Ｅの方位に並び、柵になる可能性がある。SK54 に切られる位置にピットがあったとした場合、4 間の柵となり、方位は SD37 古段階に直交する。このほか、柱痕をもつ規模の大きい SP23 からは、土師器皿（198）、珠洲Ｉ期の擂鉢（199･200）、太宰府編年Ｄ期の青磁（201･202）が出土し、SD37 古段階と同時期の掘立柱建物の柱穴と推定される。SP22 からは珠洲（197）が出土した。

第２表　ピット一覧表

遺構番号	平面形	規模(cm)			覆土	備考(出土遺物、切り合い等)
		長径	短径	深さ		
SP01	円形	43	39	44	灰黄褐色土	SA133
SP02	円形	25	23	6	褐灰色土	
SP03	円形	39	36	46	褐灰色土	SP04より新しい。土師器皿
SP04	不整円形	56	42	42	褐灰色土	SA129。SP03より古い
SP07	円形	57	49	41	褐灰色土	SB119(礎石)。SP08より新しい。土師器皿
SP08	円形	32	－	22	褐灰色土	SP07より古い。土師器皿
SP09	不整円形	68	50	53	褐灰色土	SB119(礎石)。SP10より新しい。土師器皿
SP10	不整円形	50	45	33	黄灰色土	SA129。SP09より古い。土師器皿
SP11	円形	27	20	5	黄灰色土	
SP12	楕円形	41	28	32	黒褐色土	土師器皿
SP13	円形	15	14	21	灰色土	
SP14	円形	19	18	22	青灰色土	
SP15	円形	18	18	29	灰色土	
SP17	円形	34	29	27	褐灰色土	
SP18	楕円形	48	32	46	褐灰色土	SA128。土師器皿
SP19	不整円形	66	52	12	褐灰色土	
SP20	隅丸方形	55	－	25	黒褐色土	SB119(礎石)。土師器皿、珠洲甕
SP22	円形?	74	－	40	褐灰色土	珠洲鉢
SP23	不整円形	86	74	59	褐灰色土	土師器皿、珠洲鉢、青磁碗
SP26	円形?	45	－	17	褐灰色土	SB119(礎石)。土師器皿
SP27	円形?	65	－	41	褐灰色土	
SP28	円形	20	18	23	褐灰色土	
SP29	円形	44	43	46	褐灰色土	SA133。SP30より新しい。土師器皿
SP30	円形	45	36	40	褐灰色土	SA129。SP29より古い。土師器皿
SP31	円形	58	45	42	灰黄褐色土	
SP32	円形	27	24	46	褐灰色土	SP33より新しい。土師器皿
SP33	円形	63	56	41	褐灰色土	SP32より古い
SP34	円形	62	57	23	黄灰色土	土師器皿
SP35	不整円形	47	37	62	黄灰色土	土師器皿
SP38	不整円形	34	28	62	黄灰色土	土師器皿
SP39	円形	23	22	26	黄灰色土	
SP40	円形	29	26	43	黄灰色土	土師器皿
SP41	円形	44	42	12	灰白色土	
SP42	円形	24	24	20	黄灰色土	
SP45	円形	36	－	31	褐灰色土	
SP46	円形	19	17	10	黄灰色土	
SP47	円形	21	19	22	褐灰色土	
SP48	円形	44	40	18	褐灰色土	
SP49	円形?	－	－	59	黒褐･褐灰色土	土師器皿
SP50	円形?	17	－	14	褐灰色土	
SP51	円形	31	27	18	褐灰色土	
SP52	円形	33	29	8	褐灰色土	
SP53	円形	26	25	51	褐灰色土	
SP55	円形	40	34	47	黒褐･褐灰色土	SA128。土師器皿、珠洲鉢
SP56	円形	32	27	44	灰黄褐色土	土師器皿
SP58	円形	33	27	45	黒褐･褐灰色土	SA128
SP59	円形	28	25	58	黒褐･褐灰色土	
SP60	円形?	－	－	34	黒褐･褐灰色土	
SP64	円形	55	－	54	褐灰色土	SB119。土師器皿
SP66	円形	20	19	38	褐灰色土	

遺構番号	平面形	規模(cm)			覆土	備考(出土遺物、切り合い等)
		長径	短径	深さ		
SP67	楕円形	73	50	35	褐灰色土	SA129。土師器皿
SP68	不整円形	50	－	26	－	
SP69	円形	54	43	49	褐灰色土	土師器皿
SP70	不整円形	33	26	42	灰褐色土	SK57より新しい
SP71	隅丸方形?	50	－	16	褐灰色土	
SP72	円形	27	21	28	褐灰色土	
SP73	円形	16	14	13	黄灰色土	
SP74	不整円形	22	20	11	黄灰色土	
SP75	円形?	48	－	19	灰黄色土	
SP76	不整円形	42	33	35	褐灰色土	
SP77	円形	30	21	15	褐灰色土	
SP78	円形	41	41	57	褐灰色土	
SP79	不整円形	59	45	20	褐灰色土	土師器皿
SP80	不整円形	49	48	44	褐灰色土	
SP81	円形	22	22	53	褐灰色土	
SP82	円形	29	29	50	褐灰色土	
SP83	円形?	28	－	47	褐灰色土	
SP84	円形?	34	－	65	褐灰色土	土師器皿
SP87	隅丸方形	48	43	7	灰褐色土	
SP88	隅丸方形	45	44	8	灰褐色土	
SP89	円形	25	23	2	灰褐色土	
SP90	円形	30	26	8	灰褐色土	
SP91	円形	44	－	38	褐灰色土	
SP92	円形	50	－	43	褐灰色土	
SP95	円形	30	29	39	褐灰色土	SA133
SP96	隅丸方形	35	34	75	黒褐･褐灰色土	SA128
SP97	円形	36	33	47	褐灰色土	
SP98	隅丸方形	69	63	15	褐灰色土	土師器皿
SP99	円形?	48	－	32	褐灰色土	
SP100	円形?	62	－	38	褐灰色土	
SP104	円形	25	23	66	－	
SP105	円形?	46	－	49	褐灰色土	
SP109	円形	50	40	31	褐灰色土	SK54より新しい
SP110	円形	38	36	20	－	
SP111	円形	23	22	30	－	
SP112	楕円形	37	25	43	－	SA128
SP113	円形	27	24	14	－	
SP114	円形	24	20	21	－	
SP115	楕円形	24	14	12	－	
SP116	円形	31	－	16	－	
SP120	円形	18	18	42	－	土師器皿
SP121	円形	32	28	40	－	SA128
SP123	円形	15	－	34	褐灰色土	
SP124	円形	19	－	29	黒褐色土	土錘
SP126	円形	－	－	23	褐灰色土	SD125古段階より古い
SP127	円形?	－	－	19	明褐灰･褐灰色土	
SP130	円形	23	17	43	－	SA129
SP131	楕円形	45	26	57	－	SA128
SP132	円形	47	43	46	－	SA129
SP134	円形	29	27	50	褐灰色土	SA133。SB119(SP07)より古い

第４節　遺　物

１．概　要

遺物は遺構出土遺物、包含層出土遺物、表土出土遺物、調査区周辺の表採遺物に区分される。出土した土器の大部分を中世の土器が占め、土師器皿、八尾、珠洲、青白磁がある。12 世紀後半～ 14 世紀前半のもので、最も出土量が多くなるのは13 世紀である。古代の土器は須恵器がごく少量出土した。土器以外には、土製品（土錘、鞴羽口、支脚）、石製品（砥石）、鉄製品（刀子・釘・鎹）がある。

なお、中世土師器皿については本書第５章第２節や森隆氏（森 2003・2005）の分類を、珠洲については吉岡康暢氏（吉岡 1994）、中国製磁器については山本信夫氏（山本 2000）の研究成果を援用した。

２．遺構出土遺物

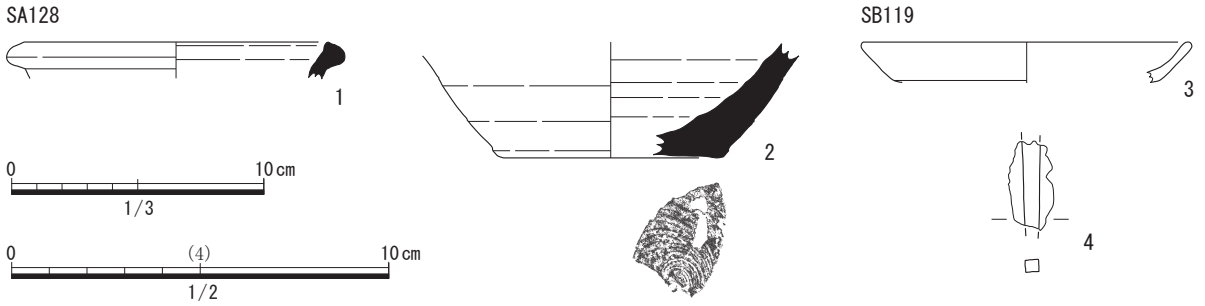
SA128（第 16 図）　1 は小型の須恵器広口壺で、口縁部は玉縁状になる。復元口径 12.0 ㎝である。2 は珠洲の鉢で回転糸切りの底部である。内面のロクロ目が強く、卸目はない。珠洲Ⅰ期のものである。いずれも SP55 から出土した。

SB119（第 16 図）　3 は SP20 から出土した中世土師器の皿である。手捏ね成形で、E1 類である。4 は SP07 から出土した鉄釘である。

SK21（第 17 図）　5 ～ 14 は中世土師器の皿である。14 を除いて手捏ね成形である。C2a 類（10）、C2b 類（8・9）、D2 類（12・13）、F2 類（11）などがあり、13 世紀後半が主体である。ロクロ成形 RA 類で底径の大きい 14 も同時期である。口径 6.0 ㎝代の小皿 5 ～ 7 は C1 類で、12 世紀後半の混入品である。15 ～ 17 は管状の土錘である。18 は鉄製の刀子、19 は鉄釘である。

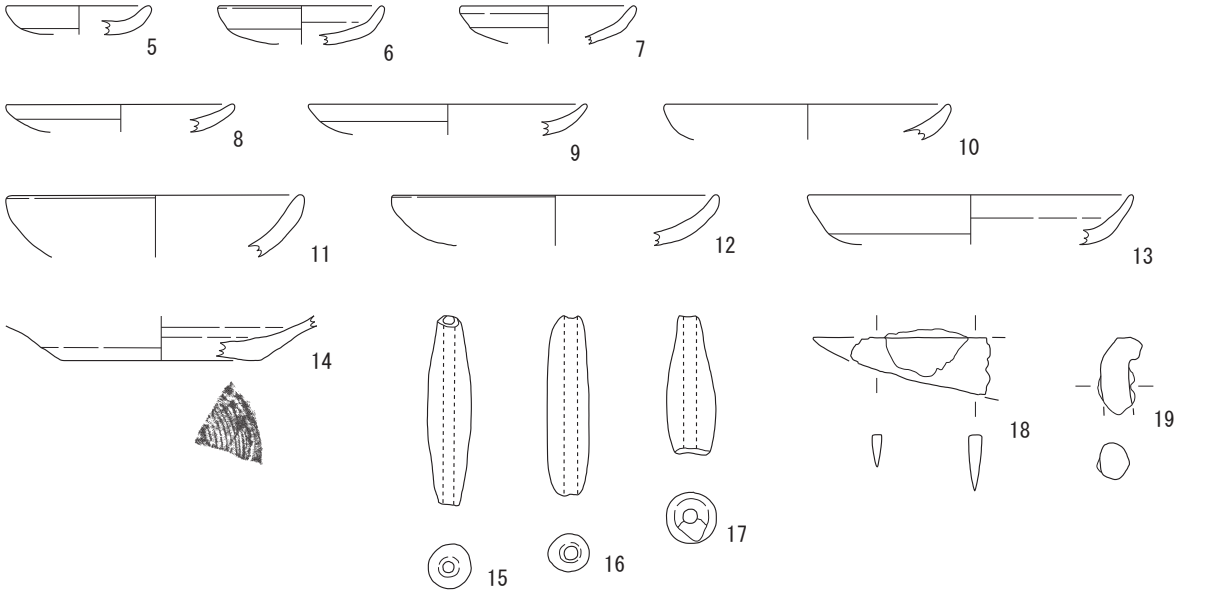
SK85（第 17 図）　20 ～ 27 は中世土師器の皿、28 が内黒の椀である。20 ～ 25 は手捏ね成形で、B 類（20）、C1 類（22・25）、C2a 類（21・23）、E1 類（24）などがある。13 世紀初頭のものである。26 ～ 28 はロクロ成形で、26・27 は RA 類、28 は内黒の RD 類である。24 の口縁部内面には煤が、27 の外面には油煙付着の痕跡がある。28 は胎土に海綿骨針を含む。29･30 は珠洲である。29 は薄手で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を方頭状に仕上げる鉢である。30 は口縁部の内端を嘴頭状に弱く突出させる壺である。いずれも珠洲Ⅱ期のものである。31 ～ 33 は管状の土錘である。34 は鞴羽口である。推定径 8.0 ㎝、孔径 3.0 ㎝ほどである。

SK86（第 17 図）　35 ～ 39 は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。B 類（35）、C1 類（37）、D2 類（38）、E2 類（36・39）があり、13 世紀前半のものである。40 は珠洲の壺である。胴部に縦方向の櫛目文を

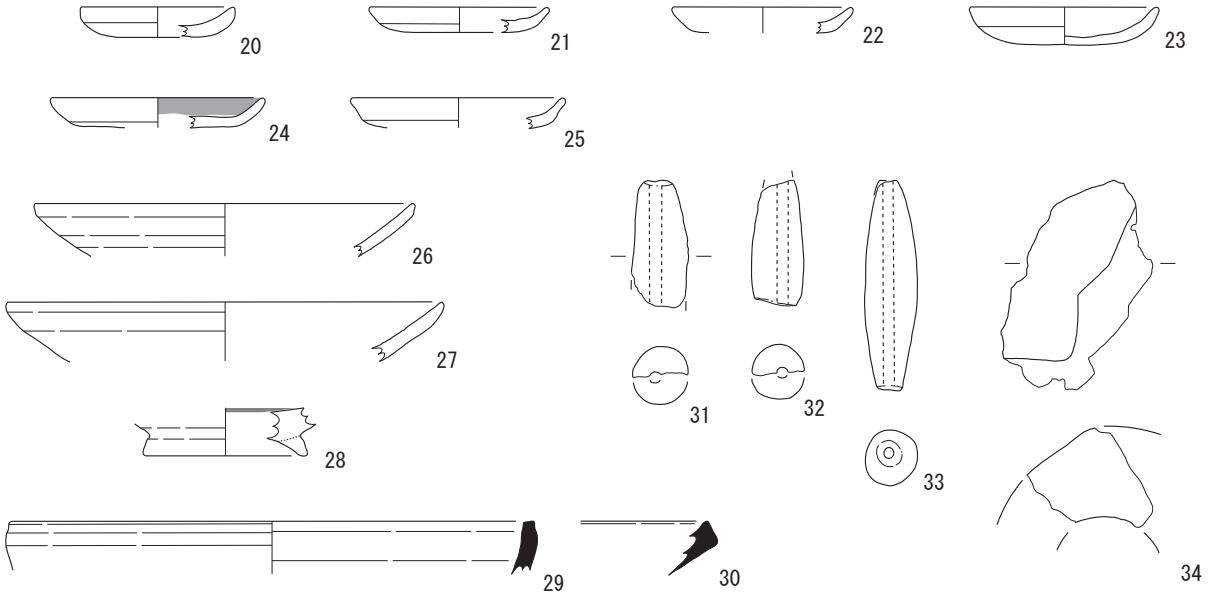


第 16 図　SA128・SB119 遺物図

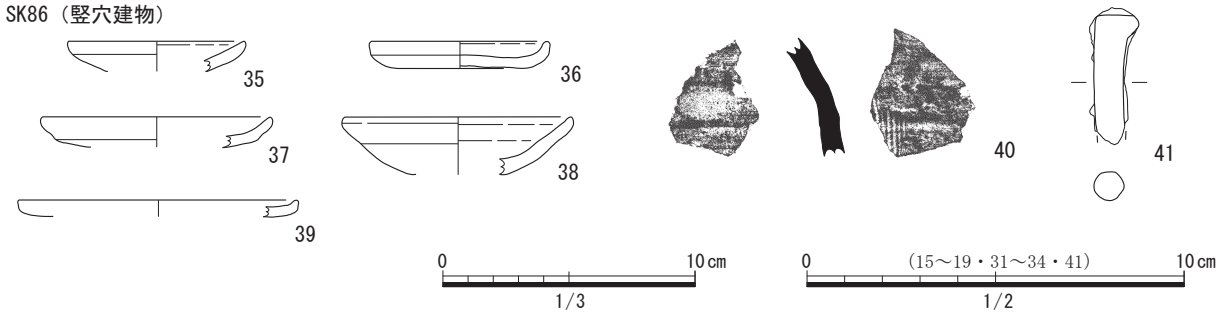
SK21（竪穴建物）



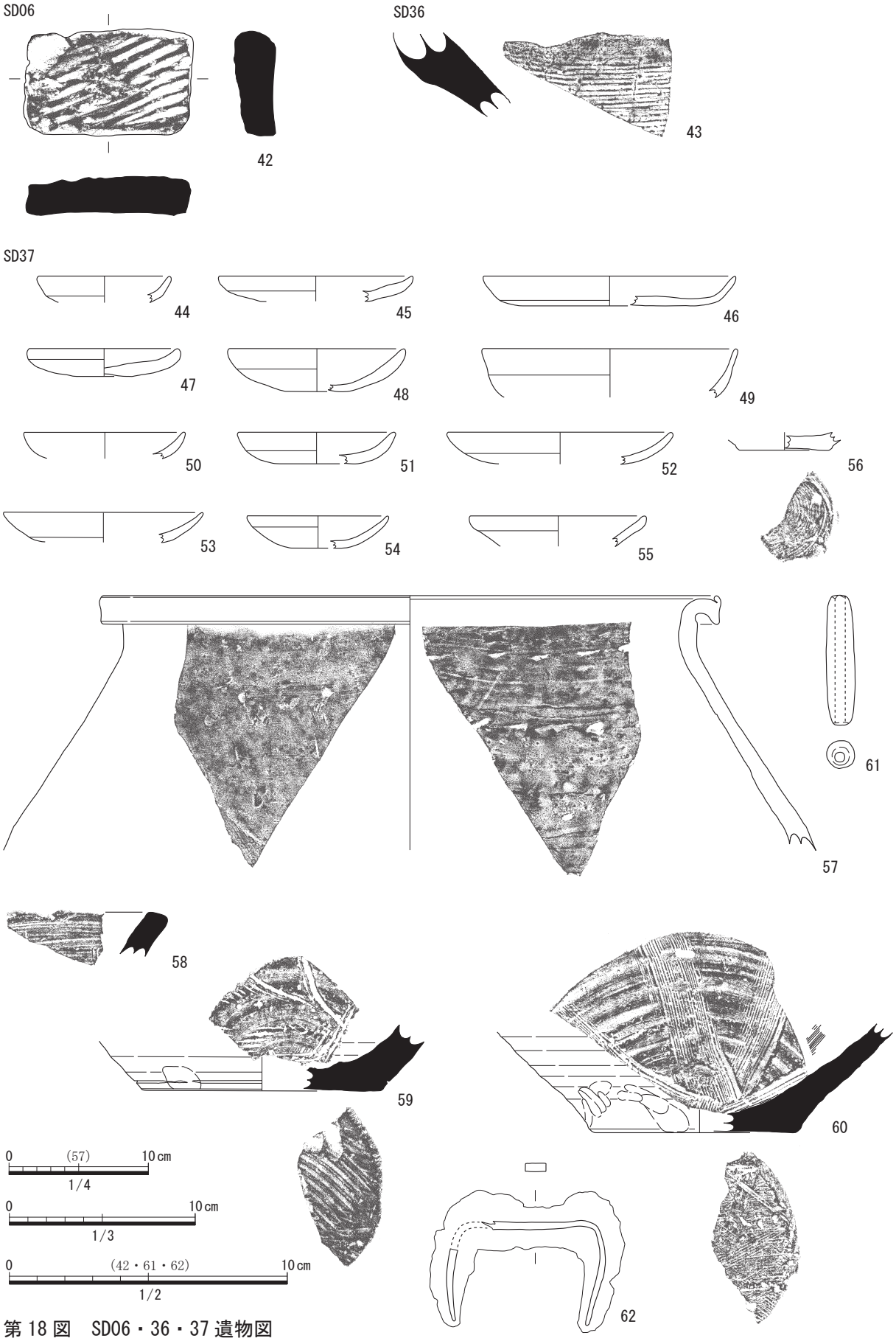
SK85（竪穴建物）



SK86（竪穴建物）



第 17 図　SK21・85・86 遺物図



第18図　SD06・36・37遺物図

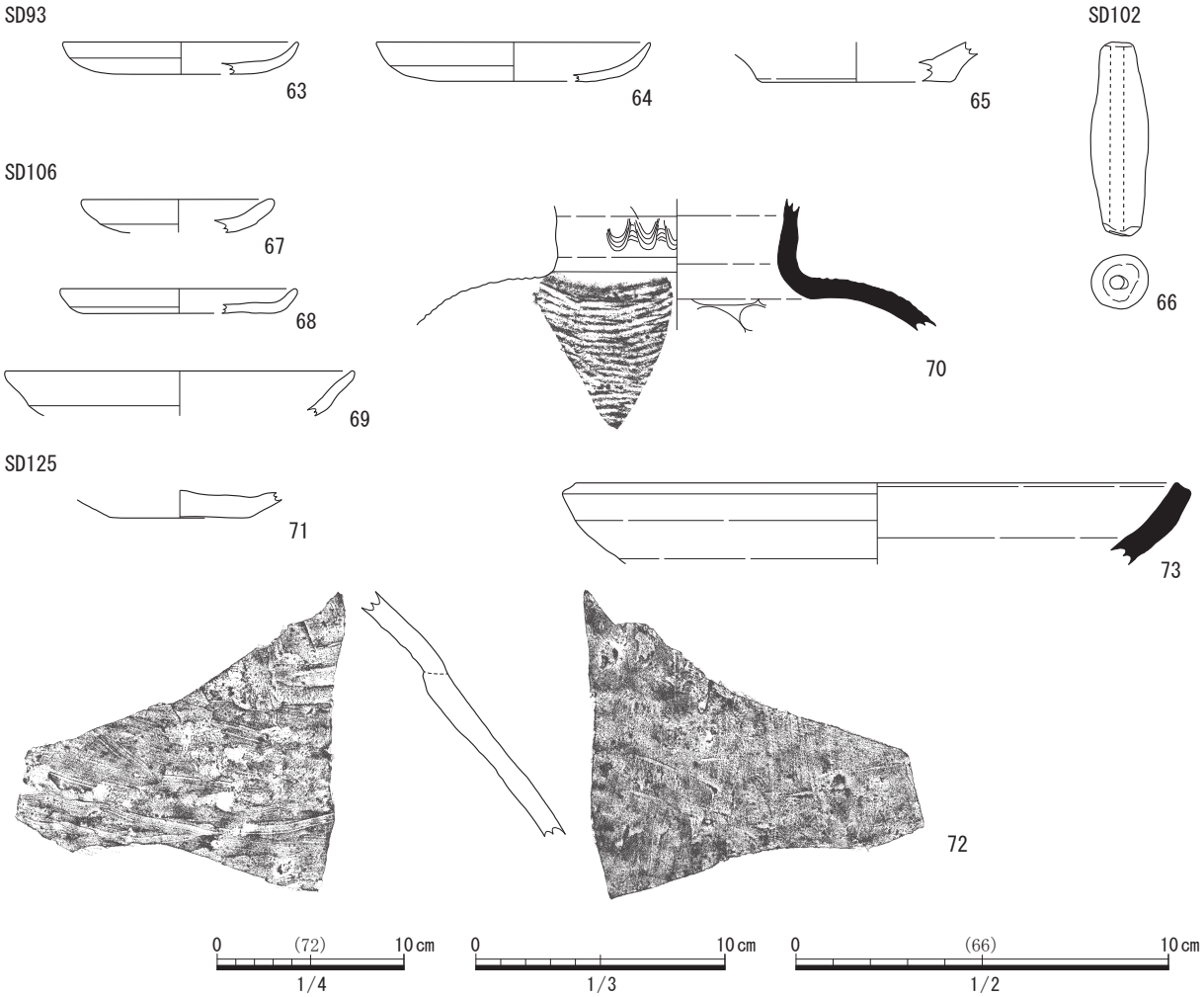
施す。珠洲Ⅱ期のものである。41 は鉄釘である。

SD06（第 18 図）　42 は珠洲の甕である。6.0 × 4.0 cmほどの長方形の胴部片を砥石のような研磨具に転用したものである。表面の叩きの凸部や長辺側の側縁が磨り減る。胎土に海綿骨針を含む。珠洲の転用砥は、糸魚川市竹花遺跡、上越市用言寺遺跡など新潟県の中世遺跡で多く確認される。

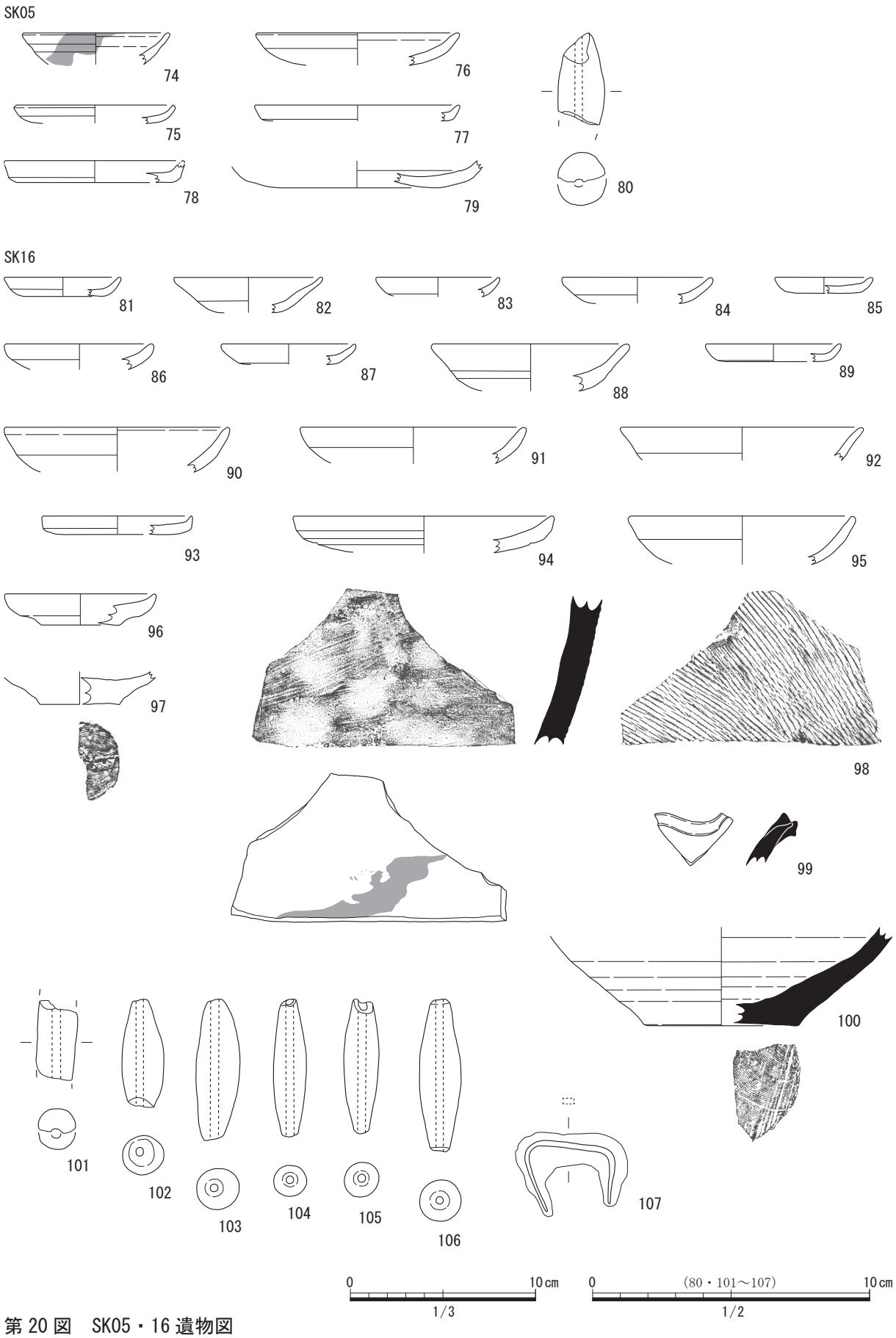
SD36（第 18 図）　43 は珠洲の甕である。厚みがあり、頸基部直下の叩きはナデ消される。

SD37（第 18 図）　44 ～ 56 は中世土師器の皿である。ロクロ成形 RB 類の 56 以外は手捏ね成形である。B 類（47）、C1 類（44）、C2a 類（50 ～ 53）、C2b 類（54・55）、D1 類（45）、D2 類（49）、E1 類（46）、F2 類（48）などがある。44 ～ 47・56 は SD37 の古段階（12 世紀末～ 13 世紀前半）、48・49・51 は中段階（13 世紀中頃）、52 ～ 55 は新段階（14 世紀前半）に位置づけられる。57 は八尾の甕で、SD37 新段階の土層から出土した。N字状口縁を呈する。肩部は外面が板状具ナデ、内面はナデであるが、内外面ともに粘土継ぎ目と指頭痕を残す。内外面褐色で、断面は灰色である。14 世紀前半のもの。58 ～ 60 は珠洲の擂鉢である。58 の口縁部は外傾し、端部は方頭を呈する。59・60 は静止糸切りの底部で、60 の体部割れ口には漆継ぎの痕跡がある。58・59 は胎土に海綿骨針を含む。58・59 は珠洲Ⅱ期、60 は珠洲Ⅳ期に比定される。61 は管状の土錘で、寸胴型である。62 は鉄製品の鎹である。

SD93（第 19 図）　63 ～ 65 は中世土師器の皿である。63・64 は手捏ね成形で C2a 類、65 はロクロ成形の RA 類である。



第 19 図　SD93・102・106・125 遺物図



第20図　SK05・16遺物図

SD102（第 19 図）　66 は管状の土錘である。

SD106（第 19 図）　67 ～ 69 は中世土師器の皿である。手捏ね成形である。C1 類（67）、E1 類（68）、D2 類（69）がある。70 は珠洲の壺である。叩打成形の壺で、頸基部の一段下がった位置から平行叩きを施す。頸部に 4 条の櫛目波状文を施す。珠洲Ⅱ期のものである。

SD125（第 19 図）　71 は SD125 古段階の底面から出土した中世土師器の皿である。ロクロ成形の RB 類である。全体に摩滅するが、内面のロクロ目が明瞭に残る。13 世紀前半のもの。72 は八尾の甕の胴部片である。板状具によるナデ調整を内面横方向、外面縦方向に施す。色調は内外面赤褐色で、断面は灰色である。73 は珠洲の片口鉢で、口縁部は内湾し端部が方頭状になる。胎土に海綿骨針を含む。珠洲Ⅱ期のもので、SD125 古段階に帰属する。

SK05（第 20 図）　74 ～ 79 は中世の土師器皿で、手捏ね成形である。C1 類（76）、C2a 類（75）、E1 類（78）、E2 類（77）、E3 類（74）がある。13 世紀前半のもので、本来は SK86 に帰属するものである。76・78 は見込みに刷毛状のナデがみられる。74 の口縁部内外面には煤が付着する。80 は管状の土錘である。

SK16（第 20 図）　81 ～ 97 は中世の土師器皿である。81 ～ 95 は手捏ね成形である。96・97 はロクロ成形で、97 は底部に回転糸切り痕を残す。A 類（95）、C1 類（81）、C2a 類（83･89）、C2c 類（86･93）、D1 類（85）、D2 類（88・90）、E1 類（82・84）、E2 類（87）、E3 類（94）、F2 類（91・92）、RC2 類（96・97）などがある。85・95・96 は 13 世紀初頭、87・90・91・93 は 13 世紀前半のもので、それぞれ SK16 と重複する SK85、SK61 に帰属するものと判断される。83･86 は 14 世紀前半のもので、SK16 はその時期の遺構と考えられる。98 ～ 100 は珠洲である。98 は甕の胴部片で、内面から割れ口にかけて煤が付着する。99 は片口鉢の口縁部で、端部は内側を嘴頭状に弱く突出させる。珠洲Ⅰ期のものである。100 は卸目のない鉢で、ロクロ目が強く、底部は静止糸切りである。Ⅰ期のものである。98・100 は胎土に海綿骨針を含む。101 ～ 106 は管状の土錘、107 は鉄製品の鋏である。

SK43（第 21 図）　108 は白磁の皿である。体部から口縁部が直線的に開き、口縁端部を釉剥ぎする口禿げのものである。白磁釉が厚く掛かる。太宰府Ｆ期の白磁皿Ⅸ類（13 世紀後半）にあたる。

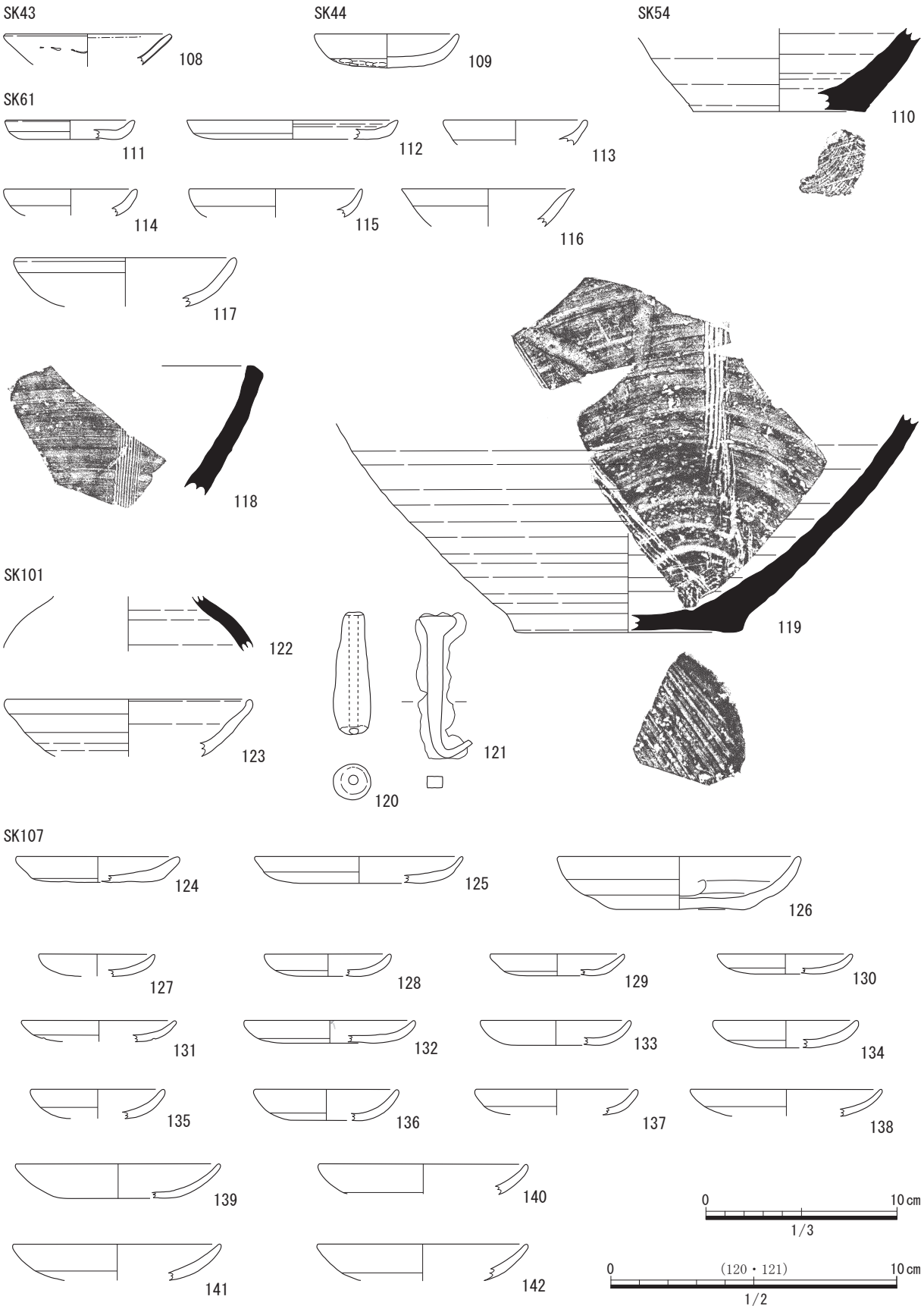
SK44（第 21 図）　109 は手捏ね成形の中世土師器皿である。C1 類で、13 世紀後半のものである。

SK54（第 21 図）　110 は卸目のない珠洲の鉢である。内面のロクロ目が強く、底部は回転糸切りである。胎土に海綿骨針を含む。珠洲Ⅰ期のものである。

SK61（第 21 図）　111 ～ 117 は中世土師器の皿である。手捏ね成形である。C1 類（114）、C2a 類（115）、E1 類（113）、E2 類（111・112）、E3 類（116）、F2 類（117）があり、13 世紀前半にまとまる。111・116 の見込みには刷毛状ナデが施される。118・119 は珠洲の擂鉢である。118 は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部を方頭状に仕上げる。13 条の卸目が浅く施される。珠洲Ⅱ期のもの。119 はロクロ目が強く、底部が静止糸切りで、6 条の卸目がまばらに入る。底部内面は使用により顕著に摩耗する。珠洲Ⅱ期のもの。118･119 は胎土に海綿骨針を含む。120 は管状の土錘、121 は鉄釘である。

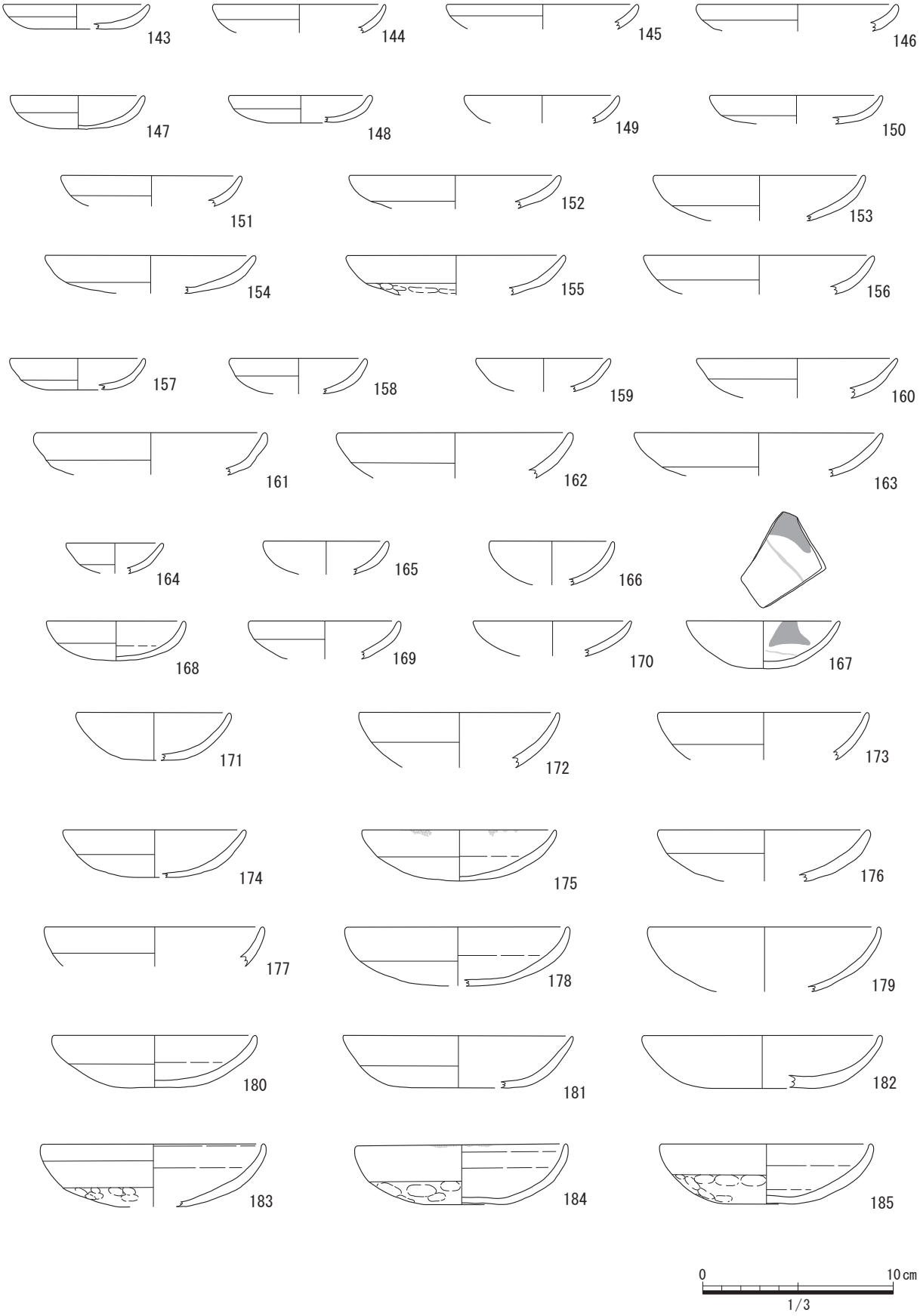
SK101（第 21 図）　122 は須恵器壺で、古代遺物の混入である。123 は中世土師器の皿で、ロクロ成形の RA 類である。14 世紀初頭のものである。

SK107（第 21～23 図）　124 ～ 192 は中世土師器の皿である。126 は A 類で、口径 12.6 ㎝の大皿である。147 ～ 156 は C1 類、125・127 ～ 142 は C2a 類、143 ～ 146 は C2b 類、186・187 は C2c 類である。174 ～ 179 は D2 類、124・188 ～ 191 は E1 類、157 ～ 163 は E3 類である。164 ～ 173 は F1 類、180 ～ 185 は F2 類である。内面に逆「の」字状ナデを施すのは 147・175・178・184・185 である。13 世紀後半にまとまりがあるが、124 ～ 126 は 12 世紀末まで遡り、重複する SD125 古段階からの混入と判断される。167 の内面には煤と灯芯痕が、175･184 の口縁部内外面には油煙が確認される。

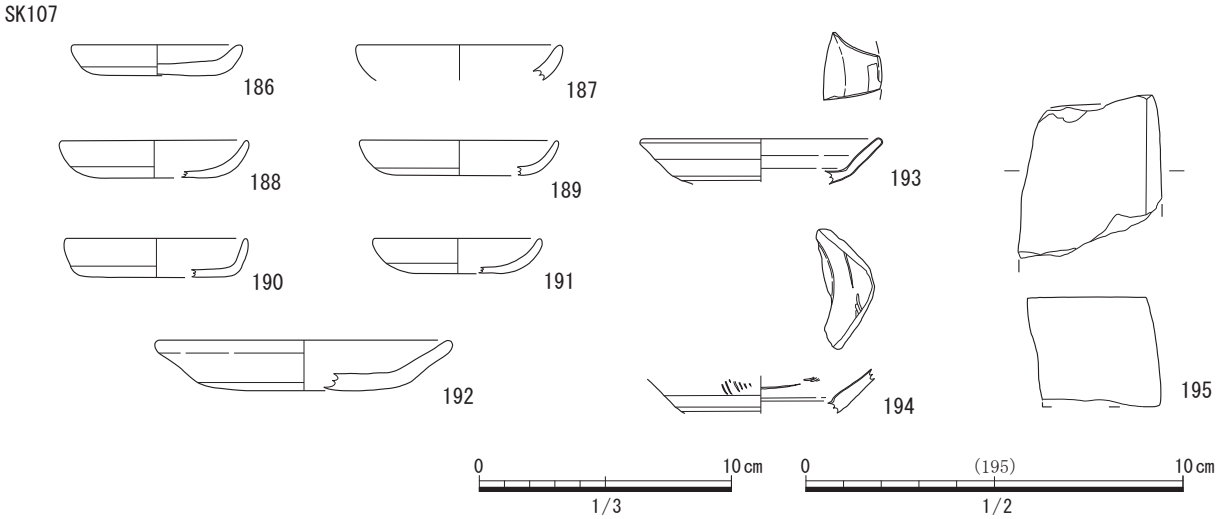


第21図　SK43・44・54・61・101・107遺物図

SK107



第 22 図　SK107 遺物図



第23図　SK107遺物図

193・194は同安窯の青磁である。193は体部が屈曲し口縁部がわずかに外反して開く皿で、内定面に櫛描文を施す。全面施釉。太宰府D期の皿Ⅰ-1b類に相当する。194は椀の体部で、内外面に櫛描文を施す。外面は無釉である。太宰府D期の椀Ⅰ-1c類に相当する。195は流紋岩製の砥石である。

SP08（第24図）　196は中世土師器の皿である。口径6.1㎝の小皿である。

SP22（第24図）　197は卸目のない珠洲の鉢である。ロクロ目がやや強く、口縁端部は内側を嘴頭状に突出させる。胎土に海綿骨針を含む。珠洲Ⅰ期のものである。

SP23（第24図）　198は中世土師器の皿で、手捏ね成形のC2a類である。12世紀後半のもの。199・200は卸目のない珠洲の片口鉢である。ともに口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は方頭を呈する。胎土に海綿骨針を含む。珠洲Ⅰ期のものである。201・202は龍泉窯の青磁である。201は渦巻状の文様を、202は花文を施文する椀で、釉調はオリーブ黄色である。202は底部と体部の境に稜をもち、高台外面を面取りする。高台の下端から内側は露胎となる。ともに太宰府D期の椀Ⅰ類。

SP34（第24図）　203は中世土師器の皿で、ロクロ成形のRB類である。口径7.4㎝で、厚みがある。

SP56（第24図）　204は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。C2a類である。

SP84（第24図）　205は中世土師器の皿で、ロクロ成形のRC2類である。歪みの大きい口縁部は口径8.0㎝で、厚みがある。底部に回転糸切り痕が残る。13世紀前半のものである。

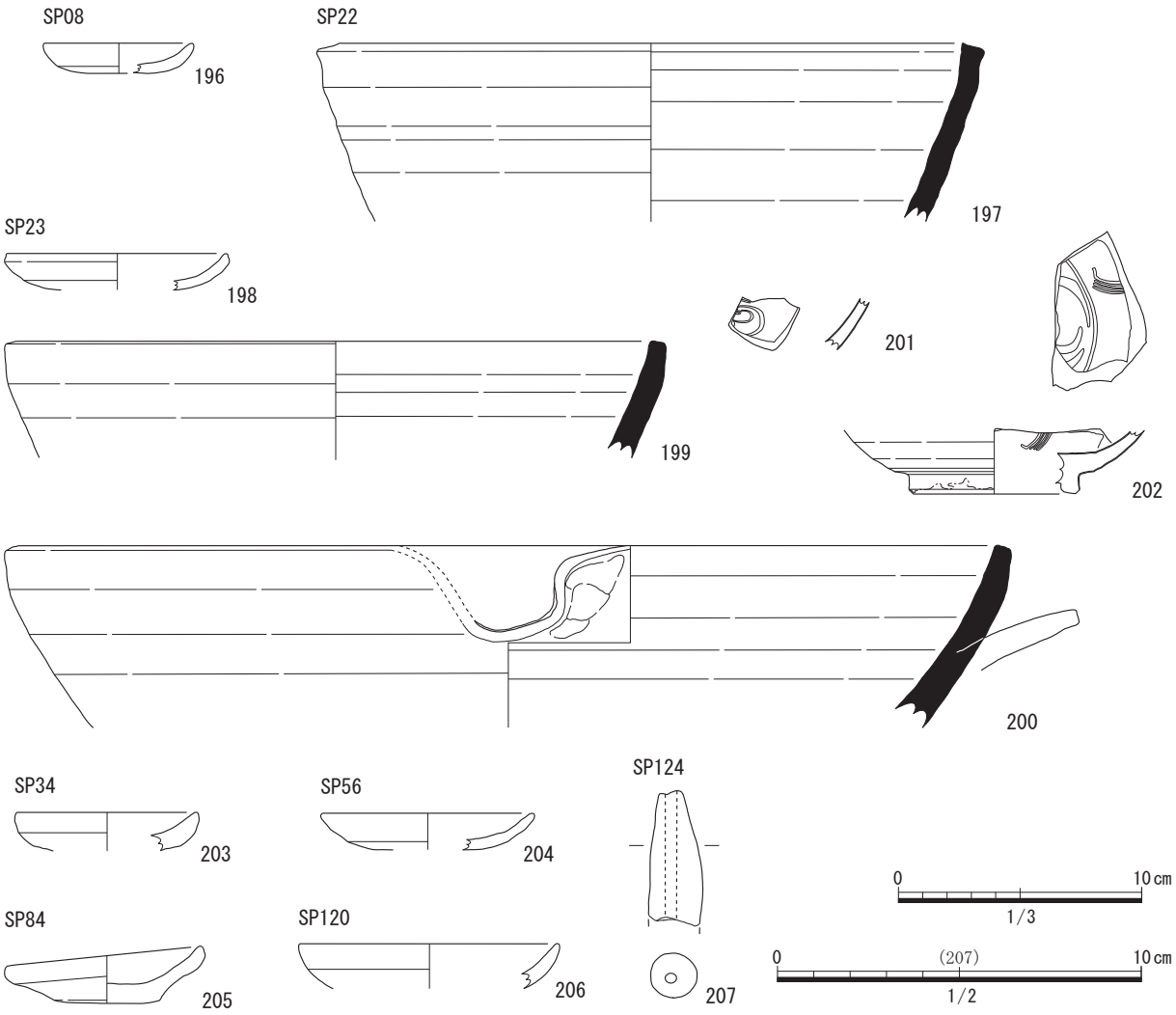
SP120（第24図）　206は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。C2c類である。

SP124（第24図）　207は管状の土錘である。

3．包含層出土遺物

中世の遺物包含層であるⅦ層から出土したものである（第25図）。調査区北東部と北西部に多い。

208～212は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。209がC1類、211・212がC2a類、208がE2類である。210はH2類で中世後期のものである。213～218は珠洲である。213は甕で、口縁端部を鋭く屈曲、垂下させる。珠洲Ⅱ期に比定される。214～218は鉢である。214は外傾し、口縁部の端面を広くとる方頭を呈し、卸目は8条以上である。珠洲Ⅲ期のものである。215はやや薄手で卸目が



第 24 図　SP08・22・23・34・56・84・120・124 遺物図

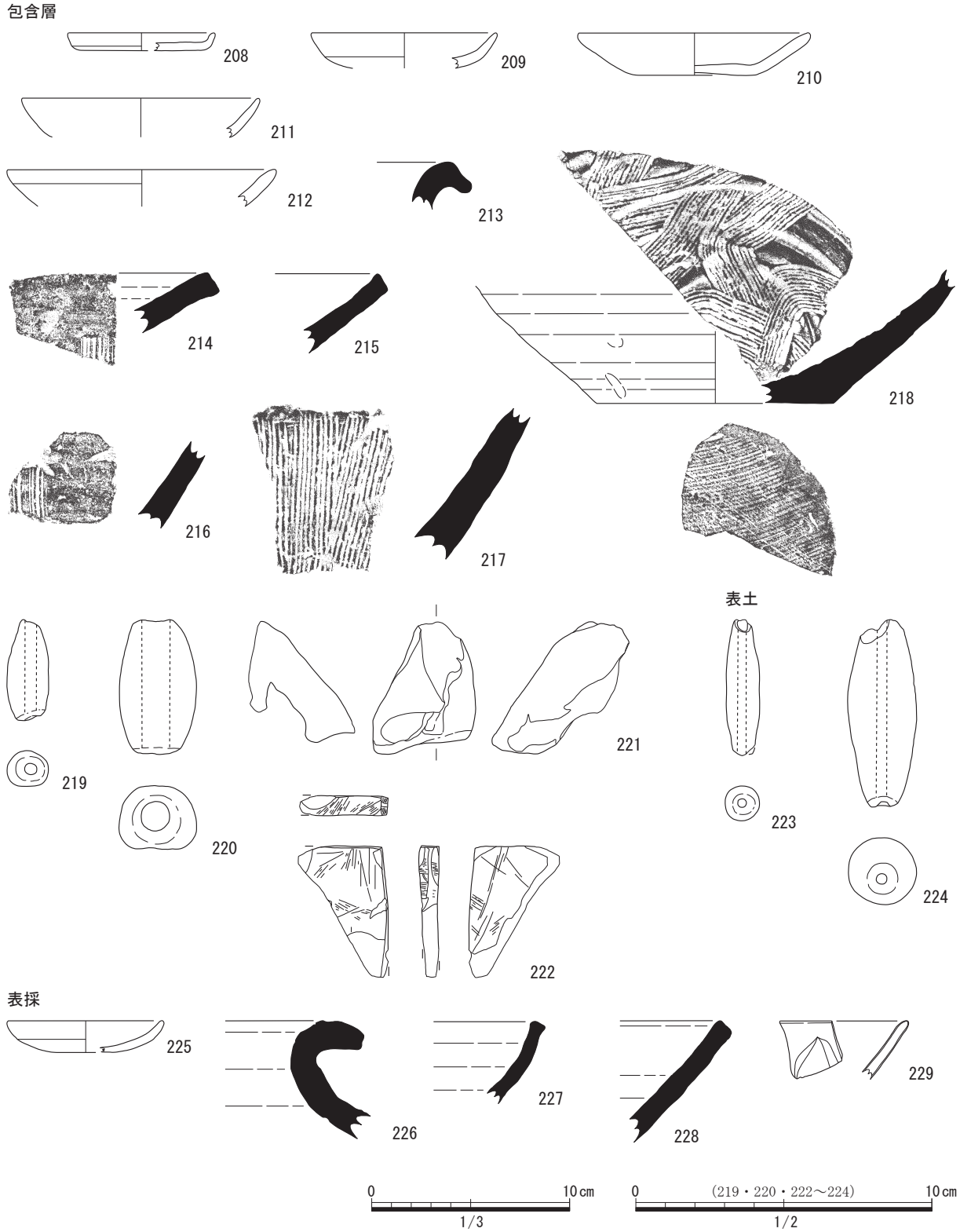
なく、口縁部は内端を嘴頭状に弱く突出させる。珠洲Ⅱ期のものである。216 は卸目が 8 条以上の体部である。217 は 10 条の卸目を密に施す体部である。218 は底径 12 ㎝で、切り離しは静止糸切りである。内面には 13 条の櫛歯原体による曲線文を装飾的に施す。珠洲Ⅰ期のものである。なお 217 を除き、いずれも胎土に海綿骨針を含む。219・220 は管状の土錘である。221 は支脚と思われる土製品である。粘土塊を手で握るように成形され､底面は指押さえによって概ね平坦に仕上げる。高さ 6.7 ㎝である。二次被熱がみられる。古代の遺物と考えられる。222 は粘板岩製の砥石である。厚さ 0.7 ㎝で、残存する全面に研磨痕がみられる。

４．表土出土遺物・表採遺物

223・224 は表土中で出土した管状の土錘である（第 25 図）。

225 ～ 229 は旧プール跡地周辺で表採した遺物である（第 25 図）。225 は中世土師器の皿で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、底部は薄手である。226 ～ 228 は珠洲である。226 は甕で、コの字状に強く外反する口頸部から、口縁部は水平に挽き出し先端を舌端状とする。227・228 は卸目のない

鉢である。227 は薄手でロクロ目が強く、内湾気味に立ち上がる口縁の端部は弱い嘴頭状を呈する。228 はロクロ目が強く、外傾する口縁部は方頭となる。226・227 は珠洲Ⅰ期で、胎土に海綿骨針を含む。228 は珠洲Ⅱ期のものである。229 は龍泉窯の青磁碗である。口縁部は直線的に開き、体部に鎬のない蓮弁文を施す。太宰府分類の椀Ⅳ類である。



第 25 図　包含層・表土・表採遺物図

第３表　遺物観察表(1)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)				内面	外面	
1	SA128	須恵器	広口壺	(12.0)	－	－	良	良	灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ	SP55
2	SA128	珠洲	鉢	－	(9.0)	－	普通 骨針	普通	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	SP55、珠洲Ⅰ期
3	SB119	土師器	皿	(13.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	SP20、E1類
4	SB119	鉄製品	釘	残長2.4	残幅0.5	残厚0.3	断面方形					SP07、重さ3.26g
5	SK21	土師器	皿	(5.6)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/3		体部指頭痕	C1類
6	SK21	土師器	皿	(6.4)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/3		指頭痕	C1類
7	SK21	土師器	皿	(6.8)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ	C1類
8	SK21	土師器	皿	(9.0)	－	－	普通 赤色粒	普通	にぶい橙 7.5YR7/4			C2b類
9	SK21	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	刷毛状ナデ		C2b類
10	SK21	土師器	皿	(11.2)	－	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
11	SK21	土師器	皿	(11.6)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部指頭痕	F2類
12	SK21	土師器	皿	(12.8)	－	－	良	良	橙 2.5Y6/6	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D2類
13	SK21	土師器	皿	(12.8)	－	－	良 褐色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/3	刷毛状ナデ		D2類
14	SK21	土師器	皿	－	(8.0)	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	RA類
15	SK21	土製品	土錘	残5.00	1.15	1.20	良 骨針	良	黒褐 2.5Y3/1	上端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.3cm、重さ5.51g
16	SK21	土製品	土錘	4.75	1.10	1.00	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	完形、ナデ		孔径0.35cm、重さ5.24g
17	SK21	土製品	土錘	3.70	1.30	1.40	良	良	にぶい黄橙 10YR7/2	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.35cm、重さ4.36g
18	SK21	鉄製品	刀子	残長3.7	残幅1.5	残厚0.4	断面三角形					重さ4.05g
19	SK21	鉄製品	釘	残長2.1	残幅0.8	残厚1.0	錆膨れで断面不明					重さ1.85g
20	SK85	土師器	皿	(6.0)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ	ヨコナデ	B類
21	SK85	土師器	皿	(7.0)	－	－	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/4	「の」字状ナデ抜き	ヨコナデ	C2a類
22	SK85	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3			C1類
23	SK85	土師器	皿	(7.4)	－	－	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/3	ナデ	指頭痕	C2a類
24	SK85	土師器	皿	(8.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E1類、口縁部内面に煤付着
25	SK85	土師器	皿	(8.4)	－	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3		指頭痕	C1類
26	SK85	土師器	皿	(15.0)	－	－	良	良	灰黄褐 10YR6/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RA類
27	SK85	土師器	皿	(17.2)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RA類、口縁部外面に油煙の痕跡
28	SK85	土師器	椀	－	(6.2)	－	良 骨針	良	にぶい褐 7.5YR6/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RD類、内黒
29	SK85	珠洲	片口鉢	(20.6)	－	－	良 骨針	良	灰 5Y4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ1期(口縁b1類)
30	SK85	珠洲	壺	－	－	－	良	普通	灰白 2.5Y8/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ3期
31	SK85	土製品	土錘	残3.35	1.45	－	良	良	黒褐2.5Y3/1	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ3.48g
32	SK85	土製品	土錘	残3.30	1.35	－	良	良	黒褐2.5Y3/1	上端欠損、ナデ		孔径0.30cm、重さ3.26g
33	SK85	土製品	土錘	5.55	1.35	1.50	良	良	灰白2.5Y8/2	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ9.11g
34	SK85	土製品	鞴羽口	残5.55	－	－	普通	普通	灰オリーブ 5Y5/3	外面発泡と一部ガラス質化		

第４表　遺物観察表(2)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値 口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	胎土	焼成	色調	成形・調整 内面	外面	備考
35	SK86	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ 体部指頭痕	B類
36	SK86	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E2類
37	SK86	土師器	皿	(9.0)	－	－	良	普通	橙 5YR6/6	ヨコナデ	ヨコナデ 体部指頭痕	C1類
38	SK86	土師器	皿	(9.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部指頭痕	ヨコナデ	D2類
39	SK86	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ	E2類
40	SK86	珠洲	壺	－	－	－	普通	良	灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ 胴部櫛目文	珠洲Ⅱ期
41	SK86	鉄製品	釘	残長3.4	残幅1.1	残厚0.8	錆膨れで断面不明					重さ4.10g
42	SD06	珠洲	甕 (転用砥)	長 3.9	幅 6.1	厚 1.4	良 骨針	良	黄灰 2.5Y6/1	無文当て具	平行タタキ	外面の中央と側縁が使用により摩滅
43	SD36	珠洲	甕	－	－	－	良	良	黄灰 2.5Y4/1	ナデ、胴部無文当て具	ナデ、胴部平行叩き	外面自然釉
44	SD37	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2			C1類、SD37古段階
45	SD37	土師器	皿	(10.4)	－	－	良	普通	にぶい黄橙 10YR7/2	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D1類、SD37古段階
46	SD37	土師器	皿	(13.5)	－	1.6	良	普通	灰白 2.5Y8/1		底部指頭痕	E1類、SD37古段階
47	SD37	土師器	皿	(8.0)	－	1.5	良	普通	にぶい橙 7.5YR7/4		ヨコナデ	B類、SD37古段階
48	SD37	土師器	皿	(9.4)	－	2.3	良	良	灰白 10YR8/2	刷毛状ナデ	体部～底部指頭痕	F2類、SD37中段階
49	SD37	土師器	皿	(13.6)	－	－	良	普通	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D2類、SD37中段階
50	SD37	土師器	皿	(8.6)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2			C2a類、SD37中段階
51	SD37	土師器	皿	(8.4)	－	1.7	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3		ヨコナデ	C2a類、SD37中段階
52	SD37	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ	ヨコナデ	C2a類、SD37新段階
53	SD37	土師器	皿	(10.7)	－	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3			C2a類、SD37新段階
54	SD37	土師器	皿	(7.6)	－	1.75	良	良	灰白 2.5Y8/2			C2a類、SD37新段階
55	SD37	土師器	皿	(9.4)	－	－	良	普通	灰白 10YR8/2			C2b類、SD37新段階
56	SD37	土師器	皿	－	(4.8)	－	普通	良	橙 7.5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	RB類、SD37古段階
57	SD37	八尾	甕	(43.8)	－	－	精良	良(断面灰色)	褐 7.5YR4/3	ヨコナデ、肩部下半ナデ	ヨコナデ、肩部下半板状具ナデ	14c前半～中頃、京ヶ峰2群、SD37新段階
58	SD37	珠洲	鉢	－	－	－	良 骨針	良	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ1期(口縁b1類)、SD37古段階
59	SD37	珠洲	擂鉢	－	(12.6)	－	良 骨針	良	灰 N6/	ロクロナデ、卸目７条	ロクロナデ、底部静止糸切り	珠洲Ⅱ1期、SD37古段階
60	SD37	珠洲	擂鉢	－	(11.4)	－	良	良	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、卸目24条	ロクロナデ、体部下端指頭痕、底部静止糸切り後に櫛状具ナデ	断面に漆継ぎの痕跡 珠洲Ⅳ2期、SD37新段階
61	SD37	土製品	土錘	4.65	1.0	1.0	良	良	灰白10YR8/2	完形、ナデ		孔径0.40cm、重さ4.77g
62	SD37	鉄製品	鎹	横幅5.6	縦幅3.7	厚さ0.3	断面長方形					重さ36.08g
63	SD93	土師器	皿	(9.4)	－	1.3	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
64	SD93	土師器	皿	(11.0)	－	1.55	良	良	浅黄橙 10YR8/3		ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2a類
65	SD93	土師器	皿	－	(7.6)	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3			RA類
66	SD102	土製品	土錘	5.20	1.50	1.50	良	良	黒褐2.5Y3/1	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.35cm、重さ10.36g
67	SD106	土師器	皿	(7.6)	－	－	良	良	灰白 2.5Y8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C1類
68	SD106	土師器	皿	(9.4)	－	1.0	良	良	にぶい黄橙 10YR7/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E1類

第５表　遺物観察表(3)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値 口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	胎土	焼成	色調	成形・調整 内面	外面	備考
69	SD106	土師器	皿	(14.0)	－	－	普通	普通	にぶい橙 7.5YR6/4			D2類
70	SD106	珠洲	壺	－	－	－	良	良	灰 N5/	頸部ロクロナデ、胴部無文当て具痕	頸部ロクロナデ・櫛目波状文、胴部平行叩き	珠洲Ⅱ期、外面自然釉
71	SD125	土師器	皿	－	5.4	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RB類、SD125古段階
72	SD125	八尾	甕	－	－	－	良	良(断面灰色)	にぶい赤褐 5YR5/4	横方向の板状具ナデ	縦方向の板状具ナデ	
73	SD125	珠洲	片口鉢	(24.0)	－	－	良 骨針	良	灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ期(口縁b1型)、SD125古段階
74	SK05	土師器	皿	(7.8)	－	－	良	良	褐灰 10YR4/1	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	E3類、口縁部内外面に煤付着
75	SK05	土師器	皿	(8.4)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	C2a類
76	SK05	土師器	皿	(9.6)	(8.4)	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	C1類
77	SK05	土師器	皿	(10.8)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	E2類
78	SK05	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	E1類
79	SK05	土師器	皿	－	－	－	良 骨針	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕・ナデ	
80	SK05	土製品	土錘	残3.30	1.70	－	良	良	黒褐2.5Y3/1	両端欠損		孔径0.30cm、重さ4.72g
81	SK16	土師器	皿	(5.2)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ	ヨコナデ	C1類
82	SK16	土師器	皿	(6.2)	－	1.05	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	「の」字状ナデ抜き	ヨコナデ、底部指頭痕	E1類
83	SK16	土師器	皿	(6.6)	－	－	－	－	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
84	SK16	土師器	皿	(7.2)	－	0.95	良	良	にぶい黄橙 10YR7/2		粘土紐痕	E1類
85	SK16	土師器	皿	(7.2)	－	－	良	良	橙 5YR7/6	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D1類
86	SK16	土師器	皿	(7.8)	－	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ	C2c類
87	SK16	土師器	皿	(8.0)	(6.0)	1.0	良	良	橙 5YR7/6	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	E2類
88	SK16	土師器	皿	(8.0)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4			D2類
89	SK16	土師器	皿	(8.0)	－	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3			C2a類
90	SK16	土師器	皿	(10.5)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D2類
91	SK16	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	F2類
92	SK16	土師器	皿	(12.0)					灰白 2.5Y8/2			F2類
93	SK16	土師器	皿	(12.0)					浅黄橙 7.5YR8/4			C2c類
94	SK16	土師器	皿	(13.0)	－	－	良	普通	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類
95	SK16	土師器	皿	(14.0)	－	－	普通	良	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	A類
96	SK16	土師器	皿	(8.0)	(4.2)	1.7	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RC2類
97	SK16	土師器	皿	－	(4.3)	－	良	良	浅黄橙 10YR8/3	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	RC2類
98	SK16	珠洲	甕	－	－	－	良 骨針	良	灰 7.5Y5/1	無文当て具痕	平行叩き	内面と断面に煤付着
99	SK16	珠洲	片口鉢	－	－	－	良	良	灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ期
100	SK16	珠洲	鉢	－	(8.4)	－	良 骨針	良	灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ、底部静止糸切り	珠洲Ⅰ期 体部内外面自然釉

第６表　遺物観察表(4)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)				内面	外面	
101	SK16	土製品	土錘	残2.85	1.35	－	良	良	褐灰 10YR4/1	両端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.06g
102	SK16	土製品	土錘	残3.90	1.45	1.40	良 骨針	良	黒褐 2.5Y3/1	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ7.02g
103	SK16	土製品	土錘	5.10	1.60	1.50	良	良	明赤褐 2.5YR5/6	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ10.26g
104	SK16	土製品	土錘	4.95	1.15	1.10	良 骨針	良	褐灰 10YR4/1	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ5.34g
105	SK16	土製品	土錘	残4.85	1.25	1.25	良	良	褐灰 10YR4/1	上端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ5.67g
106	SK16	土製品	土錘	5.45	1.50	1.50	良	良	にぶい黄橙 10YR7/4	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.25cm、重さ9.94g
107	SK16	鉄製品	鋤	横幅3.6	縦幅2.6	－	錆膨れのため断面不明					重さ8.41g
108	SK43	白磁	皿	(8.6)	－	－	精良	良	灰白 10Y8/1	口縁端部釉剥ぎ (口禿げ)		13c後半～14C前半 白磁皿Ⅸ類
109	SK44	土師器	皿	(7.4)	－	1.8	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C1類
110	SK54	珠洲	鉢	－	(9.0)	－	良 骨針	良	灰 5Y4/1	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	珠洲Ⅰ期
111	SK61	土師器	皿	(6.6)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	E2類
112	SK61	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	E2類
113	SK61	土師器	皿	(7.4)	－	－	良	良	にぶい黄橙10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ	
114	SK61	土師器	皿	(6.8)	－	－	良	普通	浅黄橙7.5YR8/4			C1類
115	SK61	土師器	皿	(9.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
116	SK61	土師器	皿	(9.0)	－	－	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ		E3類
117	SK61	土師器	皿	(11.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	F2類
118	SK61	珠洲	片口鉢	－	－	－	良 骨針	良	灰白 5Y8/1	ロクロナデ、卸目13条	ロクロナデ	珠洲Ⅱ2期(口縁b1類型)
119	SK61	珠洲	擂鉢	－	(12.0)	－	良 骨針	普通	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、卸目６条	ロクロナデ、底部静止糸切り	底部内面は使用により摩耗 珠洲Ⅱ1期
120	SK61	土製品	土錘	4.25	1.30	1.25	良	良	にぶい黄橙 10YR7/2	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.95g
121	SK61	鉄製品	釘	残長5.0	残幅1.2	残厚0.4	断面長方形、下端折れ曲がる					重さ9.07g
122	SK101	須恵器	壺	－	－	－	良	良	灰 5Y5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	外面自然釉
123	SK101	土師器	皿	(12.7)	－	－	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RA類
124	SK107	土師器	皿	(8.4)	－	1.35	良	良	にぶい橙 7.5YR7/3	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕・ナデ	E1類
125	SK107	土師器	皿	(10.8)	－	1.40	普通	普通	橙 7.5YR7/6	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	C2a類
126	SK107	土師器	皿	(12.6)	(6.2)	2.75	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	A類
127	SK107	土師器	皿	(6.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2			C2a類
128	SK107	土師器	皿	(6.6)	－	1.15	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
129	SK107	土師器	皿	(7.0)	－	1.15	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ	C2a類
130	SK107	土師器	皿	(7.0)	－	1.05	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2a類
131	SK107	土師器	皿	(8.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
132	SK107	土師器	皿	(8.9)	－	1.20	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2a類、口縁部内面に油煙と灯芯痕
133	SK107	土師器	皿	(7.8)	－	1.3	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2a類
134	SK107	土師器	皿	(7.4)	－	1.45	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類

第７表　遺物観察表(5)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)				内面	外面	
135	SK107	土師器	皿	(6.9)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
136	SK107	土師器	皿	(7.4)	－	1.65	良	良	灰白10YR8/2			C2a類
137	SK107	土師器	皿	(8.4)	－	－	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
138	SK107	土師器	皿	(10.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2			C2a類
139	SK107(2T)	土師器	皿	(10.6)	－	－	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
140	SK107	土師器	皿	(10.8)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
141	SK107	土師器	皿	(10.8)	－	－	良	良	灰白2.5Y8/2			C2a類
142	SK107	土師器	皿	(11.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
143	SK107	土師器	皿	(7.6)	－	1.3	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2b類
144	SK107	土師器	皿	(9.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2			C2b類
145	SK107	土師器	皿	(10.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2			C2b類
146	SK107	土師器	皿	(10.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2b類
147	SK107	土師器	皿	6.9	－	1.75	良	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C1類
148	SK107	土師器	皿	(7.4)	－	1.45			灰白10YR8/2			C1類
149	SK107	土師器	皿	(8.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2			C1類
150	SK107	土師器	皿	(9.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部指頭痕	C1類
151	SK107	土師器	皿	(9.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C1類
152	SK107	土師器	皿	(11.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2		体部指頭痕	C1類
153	SK107	土師器	皿	(11.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C1類
154	SK107	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部指頭痕	C1類
155	SK107	土師器	皿	(11.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C1類、ナデ下に指頭圧痕
156	SK107 (2T)	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部ナデ	C1類
157	SK107	土師器	皿	(7.0)	－	1.65	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E3類
158	SK107	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部指頭痕	E3類
159	SK107	土師器	皿	(7.0)	－	－	良	良	灰白2.5Y8/1	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類
160	SK107	土師器	皿	(10.4)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2			E3類
161	SK107	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	灰白 2.5Y8/2		ヨコナデ、体部指頭痕	E3類
162	SK107	土師器	皿	(12.2)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	E3類
163	SK107	土師器	皿	(13.0)	－	－	良	良	灰白 2.5Y8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	E3類
164	SK107	土師器	皿	(5.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	F1類
165	SK107	土師器	皿	(6.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	F1類
166	SK107	土師器	皿	(6.4)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	底部ナデ		F1類
167	SK107	土師器	皿	(8.0)	－	2.5	良	良	灰白 10YR8/2		体部指頭痕	F1類、口縁部内面に煤付着、体部内面に灯芯痕
168	SK107	土師器	皿	7.2	－	2.1	良	良	灰白 10YR8/2		体部～底部指頭痕	F1類
169	SK107	土師器	皿	(7.8)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部ナデ	F1類
170	SK107	土師器	皿	(8.2)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	F1類

第８表　遺物観察表(6)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値 口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	胎土	焼成	色調	成形・調整 内面	外面	備考
171	SK107	土師器	皿	(8.0)	－	2.5	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	F1類
172	SK107	土師器	皿	(10.4)	－	－	良 褐色粒	良	灰白 2.5Y8/2			F1類、内外面に薄く煤付着
173	SK107	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	灰白10YR8/2		体部指頭痕	F1類
174	SK107	土師器	皿	(9.4)	－	2.5	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	D2類
175	SK107	土師器	皿	(10.0)	－	2.7	良	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	D2類、口縁部内外面に油煙付着
176	SK107(2T)	土師器	皿	(11.0)	－	－	良	良	灰白2.5Y8/1		体部指頭痕	D2類
177	SK107(2T)	土師器	皿	(11.4)	－	－	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	D2類
178	SK107	土師器	皿	(11.6)	－	3.1	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	D2類
179	SK107	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	D2類
180	SK107	土師器	皿	(10.6)	－	2.75	良	良	灰白 10YR8/2		体部～底部指頭痕	F2類
181	SK107	土師器	皿	(12.0)	－	2.75	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2		体部～底部指頭痕	F2類
182	SK107	土師器	皿	(12.4)	－	2.8	良	良	灰白2.5Y8/2			F2類
183	SK107	土師器	皿	(11.6)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	F2類、ナデ消し
184	SK107	土師器	皿	13.0	4.0	3.1～3.2	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	F2類、口縁部内外面に油煙付着
185	SK107	土師器	皿	13.0	3.25	3.15	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	F2類
186	SK107	土師器	皿	(6.7)	－	1.2	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	C2c類
187	SK107	土師器	皿	(8.0)	－	－	良 赤色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2c類
188	SK107	土師器	皿	(7.4)	－	1.5	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E1類
189	SK107	土師器	皿	(7.8)	－	1.4	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	E1類
190	SK107	土師器	皿	(7.1)	－	1.55	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕・ナデ	E1類
191	SK107	土師器	皿	(6.6)	－	1.4	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部～底部指頭痕	E1類
192	SK107	土師器	皿	(11.4)	－	2.0	良 褐色粒	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類
193	SK107	青磁	皿	(9.6)	－	－	精良	良	オリーブ黄 5Y6/3	底部に櫛描文		残存部分は全面施釉 同安窯、太宰府D期、皿Ⅰ-1b類
194	SK107	青磁	椀	－	－	－	精良	良	灰白 5Y7/2	体部に櫛描文	体部に櫛描文	残存部分は外面無釉 同安窯、太宰府D期、椀Ⅰ-1c類
195	SK107	石製品	砥石	残4.3	3.20	2.90	下端と裏面欠損、流紋岩製、重さ 70.17g					
196	SP08	土師器	皿	(6.1)	－	1.25	良	良	灰白2.5Y8/2			
197	SP22	珠洲	鉢	(25.6)	－	－	良 骨針	良	灰 5Y5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ3期(口縁a1型)
198	SP23	土師器	皿	(9.0)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類
199	SP23	珠洲	片口鉢	(26.0)	－	－	良 骨針	良	褐灰 10YR4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ3期(口縁b1型)
200	SP23	珠洲	片口鉢	(40.0)	－	－	良 骨針	良	褐灰 7.5YR4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ3期(口縁b1型)
201	SP23	青磁	椀	－	－	－	精良	良	オリーブ黄 5Y6/4	渦巻状の文様		残存部分は全面施釉、12c中～後 龍泉窯、太宰府D期、椀Ⅰ-2a類
202	SP23	青磁	椀	－	(6.6)	－	精良	良	オリーブ黄 5Y6/3	花文	高台外面を面取り	高台下端から内側は無釉、12c中～後、龍泉窯、太宰府D期、椀Ⅰ類
203	SP34	土師器	皿	(7.4)	－	－	良	普通	にぶい黄橙10YR6/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RB類
204	SP56	土師器	皿	(8.7)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ、体部ナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2a類

第９表　遺物観察表(7)

番号	出土遺構 層位	種類	器種	法量(cm) ( )は推定値 口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	胎土	焼成	色調	成形・調整 内面	外面	備考
205	SP84	土師器	皿	(8.0)	4.3	2.35	良 褐色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/4	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	RC2類
206	SP120	土師器	皿	(10.6)	－	－	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部指頭痕	C2c類
207	SP124	土製品	土錘	残 3.70	1.45	1.20	良	良	にぶい黄橙 10YR7/3	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ6.77g
208	包含層	土師器	皿	(7.4)	(6.2)	0.9	良	良	灰黄褐 10YR5/2	ヨコナデ、底部ナデ	ヨコナデ、底部指頭痕	E2類
209	包含層	土師器	皿	(9.3)	－	－	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5YR8/4			C1類
210	包含層	土師器	皿	(11.6)	(5.6)	2.15	良 褐色粒	良	にぶい橙 7.5YR7/4			H2類
211	包含層	土師器	皿	(12.0)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2			C2a類
212	包含層	土師器	皿	(13.6)	－	－	良 赤色粒	良	にぶい橙 7.5YR7/4			C2b類
213	包含層	珠洲	甕	－	－	－	良	良	灰 5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部内面に自然釉 珠洲Ⅱ2期(a4型)
214	包含層	珠洲	擂鉢	－	－	－	良 骨針	良	灰 5Y4/1	ロクロナデ 卸目８条以上	ロクロナデ	珠洲Ⅲ期
215	包含層	珠洲	鉢	－	－	－	良 骨針	普通	灰白 2.5Y8/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ期
216	包含層	珠洲	擂鉢	－	－	－	良 骨針	普通	灰白 5Y7/1	ロクロナデ 卸目８条以上	ロクロナデ	
217	包含層	珠洲	擂鉢	－	－	－	良	良	灰 N5/0	ロクロナデ、卸目10条	ロクロナデ	
218	包含層	珠洲	擂鉢	－	(12.0)	－	良 骨針	良	灰 N6/0	ロクロナデ、卸目13条	ロクロナデ、指頭痕、底部静止糸切り	珠洲Ⅰ期
219	包含層	土製品	土錘	3.40	1.40	1.20	良	良	灰白2.5Y8/2	完形、ナデ		孔径0.40cm、重さ3.71g
220	包含層	土製品	土錘	4.50	2.60	2.10	良	良	灰白2.5Y8/2	ほぼ完形、ナデ		孔径0.95cm、重さ20.33g
221	包含層	土製品	支脚	残6.70	5.10	－	良	良	褐灰10YR4/1	上端と側面欠損、指押さえ・ナデ		
222	包含層	石製品	砥石	残4.40	残2.90	0.70	全面に研磨痕、粘板岩製、重さ9.05g					
223	表土	土製品	土錘	残 4.60	1.10	1.15	良 骨針	良	褐灰 10YR4/1	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.86g
224	表土	土製品	土錘	残 6.80	2.30	2.20	良	良	にぶい橙 7.5YR7/3	上端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.35cm、重さ24.65g
225	表採	土師器	皿	(7.8)	－	－	良	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部～底部指頭痕	C2a類
226	表採	珠洲	甕	－	－	－	良 骨針	良	黄灰 2.5Y6/1	ヨコナデ、頸部ナデ	ヨコナデ、胴部平行叩き	珠洲Ⅰ2期
227	表採	珠洲	鉢	－	－	－	良 骨針	良	黄灰 2.5Y4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ2期
228	表採	珠洲	鉢	－	－	－	良	良	灰 N5/0	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ期
229	表採	青磁	椀	－	－	－	精良	良	明緑灰10GY7/1		鎬のない蓮弁文	太宰府椀Ⅳ類
230	農道 SD04	土師器	皿	(11.0)	－	1.9	良	やや良	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ 指頭圧痕	ナデ	B類
231	農道 SD04	土師器	皿	－	(4.0)	－	やや不良	不良	灰白 2.5Y8/2	ロクロナデ	底部回転糸切り	RA類
232	農道 SD05	土師器	皿	(12.7)	－	－	良	やや良	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	ナデ	C2b類
233	農道 SD06	土師器	皿	(5.6)	－	1.1	良	良	橙 5YR6/8	ナデ	ナデ	C2c類
234	農道 SD06	土師器	皿	(7.1)	－	0.9	やや良	やや不良	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	ナデ	C2a類
235	農道 SD06	土師器	皿	(15.0)	－	2.2	良	良	灰白 10YR8/2	ナデ	ナデ	D2類
236	農道 SD06	珠洲	擂鉢	(40.0)	－	－	良 骨針	良	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅳ2期
237	農道 SD06	珠洲	擂鉢	－	(10.8)	－	良 骨針	良	灰白 2.5Y8/1	ナデ	ナデ,指押さえ	珠洲Ⅰ3期、櫛目3条
238	農道 SD06	古瀬戸	瓶子	－	－	－	やや良	良	灰白 2.5Y8/1	ナデ	ナデ,自然灰釉	底部付近

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析

はじめに

友坂遺跡は、富山県婦中町に所在し、神通川支流の井田川左岸の低位面から氾濫平野上に立地する。中世（13 ～ 14 世紀）の館跡で、標高は 12 ～ 18m である。

本報告では、調査区より検出された遺構覆土および地山試料を対象に、遺構の年代観や古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析を実施する。

1. 試料

放射性炭素年代測定に用いる試料は、SK107 および SK21 より採取された炭化材、および SK05 より出土した人骨（焼骨）の、計 3 点である。

珪藻分析、花粉分析に用いる試料は、SD37（サンプル B）、SD106（サンプル A）、SK107（サンプル A）、古代地山（サンプル A）の、計 4 点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。

炭化材については、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA）。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

骨試料は、通常コラーゲン抽出を行うが、今回は焼骨であったためコラーゲン抽出はできない。よって、表面の汚れを削り取ったあと、1mol/L の塩酸（HCl）によりエッジング（表面を溶かす）処理を行う（Edg と記載）。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を

基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977）。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している）等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウエアは Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値（1 年単位）を記す。

(2) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4 ～ 5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定･計数する（化石の少ない場合は､この限りではない）。なお､原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については､Hustedt(1930-1966)､Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachiary(1987)、Lange-Bertalot(2000) などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし､少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pH に対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の

多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、三好ほか (2011) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

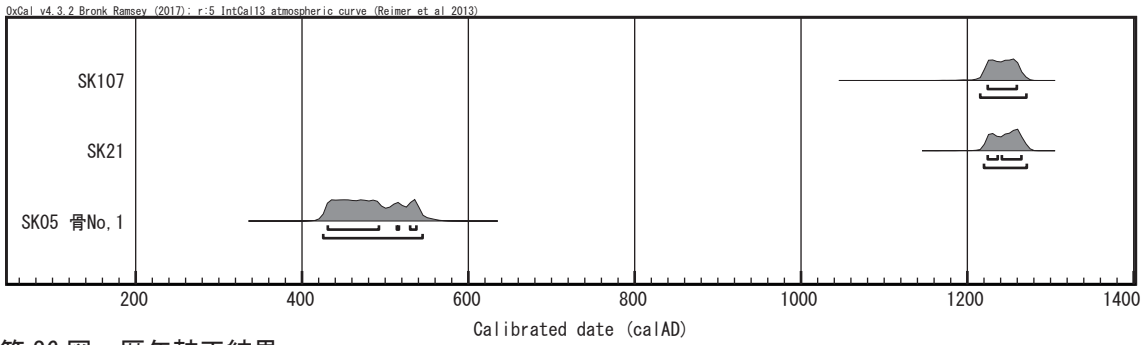
結果を第 10 表、第 26 図に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SK107 の炭化材は 795 ± 20yrBP、SK21 の炭化材は 785 ± 20yrBP、SK05 の人骨（焼骨）は 1,565 ± 20yrBP の値を示す。

暦年較正年代は、測定誤差を 2 σ として計算させた結果、SK107 の炭化材が calAD 1,215 ～ 1,271、SK21 の炭化材が calAD 1,220 ～ 1,271、SK05 の人骨（焼骨）が calAD 425 ～ 545 である。

第 10 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	δ 13 C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代 年代値				確率％	Code No.	
SK107	炭化材 (トチノキ)	AAA	795 ± 20	-30.45 ± 0.32	795 ± 20	σ	cal AD 1224 - cal AD 1259	726 - 691 calBP		68.2	pal-12669	YU-11405
						2 σ	cal AD 1215 - cal AD 1271	735 - 679 calBP		95.4		
SK21	炭化材 (ツバキ属 ?)	AAA	785 ± 20	-29.88 ± 0.28	786 ± 20	σ	cal AD 1224 - cal AD 1236	726 - 714 calBP		21.2	pal-12670	YU-11406
							cal AD 1241 - cal AD 1265	709 - 685 calBP		47.0		
						2 σ	cal AD 1220 - cal AD 1271	730 - 679 calBP		95.4		
SK05 骨 No.1	人骨 (焼骨)	Edg	1565 ± 20	-21.09 ± 0.27	1565 ± 20	σ	cal AD 431 - cal AD 492	1519 - 1458 calBP		59.1	pal-12671	YU-11407
							cal AD 514 - cal AD 516	1436 - 1434 calBP		2.1		
							cal AD 530 - cal AD 537	1420 - 1413 calBP		7.0		
						2 σ	cal AD 425 - cal AD 545	1525 - 1405 calBP		95.4		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
2) yrBP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4) AAA は酸－アルカリ－酸処理、AaA はアルカリの濃度を薄くした処理、Edg はエッジング処理を示す。
5) 暦年の計算には、Oxcal4.3 を使用。
6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
8) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95% である。



第 26 図　暦年較正結果

(2) 珪藻分析

結果を第 11 表に示す。

SD37(サンプル B)、SD106(サンプル A)、SK107(サンプル A)、古代地山(サンプル A)のすべてから珪藻化石は産出したが、全体的に産出数は少なかった。

SD37、SD106、SK107 の 3 試料は、産出した種に多少の差異はあるものの群集の特徴は、ほぼ同様の傾向を示した。SD37、SD106、SK107 からは、それぞれ 32 個体、40 個体、31 個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata* 等である。

古代地山からは、12 個体産した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Staurosira construens*、陸生珪藻の *Pinnularia subcapitata* 等である。

第 11 表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	SD37	SD106	SK107	古代地山
	塩分	pH	流水		サンプル B	サンプル A	サンプル A	サンプル A
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-
Amphora ovalis (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	1
Cocconeis placentula var. *lineata* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	1
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	1
Frustulia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	8	19	15	-
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	3	4	-	-
Navicula elginensis var. *neglecta* (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	1	1	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	1	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	14	12	13	2
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	-	-	-	2
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	3
海水生種					0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0
淡水生種					32	40	31	12
珪藻化石総数					32	40	31	12

凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性
- Euh　：海水生種
- Euh-Meh：海水生種－汽水生種
- Meh　：汽水生種
- Ogh-Meh：淡水生種－汽水生種
- Ogh-hil：貧塩好塩性種
- Ogh-ind：貧塩不定性種
- Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi：真アルカリ性種
- al-il：好アルカリ性種
- ind　:pH 不定性種
- ac-il：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk　:pH 不明種

流水：流水に対する適応性
- l-bi：真止水性種
- l-ph：好止水性種
- ind：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi：真流水性種
- unk：流水不明種

環境指標種

A：外洋指標種　B：内湾指標種　C1：海水藻場指標種　C2：汽水藻場指標種
D1：海水砂質干潟指標種　D2：汽水砂質干潟指標種
E1：海水泥質干潟指標種　E2：汽水泥質干潟指標種　F：淡水底生種群(以上は小杉,1988)
G：淡水浮遊生種群　H：河口浮遊性種群　J：上流性河川指標種　K：中～下流性河川指標種
L：最下流性河川指標種群　M：湖沼浮遊性種　N：湖沼沼沢湿地指標種　O：沼沢湿地付着生種
P：高層湿原指標種群　Q：陸域指標種群(以上は安藤,1990)
S：好汚濁性種　U：広適応性種　T：好清水性種(以上は Asai and Watanabe,1995)
R：陸生珪藻(RA:A 群, RB:B 群, RI：未区分、伊藤・堀内,1991)

(3) 花粉分析

結果を第 12 表に示す。分析したいずれの試料においても花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。

溝試料の中では、SD37（サンプル B）が検出個体数、種類数とも多く、木本花粉ではマツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科などが検出された。SD106（サンプル A）、SK107（サンプル A）ではマツ属やスギ属、イネ科、アカザ科などが僅かに認められた程度である。なお、SD37、SD106 からは、栽培の可能性があるソバ属も確認された。

古代地山（サンプル A）では、木本花粉のマツ属、スギ属、コナラ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科などが僅かに認められた程度である。また、第三紀消滅種のフウ属も 1 個体であるが確認された。

4. 考察

(1) 遺構の年代観

土坑試料における放射性炭素年代測定結果をみると、SK107 出土炭化材が補正年代で 795 ± 20yrBP、暦年代で calAD 1,215 ～ 1,271、SK21 出土炭化材が補正年代で 785 ± 20yrBP、暦年代で calAD 1,220 ～ 1,271 と、ほぼ同時期の年代値が得られた。いずれも 13 世紀であり、中世（13 ～ 14

第 12 表　花粉分析結果

種　類	SD37 サンプル B	SD106 サンプル A	SK107 サンプル A	古代地山 サンプル A
木本花粉				
モミ属	1	−	−	1
ツガ属	−	−	−	1
マツ属複維管束亜属	2	−	3	−
マツ属（不明）	3	−	−	2
スギ属	2	2	−	10
ハンノキ属	1	−	−	−
コナラ属コナラ亜属	2	−	−	2
エノキ属―ムクノキ属	1	−	−	−
フウ属	−	−	−	1
草本花粉				
イネ科	16	5	3	3
カヤツリグサ科	4	−	−	1
クワ科	1	−	−	−
サナエタデ節―ウナギツカミ節	1	−	−	−
ソバ属	2	1	−	−
アカザ科	8	−	3	−
ナデシコ科	−	−	1	−
アブラナ科	2	2	−	−
セリ科	2	−	−	−
アリノトウグサ属	1	−	−	−
ヨモギ属	1	−	1	−
不明花粉				
不明花粉	2	2	−	4
シダ類胞子				
シダ類胞子	37	12	25	51
合　計				
木本花粉	12	2	3	17
草本花粉	38	8	8	4
不明花粉	2	2	0	4
シダ類胞子	37	12	25	51
合計（不明を除く）	87	22	36	72

世紀）とされる調査所見とも調和的である。よって､SK107 と SK21 は 13 世紀頃の遺構と想定される。

一方、SK05 の人骨は、補正年代で 1,565 ± 20yrBP、暦年代で calAD 425 ～ 545 と、前述の 2 試料と比較して古い年代値を示した。通常骨試料の年代測定には、化学的風化作用に比較的強い有機成分の硬タンパク質コラーゲンを用いるが、当該試料は焼骨であることからコラーゲンでの測定が不可能である。そのため今回は、骨の無機成分である炭酸ヒドロキシアパタイト（CHa）を用いて測定している。CHa は結晶性に乏しく、土壌に埋没している間に二次的な炭酸塩が沈着したり、周辺の外来炭素と同位体置換するなど、コラーゲンに比べ汚染されやすいとされている（例えば椋本ほか,2015 など）。これらのことを踏まえると、得られた年代値は周囲の土壌中などからの汚染により、本来より古い値を示した可能性がある。

(2) 古環境

珪藻分析の結果、溝跡ないし土坑とされる SD37、SD106、SK107 のいずれの試料も珪藻化石の産出数は少なかったため、生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。このことから、対象とした覆土が堆積した頃の遺構内は、好気的環境であった可能性がある。

なお、SD37、SD106、SK107 から少ないながらも産出した種をみると、淡水生種で流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata* などが認められる。生態性について述べると、流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* は、河川や溝等の定常的な水の流れがある水域の基物（礫、水草、大型の藻類）に付着生育する種である。*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata* 等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉,1986）である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内,1989,1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70 ～ 80% 以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。今回の場合､少なからず認められた珪藻化石の約 80 ～ 90% が陸生珪藻であった。

これらのことを踏まえると、いずれの遺構においても流水の影響を受けていた可能性が示唆されるものの、常に水が流れているような状況ではなく、頻繁に乾いていたような環境であった可能性が高い。その結果、わずかに取り込まれた珪藻化石も、堆積後の好気的な環境下で分解・消失したと考えられる。

次に花粉分析結果をみると、SD37、SD106、SK107 のいずれの試料も、古植生推定のための定量解析が行えるだけの花粉化石が得られなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967；徳永・山内,1971；三宅・中越,1998 など）。上述のように、珪藻分析から溝内は好気的環境下に曝されていたことが推定されることから、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子も、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに検出された花粉化石は、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹である。遺跡の立地も踏まえると、コナラ亜属は冷温帯性落葉広葉樹林の構成要素として周囲の森林に、スギ属は沢筋などに、マツ属は周囲の二次林などに生育していた可能性がある。また、ハンノキ属などは湿地林を構成する種類であることから、井田川沿いなどに生育していた可能性もある。草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科など、いずれも開けた明るい場所に生育する種類

が検出された。よって、当時の調査区内やその周辺の草地植生に由来すると思われる。なお、SD37、SD106からはソバ属も確認されたことから、当時の周辺でソバの栽培利用の可能性も指摘される。

一方、古代地山も珪藻化石の産出が少なかったが、わずかに産出した種は淡水生種で止水性種の*Stauroneis phoenicenteron*、*Staurosira construens*、陸生珪藻の*Pinnularia subcapitata*などであった。止水性種の*Stauroneis phoenicenteron*は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky(1968)は最適pHを6.8に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。*Staurosira construens*は池沼等の止水域に広く認められ、比較的広域に生育する種である。

以上のことから、古代地山が堆積した頃は沼沢湿地のような環境であった可能性があるが、本地点の場合も、堆積後の好気的な環境下で珪藻化石が分解・消失した可能性が高い。

なお、花粉化石はマツ属、スギ属、コナラ亜属などの木本類、イネ科、カヤツリグサ科などの草本類が僅かに認められた程度である。これらは当時の森林植生や草地植生に由来すると思われる。また、第三紀消滅種のフウ属が確認された。本遺跡西方の呉羽山丘陵には、新第三系の音川累層などが分布することから、フウ属は周辺の古い堆積物からの再堆積と考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

安藤一男,1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理,42,73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 － 47.

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Cholnoky, B. J.,1968,Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewassern. Lehre(Cramer), 699p.

Desikachiary, T. V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1,920p.

Hustedt, F.,1937-1938,Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ ～ Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Sup pl.,15,131-809,1-155,274-349.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2,845p.

Hustedt, F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.

under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3,816p.

伊藤良永・堀内誠示 , 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討－陸生珪藻の細分－ . 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集 , 17.

伊藤良永・堀内誠示 , 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 , 6, 23-44.

小杉正人 , 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－ . 植生史研究 , 1, 9-44.

小杉正人 , 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 , 27, 1-20.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, 9, 250p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Lange-Bertalot, H., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925p.

三宅　尚・中越信和 , 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 , 6, 15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子 , 2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 , 824p.

椋本ひかり・南　雅代・中村俊夫 , 2015, 火葬骨の炭酸ヒドロキシアパタイトを用いた 14C 年代測定の試み . 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 , ＸＸⅥ , 96-101.

中村　純 , 1967, 花粉分析 . 古今書院 , 232p.

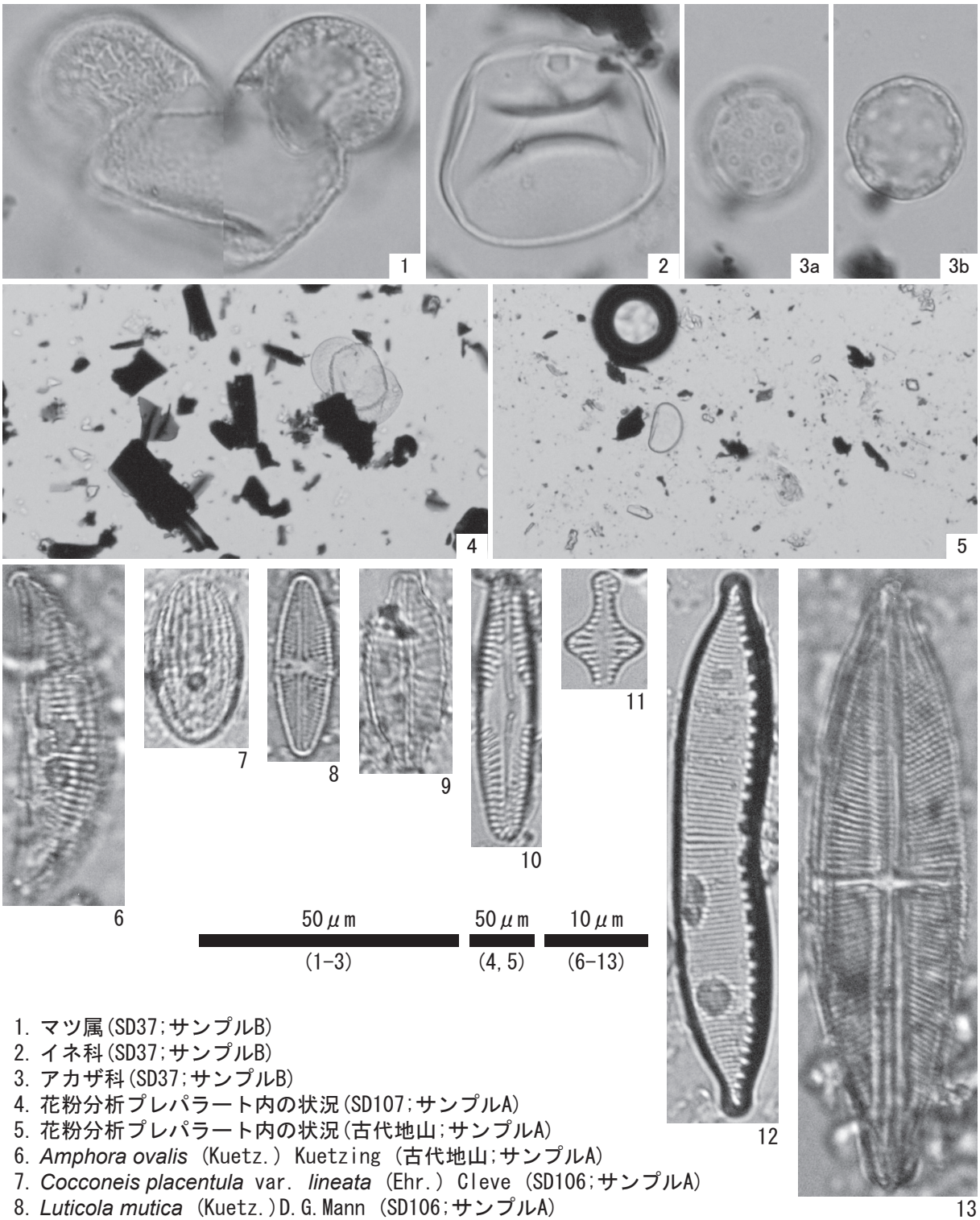
中村　純 , 1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12, 13 集 , 91p.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

島倉巳三郎 , 1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 , 60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon , 19, 355-363.

徳永重元・山内輝子 , 1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 , 50-73.



1. マツ属(SD37;サンプルB)
2. イネ科(SD37;サンプルB)
3. アカザ科(SD37;サンプルB)
4. 花粉分析プレパラート内の状況(SD107;サンプルA)
5. 花粉分析プレパラート内の状況(古代地山;サンプルA)
6. *Amphora ovalis* (Kuetz.) Kuetzing (古代地山;サンプルA)
7. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (SD106;サンプルA)
8. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (SD106;サンプルA)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (SD106;サンプルA)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (SD37;サンプルB)
11. *Staurosira construens* Ehrenberg (古代地山;サンプルA)
12. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SD106;サンプルA)
13. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (古代地山;サンプルA)

第 27 図　花粉分析・珪藻化石

第２節　友坂遺跡出土焼骨の人類学的報告

1. はじめに

富山県富山市婦中町友坂遺跡の発掘調査において、中世の遺構より数十点の焼骨が出土した。形態学的特徴に基づいて種を識別できた骨はいずれも人骨であり、ヒト以外の動物に比定される骨はなかったことから、出土焼骨の全体を人骨とみなして大過ない。以下に、その人類学的観察所見を報告する。

2. 方法

肉眼形態学的観察に基づき、部位の同定、年齢推定、性別判定を試みた。ただ、性差を反映する形態的特徴に乏しく、性別は判定し得なかった。骨の名称は原則として解剖学事典（解剖学用語委員会，2007）に準拠した。年齢は、頭蓋縫合の閉塞状況（瀬田・吉野， 1990; White et al., 2012)、および四肢骨の骨体の大きさと骨端部の癒合状況（瀬田・吉野， 1990; Scheuer and Black, 2000）に基づいて推定し、以下の成長段階のいずれに相当するのかを検討した：乳児（0 ～ 1 歳)、幼児（2 ～ 5 歳)、小児（6 ～ 12 歳)、若年（13 ～ 19 歳)、壮年（20 ～ 39 歳)、熟年（40 ～ 59 歳)、老年（60 歳以上)。また、Fairgrieve（2008）と Shipman et al.（1984）を参考に、焼骨の色調が茶褐色・黒色・灰青色・灰白色・白色のうちのいずれに相当するかを調査し、あわせて形状の変化についても検討した。

3. 観察所見

部位を同定できたのは、歯根（第 28 図の番号 1)、左頭頂骨（同 2)、右頬骨（同 3)、左頬骨（同 4)、左側頭骨（同 5)、後頭骨（同 6)、椎骨（同 7)、および左右不明の大腿骨遠位端（同 8）である。他に、上腕骨頭ないし大腿骨頭と思われる骨端片 2 点（同 9・10）や、部位の特定が困難な四肢長骨片（同 9 ～ 15）などが認められた。どの骨体も白色ないし灰白色を呈し、四肢長骨の骨幹部には輪状の亀裂や捻転が認められた（同 11 ～ 15 など)。総重量は 150.7g であった。

骨の大きさはいずれも若年以上に相当する。四肢長骨の骨端（同 9・10）が断片的なため、癒合が完了しているかどうかは判然としない。左頭頂骨と後頭骨のラムダ縫合が閉塞しておらず（同 2・6)、老年には達していないと思われる。以上を総合し、若年から熟年のいずれかの段階と推定した。なお、明瞭な傷病変は見当たらなかった。

4. 考察

出土焼骨に部位の重複や年齢段階の齟齬がなく、総重量が成人 1 体分の焼骨重量（日本人成人女性平均約 1.3kg、男性約 2kg、山口（1983）による）を超えないことから、焼骨は 1 体の人骨に由来するものと考えてよさそうである。ただ、出土焼骨重量は成人 1 体分の焼骨重量に遠く及ばず、土中の埋存過程で減失したか、あるいはもとより遺体の一部が遺構内に置かれたのではないかと思われる。

骨の焼成実験により、低い温度で焼成した骨体は茶褐色や黒色を呈するが、焼成温度が高い場合は灰白色や白色となることが知られている（Shipman et al., 1984; Holden et al., 1995; Fairgrieve, 2008)。骨体が白色を帯びる焼成温度は、Shipman et al.（1984）によれば約 650℃以上、Holden et al.（1995）では 800℃以上とされる。出土焼骨は全て白色ないし灰白色を呈し、茶褐色や黒色の骨が見当たらないことから、焼成温度は比較的高温だったと考えられる。

池田（1981）は、Buikstra（1973）を引用して「軟部組織に包まれている長骨が焼けた場合、そ

れは外面の深い干割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらにはいちじるしい捩れなどの変形で特徴づけられるが、白骨を焼いた時の主な変化は、長軸方向の裂開と、表面の浅い干割れだけにとどまり、形が歪むことはない」と述べている。出土した四肢長骨には輪状の亀裂や捻転が生じていたことから、この個体は、皮膚や筋などの軟部組織に包まれた状態で焼成されたものと推察される。

5. まとめ

友坂遺跡から出土した焼骨を肉眼形態学的に検討した結果、本焼骨が、若年から熟年段階に相当する１個体の焼成人骨に由来するものと推定された。骨体の色調および形状から、この個体は軟部組織に包まれた状態で焼成されたと考えられた。

（新潟医療福祉大学　佐伯史子・澤田純明）

文献

池田次郎．1981．出土火葬骨について．太安萬侶墓，奈良県立橿原考古学研究所，pp. 79-88.

解剖学用語委員会．2007．解剖学用語，改訂 13 版．医学書院．

瀬田季茂・吉野峰生．1990．白骨死体の鑑定．令文社．

山口敏．1983．出土人骨についての分析．竜ヶ池観音堂塚群発掘調査報告書Ⅱ，小千谷市教育委員会，pp. 41-43.

Buikstra J.E. 1973. Technique and interpretation in the study of a complex cremation site. In: The Perrins Ledge Crematory, Illinois State Museum, pp. 15-23.

Fairgrieve S.I. 2008. Forensic Cremation Recovery and Analysis. CRC Press.

Holden J.L., Phakey P.P., Clement J.G. 1995. Scanning electron microscope observations of incinerated human femoral bone: a case study. Forensic Science International, 74: 17-28.

Scheuer L. and Black S. 2000. Developmental Juvenile Osteology. Academic Press.

Shipman P., Foster G., Schoeninger M. 1984. Burnt bones and teeth: an experimental study of colour, morphology, crystal structure and shrinkage. Journal of Archaeological Science, 11: 307-325.

White T.D., Black M.T., Folkens P.A. 2012. Human Osteology, Third Edition. Academic Press.

1. 歯根　2. 左頭頂骨片　3. 右頬骨片　4. 左頬骨片　5. 左側頭骨片　6. 後頭骨片　7. 椎骨片
8. 左右不明大腿骨遠位端片　9. 上腕骨ないし大腿骨の骨頭片　10. 上腕骨ないし大腿骨の骨頭片
11 ～ 15. 部位不明四肢長骨片

第 28 図　友坂遺跡出土焼成人骨

第５章　総　括

第１節　友坂遺跡における中世遺構の調査歴

友坂遺跡では、昭和56年度の第１次調査以降、発掘調査が徐々に進んでいる。今回の調査で検出した中世遺構を総括するにあたり、ここでは既往調査の主要な中世遺構を居館跡を中心に整理したい。

１　過去の調査概要

第１次調査・第４次調査（婦中町教委1984・1993）　第１次調査B地区において一辺40ｍ超の方形区画を想定できる堀SD22を検出し、居館跡の存在が知られることとなった（第２図）。SD22は幅3.5～4.5ｍ、深さ1.5ｍほどの規模である。14世紀代の珠洲や青磁が出土している。この区画の内外では遺構の多寡が顕著で、区画内からは掘立柱建物９棟、柵１条、井戸１基、土坑、溝を検出した。掘立柱建物は概ねSD22と方位が揃い、最大規模はSB03の２×５間である。井戸SE41からは13世紀中頃～14世紀初頭の白磁、土師器皿が出土した。土坑には掘立柱建物の内部に収まるSK51・52、SB05～09と同方位で同尺寸法の竪穴状となるSK54・55などがある。この南西側には、SD22に直交する堀SD21がある。SD21はSD22との間に3.0ｍの距離を空けて途切れるため、土橋状通路が想定された。ただしSD21は井戸SE41より新しく、またSD21とSD22の遺物に時期差もあることから、土橋状通路の存否を含め、区画内の遺構には数次の変遷が想定される（第５章第３節）。SD23は上幅2.4ｍ、深さ0.8ｍの溝で、SD24方面へ延びる。方形区画内には小規模な区画溝SD25･27･31がある。

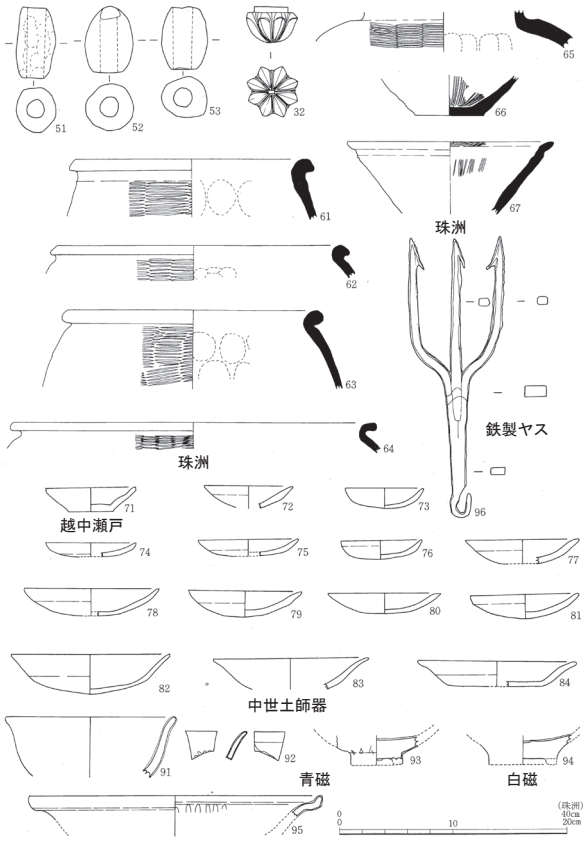
SD24は第４次調査A地区で検出した屈曲する堀SD01に繋がり、上幅5.7ｍ、下幅2.5ｍ、深さ0.8ｍの規模がある。SD22に対する外堀として、二重堀の可能性が指摘される。ただし遺物の主体となる珠洲や古瀬戸が14世紀後半～15世紀中頃であることから、SD22に後出する可能性もある。

以上のように、居館跡の中心部には、二重堀ないし、改修に伴って新旧のある単独の堀による方形区画があり、その規模は内側の堀で40ｍ以上、外側の堀で50ｍ以上となる。二重堀を想定すれば、内堀と外堀の間の遺構空白地に、最大幅7.0ｍの土塁が存在した可能性がある。方形区画内は区画溝によって仕切られ、小区画ごとに掘立柱建物が存在し、中心部寄りでは井戸や竪穴状土坑を伴う。掘立柱建物はほとんどが梁行１間である。出土遺物は土師器皿、珠洲、越前、青磁、白磁、瓦質土器、鉄製ヤス、漆器などの木製品があり、その時期は12世紀後半～15世紀に及ぶ。

第２次調査（婦中町教委1984）　朝日小学校の北西側60ｍの位置で行われた。幅3.6ｍ、深さ60～80㎝で掘り直しのある溝SD129と区画溝SD126を挟んだ西側に掘立柱建物１棟と井戸１基、東側に竪穴状土坑１基を検出した。SD129は居住域を区画する溝と考えられ、14世紀代の珠洲、土師器皿、漆椀･脚･曲物などの木製品が出土した。掘立柱建物SB111は１×２間である。井戸SE141からは珠洲、中世土師器が出土し、SB111併設の井戸と考えられる。竪穴状土坑SK152は4.9×3.3ｍの長方形を呈し、深さ55㎝で、貼床が２面ある。土層は人為的な短期埋没を示しており、珠洲や土師器皿が出土した。竪穴状土坑SK161はSD129より古く、規模は5.0×3.0ｍ以上の長方形を呈し、深さ50㎝である。珠洲、土師器皿のほか、火葬人骨が出土した。火葬人骨はSD126からも出土している。

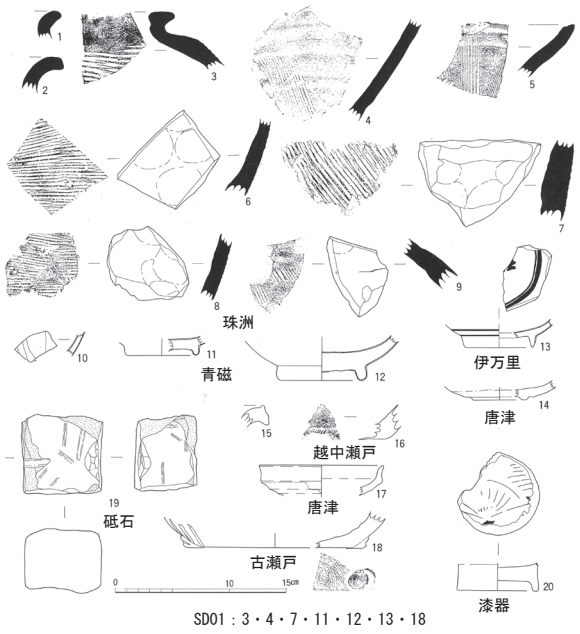
第６次・第９次調査（未報告）　朝日小学校から西100～200ｍの位置にある。中世の木組井戸２基のほか、溝･土坑等を検出した。珠洲、青磁、箸、砥石等が出土したとされ、13世紀代に中心がある。

第７次調査（婦中町教委1997）　朝日小学校から南西へ120～170ｍの位置にある２地点で実施された。A地区では中世末から近世初頭にかけての遺構が検出された。溝SD02は幅0.8～1.5ｍの規



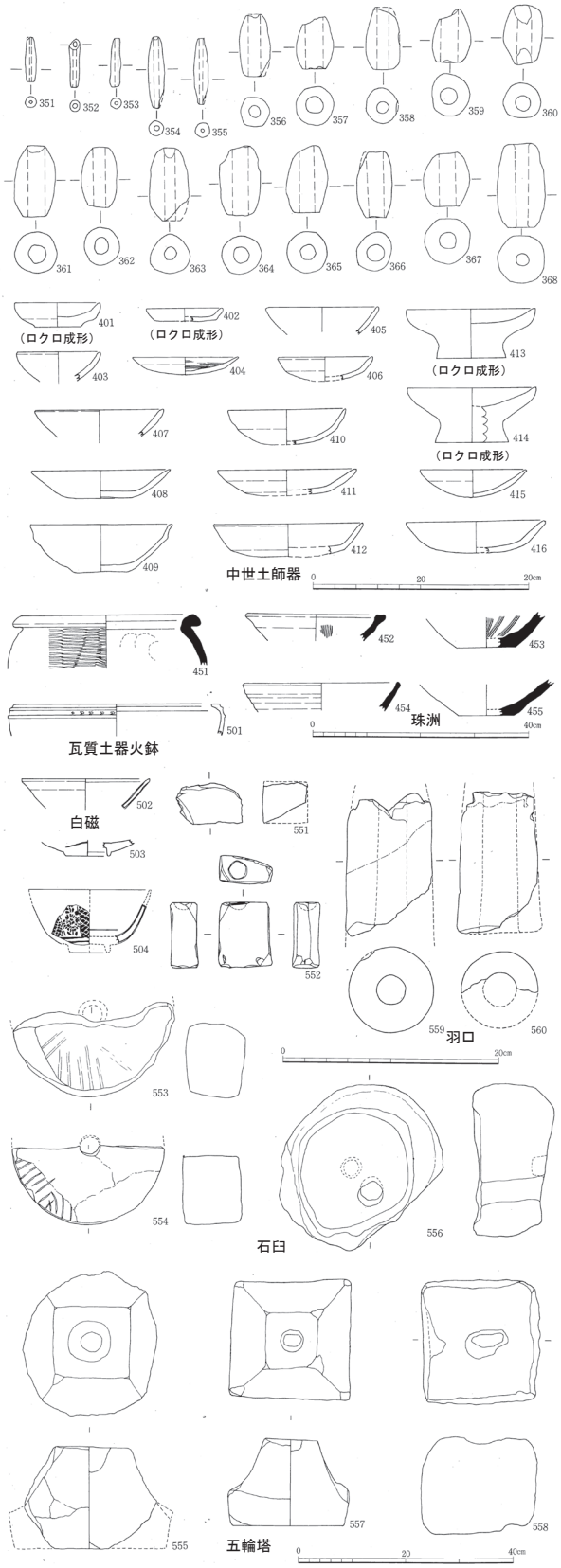
SD21：63・72・74・80・81・82・84
SD22：61・91　SD23：73　SD25：64・66　SE41：94

昭和56年度調査（婦中町教委1984より転載加筆）



SD01：3・4・7・11・12・13・18

平成４年度調査Ａ地区（婦中町教委1993より転載）



SD126：404・559　SD129：451
SE141：416・553～558　SK151：413　SK152：406　SK161：453

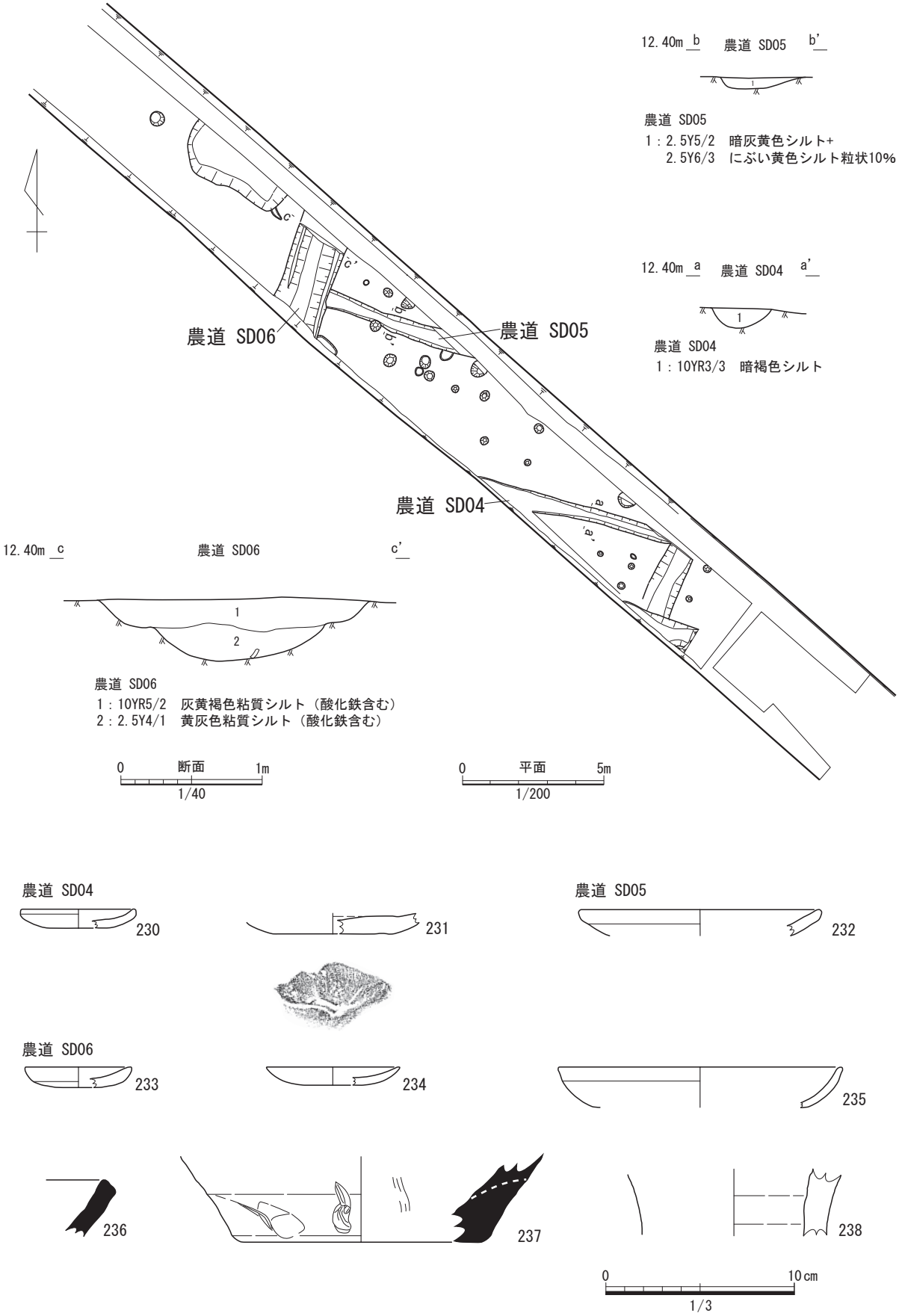
昭和57年度調査（婦中町教委1984より転載）

第 29 図　友坂遺跡過去調査出土遺物

第 13 表　友坂遺跡過去調査遺物一覧表

年度	地区	遺物番号	遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	備　考
昭和56年度	第1次調査B地区	61	SD22	珠洲	甕	39.0	－	－	珠洲Ⅳ2期
		62		珠洲	甕	41.4	－	－	珠洲Ⅳ2期
		63	SD21	珠洲	甕	43.2	－	－	珠洲Ⅴ期
		64	SD25	珠洲	甕	63.6	－	－	珠洲Ⅱ期
		65		珠洲	壺	－	－	－	
		66	SD25	珠洲	擂鉢	－	－	6.0	卸目8条
		67		珠洲	擂鉢	34.8	－	－	珠洲Ⅵ期
		71		越中瀬戸	素焼皿	7.8	2.1	3.9	18c後
		72	SD21	中世土師器	皿	7.5	－	－	15c後
		73	SD23	中世土師器	皿	6.7	1.8	1.8	14c中
		74	SD21	中世土師器	皿	7.8	2.4	2.4	15c後
		75		中世土師器	皿	8.7	1.5	2.1	
		76		中世土師器	皿	7.2	1.7	1.2	
		77		中世土師器	皿	9.6	2.1	3.0	
		78		中世土師器	皿	11.7	2.4	2.4	
		79		中世土師器	皿	9.6	2.3	1.8	
		80	SD21	中世土師器	皿	9.9	1.8	3.6	15c後
		81	SD21	中世土師器	皿	9.3	2.1	1.2	15c後
		82	SD21	中世土師器	皿	13.8	3.5	1.2	15c前
		83		中世土師器	皿	13.5	－	－	
		84	SD21	中世土師器	皿	13.5	2.2	7.8	15c後～末
		91	SD22	青磁	椀	14.7	－	－	椀Ⅳ類・太宰府Ｇ期
		92		青磁	椀	－	－	－	
		93		青磁	椀	－	－	3.0	
		94	SE41	白磁	椀	－	－	4.5	椀Ⅸ-2a類・太宰府Ｆ期
		95		青磁	盤	25.4	－	－	坏Ⅲ類・太宰府Ｆ期
昭和57年度	第2次調査	401		中世土師器	皿	7.8	2.3	4.5	ロクロ成形、13c中
		402		中世土師器	皿	6.9	1.2	5.4	13c中
		403		古代土師器	椀	7.5	－	－	
		404	SD126	中世土師器	皿	9.6	16.5	1.2	
		405		中世土師器	皿	10.2	－	－	
		406	SK152	中世土師器	皿	8.7	2.3	1.5	
		407		古代土師器	椀	11.7	－	－	
		408		中世土師器	皿	12.6	2.7	5.7	
		409		中世土師器	皿	12.9	4.4	5.1	ロクロ成形
		410		中世土師器	皿	10.8	3.3	2.4	
		411		中世土師器	皿	12.6	2.4	3.6	
		412		中世土師器	皿	13.8	3.0	5.4	
		413	SK151	中世土師器	皿	11.7	4.6	6.3	ロクロ成形、12c後
		414		中世土師器	皿	11.7	5.0	6.6	ロクロ成形、12c後
		415		中世土師器	皿	9.9	2.6	1.5	
		416	SE141	中世土師器	皿	12.6	2.9	3.6	
		451	SD129	珠洲	甕	32.2	－	－	珠洲Ⅳ2期
		452		珠洲	擂鉢	22.8	－	－	珠洲Ⅳ2期、卸目7条以上
		453	SK161	珠洲	擂鉢	－	－	10.8	櫛目文3条
		454		珠洲	擂鉢	28.2	－	－	卸目なし
		455		珠洲	擂鉢	－	－	10.2	卸目なし
		501		瓦器	火鉢	35.4	－	－	
		502		白磁	椀	11.7	－	－	椀Ⅸ類・太宰府Ｆ期、口縁端部口禿げ
		503			椀	－	－	3.9	
		504			椀	－	－	－	
		551				－	4.1		
		552				5.0	2.6	6.0	
		553	SE141	石臼		30.0	11.1	－	
		554	SE141	石臼		28.2	10.5	－	
		555	SE141	五輪塔	火輪	－	18.9	－	
		556	SE141	石臼		31.5	15.0	－	
		557	SE141	五輪塔	火輪	－	15.9	22.2	
		558	SE141	五輪塔	地輪	－	18.0	20.7	
		559	SD126	羽口		8.0	－	－	
		560		羽口		7.1	－	－	
平成4年度	第4次調査A地区	1		珠洲	壺	－	－	－	
		2		珠洲	壺	－	－	－	
		3	SD01	珠洲	甕	－	－	－	珠洲Ⅰ3期
		4	SD01	珠洲	擂鉢	－	－	－	珠洲Ⅵ期、卸目13条
		5		珠洲	擂鉢	－	－	－	珠洲Ⅴ期、卸目8条
		6		珠洲	甕	－	－	－	
		7	SD01	珠洲	甕	－	－	－	
		8		珠洲	甕	－	－	－	
		9		珠洲	甕	－	－	－	
		10		青磁	椀	－	－	－	
		11	SD01	青磁	椀	－	－	5.7	
		12	SD01	青磁	椀	－	－	6.9	
		13	SD01	伊万里	椀	－	－	5.7	
		14		唐津	椀	－	－	4.8	
		15				－	－	－	
		16		越中瀬戸	擂鉢	－	－	－	
		17		唐津	向付	10.8	－	－	
		18	SD01	古瀬戸	折縁深皿	－	－	12.6	後Ⅳ期(新)、内面に鉄釉
		19		砥石		6.9	5.6	－	
		20		漆器	椀	－	－	6.6	

※法量は報告書から測定



第30図　友坂遺跡平成8年度農道調査遺構図・遺物図

模で、古代の溝が中世に再掘削されたものである。友坂遺跡において中世の地割が古代から引き継がれたことを示す一例である。珠洲、越中瀬戸が出土した。土坑 SK12 は径 1.2 mの円形で、鉄滓・焼土・炭の廃棄と考えられる。SK12 の北側には、切り合いのある竪穴状土坑 SK14・15・18 があり、底面に砂が敷かれていた。鞴羽口・鉄滓・釘・焼土・炭が多量に出土しており、鍛冶に関連した施設の可能性が指摘される。隣接する石組井戸 SE01 からは、越中瀬戸、石臼、古銭、鞴羽口が出土した。A 地区は、中世末から近世初頭にかけて鍛冶に関わる作業場として機能したと考えられる。B 地区では溝、井戸を検出した。溝 SD02 は幅 2.8 m、深さ 1.15 mの規模で、土師器皿、珠洲、越中瀬戸、土錘、硯、鞴羽口、石臼が出土した。14 世紀代の溝を近世に掘り直したものと考えられている。

平成 25 年度（富山市教委 2014）　朝日小学校の南側 200 mの位置で、個人住宅建築に伴う調査が実施された。遺構面は上層が戦国時代、下層が平安時代～中世である。下層の井戸 SE10 は、推定径 5.4 m、深さ 1.0 mの規模があり、土師器皿、珠洲、越前、青磁が出土した。SE24 は径 1.8 m以上、深さ 1.2 mの規模で、土師器皿、珠洲が出土した。SE10 より古く、平安後期から鎌倉時代のものとされる。

平成 30 年度（富山市教委 2019）　朝日小学校の西側 400 mの位置で、個人住宅建築に伴う調査が実施された。中世の掘立柱建物、井戸、溝状遺構、土坑を検出した。掘立 SB67 は 1 × 3 間以上の規模である。木組井戸 SE27 からは珠洲、青磁が出土しており、13 世紀前半の井戸とされる。SB67 も同時期か。SX40 は幅 1.8 m以上の溝状遺構で、出土した珠洲から 13 世紀中葉～後半とされる。

朝日小学校の北東側で行われた農道工事ほかに伴う第８次調査の詳細は、下記に記載する。（常深）

2　第 8 次調査（平成 8 年度）

朝日小学校の周囲に廻る農道の舗装工事が行われることとなり、平成 8 年 7 月 25 日～ 7 月 30 日に試掘調査を実施した。その結果、約 280 ㎡に遺跡の遺存が確認されたため、引き続き 7 月 26 日～ 8 月 19 日に本発掘調査を実施した。この調査は未報告であったが、今回調査と遺構のつながりがあるため、ここでは中世の遺構について報告し、古代の遺構は別の機会に報告することとする。

①遺構

農道 SD04（第 30 図）　Ｎ－ 107°－Ｅの主軸方向に延びる。遺物は土師器皿（230・231）が出土した。出土遺物から農道 SD06 と繋がると考えられる。

農道 SD05（第 30 図）　Ｎ－ 107°－Ｅの主軸方向に延びる。遺物は土師器皿（232）が出土した。出土遺物から農道 SD06 と繋がると考えられる。

農道 SD06（第 30 図）　断面観察から新古の 2 時期があり、古段階は幅 125 ㎝前後、検出面からの深さ 44 ㎝、新段階は幅 1.8 ～ 1.9 m、深さ 22 ㎝である。ともにＮ－ 17°－Ｅの方位に約 4.0 mの長さで延びる。断面逆台形となる。古段階は SD37 中段階、新段階は SD37 新段階の延長線上にあると考えられ、農道 SD06 と SD37 をつなぐ同一直線上にあるゲートボール場試掘 2T 内にも溝を確認できる。遺物は土師器皿（233 ～ 235）、珠洲（236・237）、古瀬戸（238）が出土した。235・237 は古段階、それ以外は新段階の遺物である。

②遺物

農道 SD04（第 30 図）　230・231は中世土師器の皿である。230はB類、231はロクロ成形のRA類である。

農道 SD05（第 30 図）　232 は中世土師器の皿である。C2b 類である。

農道 SD06（第 30 図）　233 ～ 235 は中世土師器の皿である。233・234 は C2a 類、235 は D2 類である。236・237 は珠洲の擂鉢である。236 は珠洲Ⅳ$_2$期、237 は珠洲Ⅰ$_3$期である。237 の内面には弧状の櫛目文が確認できる。238 は古瀬戸の瓶子である。（堀内）

第２節　中世前期の土師器皿の諸様相 ～富山県内の城館遺跡出土遺物を中心に～

友坂遺跡において、今回の調査で、SK85 → SK86 → SK21 と変遷したことが分かる竪穴建物、かわらけ廃棄土坑 SK107、土坑 SK61、区画溝 SD37 などの遺構から 12 世紀末～ 14 世紀初頭を中心とした時期の遺物が比較的まとまった量出土した。また、昭和 56・57 年度調査、平成 4 年度調査で 14 ～ 15 世紀の方形館に伴う遺構・遺物が確認されている（婦中町教委 1984・1993）。

ここでは、富山県内の城館遺跡出土遺物で友坂遺跡の足りない部分を補いつつ、陶磁器類を含めた中世前期の土師器皿の様相を検討したい。なお、富山県内の中世前期の中世土師器皿の編年は、宮田・越前・森などによって行われている（宮田 1992・1997、越前 1996、森 2003・2005・2006）。

１　土師器皿の分類

（１）非ロクロ（手涅ね）成形

A 類　口縁部に二段のヨコナデを施す。

B 類　丸底気味の底部から一段ナデで口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部に面取りを行う。

C1 類　丸底気味の底部から一段ナデで短い口縁部が強く屈曲するため、底部と体部の境が明瞭になる。口縁端部は丸く納める。

C2 類　丸底または丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境が明瞭でない。底部と体部の境から幅広の一段ナデを施し、口縁端部は鋭く仕上げるものを C2a 類、口縁端部に幅狭の一段ナデを施し、口縁端部は鋭く仕上げるものを C2b 類、器壁は厚めで口縁端部は肥厚気味に丸く納めるものを C2c 類とする。

D1 類　丸底気味の底部から体部が逆 S 字状に浅く開いて立ち上がる。二段ナデ A 類が在地化した。

D2 類　D1 類に比べ深い丸底から体部が内湾し、口縁部がそこから逆 S 字状に立ち上がる、ないしは直線的に外傾する。口縁端部は丸く納める。

E1 類　平底から口縁部が垂直に立ち上がる。

E2 類　平底から口縁部を短くつまみあげ、口縁端部を鋭く仕上げる。

E3 類　深い平底から体部が屈曲し、口縁部は外傾する。口縁部に幅広の一段ナデを施す。

F 類　深めの底部から体部が内湾し、そのまま口縁部が直線的に外傾ないしは内湾する。丸底を呈するものを F1 類、扁平な小さな平底があるものを F2 類とする。

G 類　丸底から体部が内湾し、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸く納めるか小さくつまむ。

H 類　内型つくり的な成形法を用いて作られ、体部外面下半にはユビオサエの指頭圧痕が顕著に残る。口縁端部にヨコナデを施す。やや器壁が厚く丸底の H1 類、器壁が薄く平底の H2 類がある。

（２）ロクロ成形

RA 類　古代土師器椀の系譜を引く大型皿ないしは椀である。屈曲した体部から直線的ないしは内湾しながら立ち上がる。

RB 類　RA 類に比べ器高が低いもの。屈曲した体部から体部が内湾しながら立ち上がる。

RC 類　柱状高台を有するもの。高台の高いものを RC1 類、低いものを RC2 類とする。

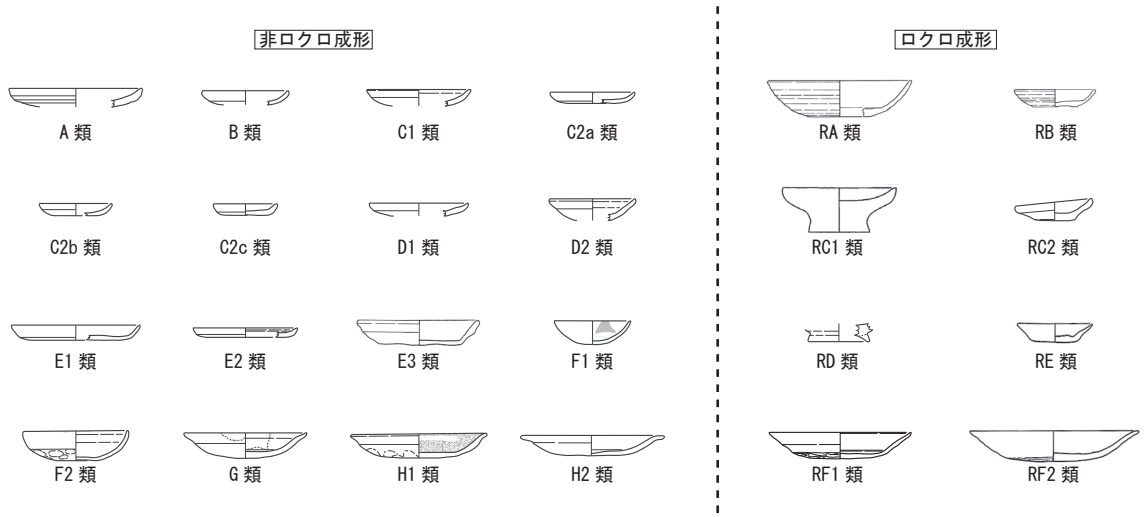
RD 類　内黒の黒色土器椀を RD 類とする。

RE 類　屈曲した体部から口縁部が外反する。

RF 類　底部外面をヘラケズリする。口縁部が内湾し、口縁端部を丸く納めるか小さくつまむものを RF1 類とし、口縁部が外反するものを RF2 類とする。RF1 類は G 類、RF2 類は H 類の器形を模倣したものと考えられる。

第 14 表　土師器皿の分類比較表

	堀内 2020	井口城 1990	越前 1996	森 2003・2005	森 2006
非ロクロ(手涅ね)成形	A 類		NA Ⅰ類・NA Ⅱ類	A1 類	
	B 類	B4 類	NDⅠ類	A2 類	
	C1 類		ND Ⅱ類	B3 類	
	C2a 類	B1 類	ND Ⅱ類	B1 類	
	C2b 類	B5 類		B2 類	
	C2c 類			Z7 類	
	D1 類		NB Ⅰ類	Z3 類	
	D2 類		NC Ⅱ類	A3 類	
	E1 類	B2 類	NG 類	B4 類	
	E2 類	B7 類	NH 類	Z1 類	
	E3 類	B6 類	NF 類	Z4 類	
	F1 類		NC Ⅲ類	B2 類	
	F2 類	B3 類	NC Ⅰ類	Z6 類	
	G 類	B8 類	N J 類	C5 類	
	H1 類	B9 類	NE 類	Z9 類	
	H2 類			Z8 類	
ロクロ成形	RA 類		RB 類	K 類	A1 類
	RB 類	A1 類	RD 類・RE 類		S7 類
	RC1 類		RA Ⅰ類		C2 類
	RC2 類		RA Ⅱ類（RB 類）		C1 類
	RD 類				B4 類
	RE 類	A2 類	RG 類		S8 類
	RF1 類	A3 類	RF 類		S10 類
	RF2 類	A4 類	RF 類		S10 類



第 31 図　土師器皿の分類図

２　基準資料

今回調査から基準資料とした遺構は、竪穴建物 SK21・SK85・SK86(SK05 を含む)、溝 SD37、土坑 SK16・SK43・SK44・SK61・SK101・SK107、ピット SP23・SP84 である。個別の詳細についてはここでは割愛する。また、友坂遺跡の過去調査の遺物については、第５章第１節を参照する。

（１）黒崎種田遺跡（富山市）

①SE48　木組井戸である。中世土師器皿は、C1 類、D2 類、E3 類、F1 類、ロクロ RA 類がある。珠洲Ⅱ期、青磁椀Ⅱ類、古瀬戸、八尾が伴う。

②SD54　屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、C2a 類、C2b 類、F1 類、F2 類がある。珠洲Ⅳ期、青磁椀Ⅲ類、古瀬戸、八尾が伴う。13 世紀中頃の中世土師器皿、珠洲Ⅱ期が混入する。

③SE02　石組井戸である。中世土師器皿は、B 類、C2a 類、F1 類、F2 類がある。珠洲Ⅳ期が伴う。

④SE61　石組井戸である。中世土師器皿は、C2a 類、C2b 類、G 類、H1 類がある。

⑤SD50・199　屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、C2a 類、C2b 類、F1 類がある。珠洲Ⅴ期、上田編年第四期の青磁椀、越前が伴う。

⑥SK35・SX49　馬小屋と推測された竪穴状土坑である。中世土師器皿は、C2a 類、C2b 類、G 類、H1 類がある。珠洲Ⅴ期、上田編年第四期青磁椀、越前が伴う。

（２）新庄城跡（富山市）

⑦1-SD05　土塁1-SA01を伴う堀である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、F1類、G類、H1類、H2類がある。

⑧1-SD04　土塁 1-SA01 を壊して作った溝である。中世土師器皿は、C2a 類、C2b 類、F1 類、G 類、H1 類、H2 類、ロクロ RF2 類がある。珠洲Ⅴ～Ⅵ期、古瀬戸後Ⅳ期、上田編年第四～五期青磁椀が伴う。

（３）北反畝遺跡（小矢部市）

⑨SB90・SK90・SK91　SD92 に囲われた掘立柱建物 SB90 と建物に付随した土坑である。中世土師器皿は、A 類、C1 類、ロクロ RA 類、RB 類がある。珠洲Ⅰ期、白磁椀が伴う。

（４）弓庄城跡（上市町）

⑩F 地点 SD511　屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、B 類、C1 類、D1 類、E1 類がある。珠洲Ⅱ期が伴う。

（５）梅原胡摩堂遺跡（南砺市・旧福光町）

⑪SK1283　竪穴状土坑である。中世土師器皿は、B 類、C1 類、D1 類、E1 類、E3 類がある。珠洲Ⅱ期、青磁が伴う。

⑫SK1306　廃棄土坑である。中世土師器皿は、B 類、C1 類、E1 類、E3 類がある。珠洲Ⅳ期が伴う。

（６）田尻遺跡（南砺市・旧福光町）

⑬第２次 SD87･SK141　屋敷を囲む堀、堀と連結する土坑である。中世土師器皿は、C2a 類、C2c 類、D2 類、E1 類、E3 類がある。珠洲Ⅳ期が伴う。SD86 下層溝 SD26 の遺物である 12 世紀中頃の中世土師器皿、珠洲Ⅰ期、白磁が混入する。

（７）井口城跡（南砺市・旧井口村）

⑭SK23　土坑である。中世土師器皿は、B 類、C2a 類、E1 類、E3 類がある。珠洲Ⅲ期が伴う。

⑮SD5　曲輪の堀である。中世土師器皿は、C2b 類、E1 類、H2 類、ロクロ RE 類、RF1 類、RF2 類がある。珠洲Ⅴ～Ⅵ期が伴う。旧堀の遺物である 14 世紀前半の中世土師器皿、八尾が混入する。

⑯SD7　曲輪の堀である。中世土師器皿は、E1 類、H1 類、H2 類、ロクロ RE 類、RF1 類、RF2 類がある。旧堀の遺物である 13 世紀後半の中世土師器皿、珠洲Ⅲ期、青磁椀Ⅲ類が混入する。

⑰SK15　かわらけ廃棄土坑である。中世土師器皿は、ロクロ RE 類、RF2 類がある。

（８）薮田薬師中世墓（氷見市）

⑱中世墓　出土地点がわかる中世土師器皿のみ抜粋。E1 類、F1 類、G 類がある。

３　編年概要

ここからは、第 32 図・第 33 図に示した土師器皿の編年案について記述する。なお、大画期は宮田編年の画期に基づくものとする。友坂遺跡では宮田Ⅱ期（12 世紀後半～ 13 世紀前半）から土師器皿が確認できることから、宮田Ⅰ期（11 世紀中頃～ 12 世紀初め）は今回除外するとする。

宮田Ⅱ期（12 世紀後半～ 13 世紀前半、小画期 3 期）

珠洲Ⅰ～Ⅱ期、大宰府Ｄ～Ｅ期の白磁、同安窯青磁、龍泉窯青磁が伴う。

12 世紀中頃から後半は非ロクロ A 類、C1 類、ロクロ RA 類、RB 類、RC1 類が存在する。口径は 8.0 ～ 9.4 ㎝、10.8 ～ 15.8 ㎝の大小があるが、バラツキがみられる。12 世紀末～ 13 世紀初頭になると、非ロクロには、口縁端部に面取りする B 類、二段ナデ A 類が在地化したと考えられる D1 類、一段ナデの C2 a 類、E1 類などが出現する。A 類はこの頃には喪失する。ロクロ土師器は徐々に減少し、内黒 RD 類はこの頃に喪失する。口径は 6.0 ～ 9.0 ㎝、14.0 ～ 17.8 ㎝の大小があるが、バラツキがみられる。13 世紀前半には、非ロクロ土師器には前小画期で出現したものに加え、E1 類から派生した E2 類、口径が大きく器高が 2 ㎝を超える大法量の D2 類、E3 類、F1 類、F2 類が出現する。大法量の D2 類、E3 類、F1 類、F2 類の出現とともにロクロ RA 類は減少する。口径は 6.6 ～ 9.0 ㎝、10.8 ～ 12.0 ㎝の大小がある。口径の大きいものは前小画期に比べ縮小傾向がみられ、口径が 11 ～ 12 ㎝付近にまとまりを見せる。小 7 ～ 9 ㎝台、大 11 ～ 12 ㎝台という法量の二分化が明瞭になる。

宮田Ⅲ期（13 世紀後半～ 14 世紀前半、小画期 2 期）

珠洲Ⅲ～Ⅳ期、大宰府Ｆ期の口禿げ白磁、龍泉窯青磁が伴う。

概ねⅡ期から継続する器形がほとんどで、在地化したと考えられる。13 世紀後半に C2a 類のナデ幅を狭くした（一段ナデの簡略化した）C2b 類、器壁が厚くなった C2c 類が出現した。ロクロ土師器は 13 世紀後半頃に姿を消す。B 類、C1 類、C2c 類、E3 類、F2 類は 14 世紀前半で姿を消す。口径はⅡ期で明瞭となった法量の二分化が維持され、口径は小 6 ～ 9 ㎝台、大 11 ～ 14 ㎝台（主に 11 ～ 12 ㎝台）が主体をなしている。

宮田Ⅳ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半、小画期 2 期）

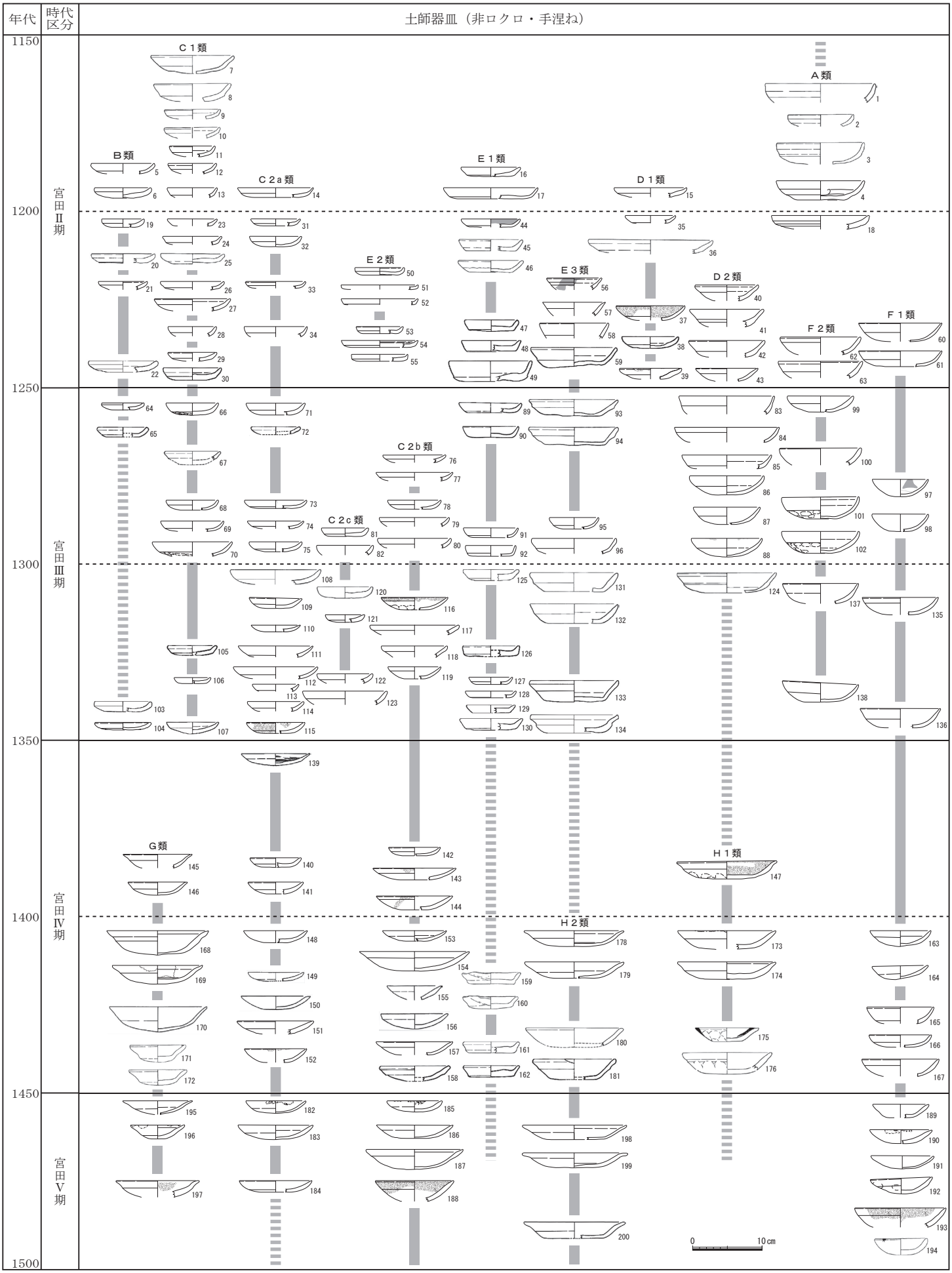
珠洲Ⅳ～Ⅴ期、大宰府Ｇ期の龍泉窯青磁、八尾、古瀬戸が伴う。

Ⅲ期から器形に大きく変化が見られるが、C2a 類、C2b 類、F1 類はⅢ期から継続する器形である。14 世紀後半に北山文化が越中に浸透していたことを物語る金付き土器が黒崎種田遺跡から出土しており、北山文化の浸透とともに京都系土師器皿の影響を受けた内型つくりで成形した H 類が出現する。H1 類は D2 類、H2 類は E3 類を祖型としたと考えられる。丸底から口縁部が外反する G 類も出現する。また、15 世紀前半にはロクロ土師器が再び出現する。口径は小 7.2～9.9㎝、中 10.8～11.8㎝、大 13.8～15.6 ㎝の大中小が確認でき、Ⅲ期にはあまり見られなかった 14～15 ㎝の大皿が増加する傾向にある。

宮田Ⅴ期（15 世紀後半～ 16 世紀初め）

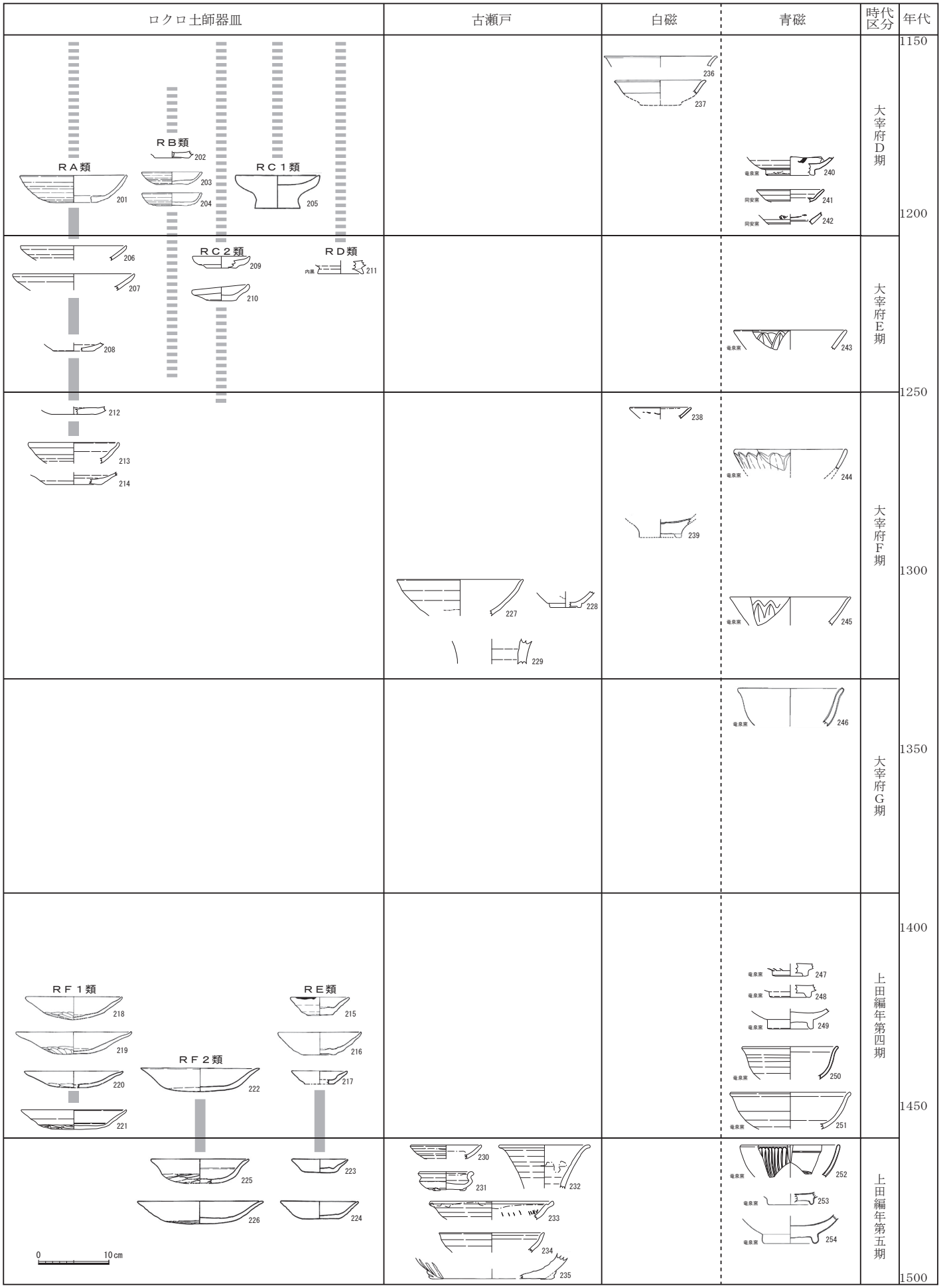
珠洲Ⅴ～Ⅵ期、上田編年第四～五期の青磁、古瀬戸が伴う。

概ねⅣ期から継続する器形がほとんどである。15 世紀後半の土師器について、筆者が近世成立期の土師器皿の編年（堀内 2019）のⅠ期に該当し、その中で分類した「在地系 A 類」は C2a 類、C2b 類、「在地系 B 類」は E1 類、「京都系土師器 C1 類」は H2 類から派生するものが該当すると考える。口径はⅣ期同様に小 7.6 ～ 10.3 ㎝、中 10.6 ～ 11.8 ㎝、大 13.0 ～ 15.0 ㎝の大中小が確認できる。（堀内）



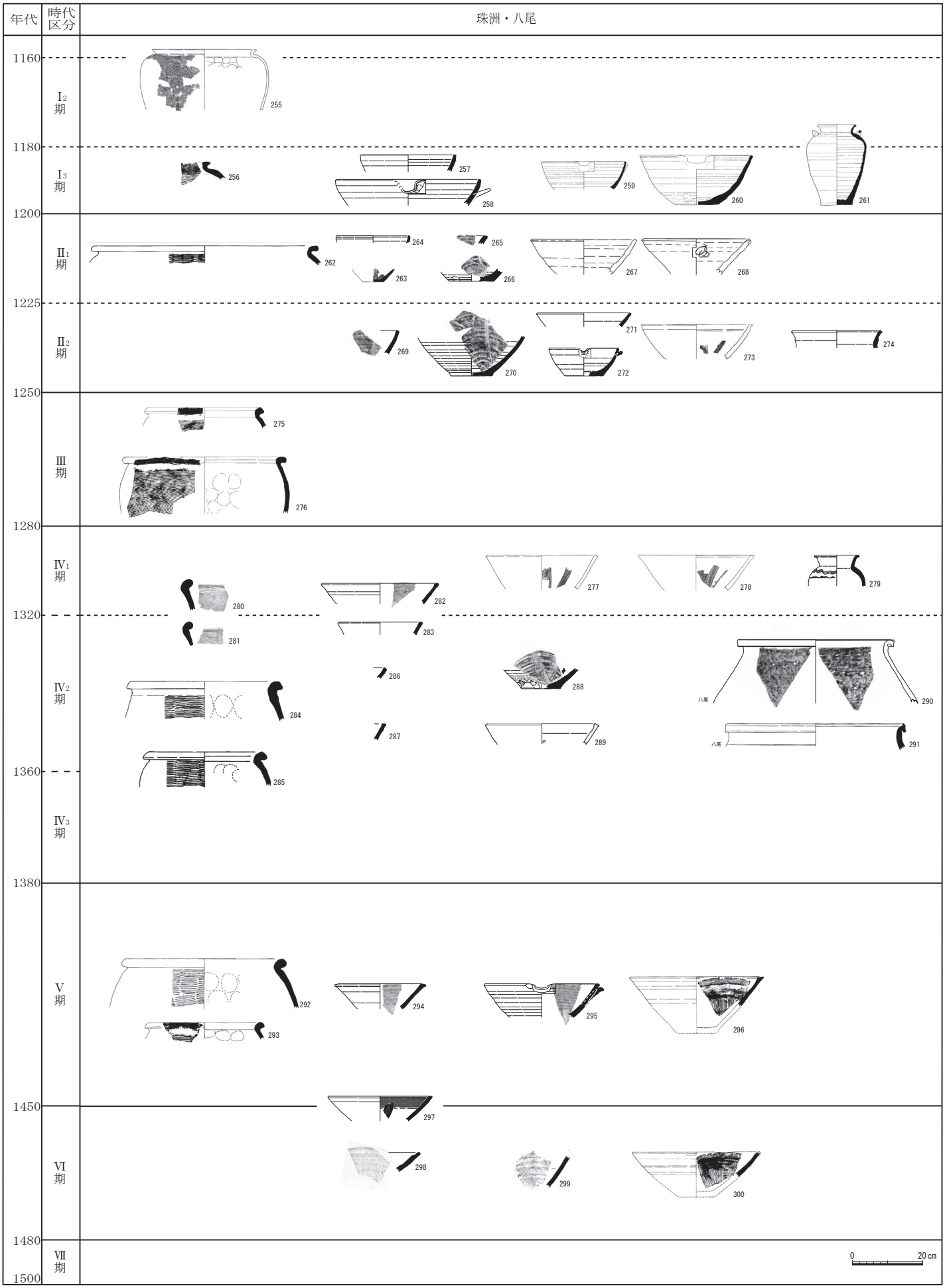
第 32 図　土師器皿の編年案

友坂遺跡：(SD37)6, 13, 15, 17, 71, 83, 99, 111, 112, 118, 119, 202, 241, 242　(SK16)18, 35, 41, 55, 63, 106, 113, 114, 122, 123, 209　(SK21)11, 12, 76, 77, 85, 100, 214　(SK43)238 (SK44)66　(SK61)28, 34, 53, 54, 57, 62　(SK85)19, 23, 24, 31, 32, 44, 206, 207, 211 (SK86・05)21, 26, 27, 33, 40, 50 ～ 52, 56　(SK107)4, 14, 16, 68 ～ 70, 73 ～ 75, 78 ～ 82, 86 ～ 88, 90, 91, 95 ～ 98, 101, 102　(SK101)213　(SP23)5, 240　(SP84)210　(農道 SD04)64, 212　(農道 SD05) 117　(農道 SD06) 84, 110, 121, 229　(1 次 SD21) 149, 150, 155, 156, 170, 200　(1 次 SD22)246 (1 次 SE41)239　(2 次 SD126)139　(2 次 SK151)205　(4 次 SD01) 235, 253, 254　**黒崎種田遺跡**：(SE02)104, 115, 136, 138 (SE48)29, 37, 42, 58, 60, 61, 208, 243　(SE61)140 ～ 147　(SD50・199)151, 152, 157, 165 ～ 167, 247 ～ 249　(SD54)39, 43, 109, 116, 135, 137, 227, 228, 245



第 33 図　ロクロ土師器・古瀬戸・貿易陶磁の編年案

黒崎種田遺跡：(SK35・SX49)184, 188, 192, 193, 197　**新庄城跡**：(1-SD04)182, 183, 185 ～ 187, 189 ～ 191, 195, 196, 198, 199, 221, 230 ～ 234, 250 ～ 252 (1-SD05)148, 153, 154, 163, 164, 168, 169, 173, 174, 178, 179　**北反畝遺跡**：(SB90)2, 3, 8　(SK91)9, 10, 201, 203, 204　**弓庄城跡Ｆ地点**：(SD511)20, 25, 36, 45, 46
梅原胡摩堂遺跡：(SK1283)22, 30, 38, 47 ～ 49, 59　(SK1306)103, 107, 129, 130, 133, 134　**田尻遺跡２次**：(SD87)1, 7, 124, 131, 132, 236　(SK141)108, 120, 125
井口城跡：(SD5)105, 126, 158, 162, 181, 217, 220, 222　(SD7)87, 161, 175, 176, 180, 215, 216, 218, 219, 237, 244　(SK15)223 ～ 226　(SK23)65, 72, 84, 89, 90, 93, 94
薮田薬師中世墓：159, 160, 171, 172, 194



第 34 図　珠洲・八尾の編年案

友坂遺跡：(SD37)265,266,288,290　(SK61)269,270　(SK85)264　(SP23)257,258　(農道 SD06)286　(1 次 SD21)292　(1 次 SD22)284　(1 次 SD25)262,263　(2 次 SD129)285　(4 次 SD01)256,299　**黒崎種田遺跡**：(SE02)287　(SE48)271　(SK35)274　(SD50)279,294,295　(SD54)272,280 ～ 283　**新庄城跡**：(1-SD04)297,298　**北反畝遺跡**：(SK91)259,260　(SD92)261　**弓庄城跡 F 地点**：(SD511)267,268　**田尻遺跡 2 次**：(SD87)255,277,278　**梅原胡摩堂遺跡**：(SK1283)273　(SK1306)289　**井口城跡**：(SD5)291,293,296,300　(SD7)275　(SK23)276

第３節　友坂遺跡中世館跡の変遷

今回の調査区は、中世の方形館を検出した第1次・第4次調査区の北東に隣接する。方形館の堀と軸が揃う遺構も多いが、軸が大きく異なる遺構や方形館より時期の古い遺物もみられる。ここでは、遺構の主軸方位や切り合い、前節で検討された出土遺物によって方形館周辺の遺構を６段階に分類し、方形館成立前を友坂１・２期、方形館存続期を友坂３～５期、方形館廃絶後を友坂６期として、中世館跡の変遷を検討する（第15表、第35図）。あわせて方形館成立前後の地割の変化について、見通しを述べたい。

１　各期の概要

友坂１期（12 世紀後半～ 13 世紀前半）　今回の調査区の溝 SD37（古）・SD125（古）・SD106 の時期である。SD37（古）と SD125（古）は同一の溝と想定されるが、北側は第 8-4 次調査区まで延びておらず、途切れる可能性が高い。両溝は後述する古代からの地割 A の一町四方の方格線に一致し、集落域を限る区画溝と考えられる。溝の東側では１期から６期を通じて遺構が希薄となることから、区画溝の有無にかかわらず同地が一貫して境界性を帯びていたことが分かる。溝の西側では竪穴建物が SK85 → SK86 → SK21（２期）と建て替えられる。同規模の竪穴遺構は、第１次調査の SK54・55 や第２次調査の SK152 のように掘立柱建物に隣接して構築されており、貼床を伴うものもあることから、掘立柱建物に付属する作業場ないし倉庫的な建物であった可能性が考えられる。SK85・86 もこれらと同様の竪穴遺構であれば、近接して掘立柱建物が存在することが想定される。また竪穴建物の南西にある柵 SA129 と、竪穴建物と重複する柵の可能性がある SP84 を含むピット列は、竪穴建物と前後してＬ字の区画を作り出している。１期の遺構の広がりは遺跡全体としては散漫であるが、今回の調査区には区画溝と柵、竪穴建物があり、方形館成立以前に区画性を帯びた小規模な居住域が存在したことを示している。区画の中心は旧プール跡地の中に想定される。遺物は土師器皿、珠洲のほか、青磁の出土が目立つ。

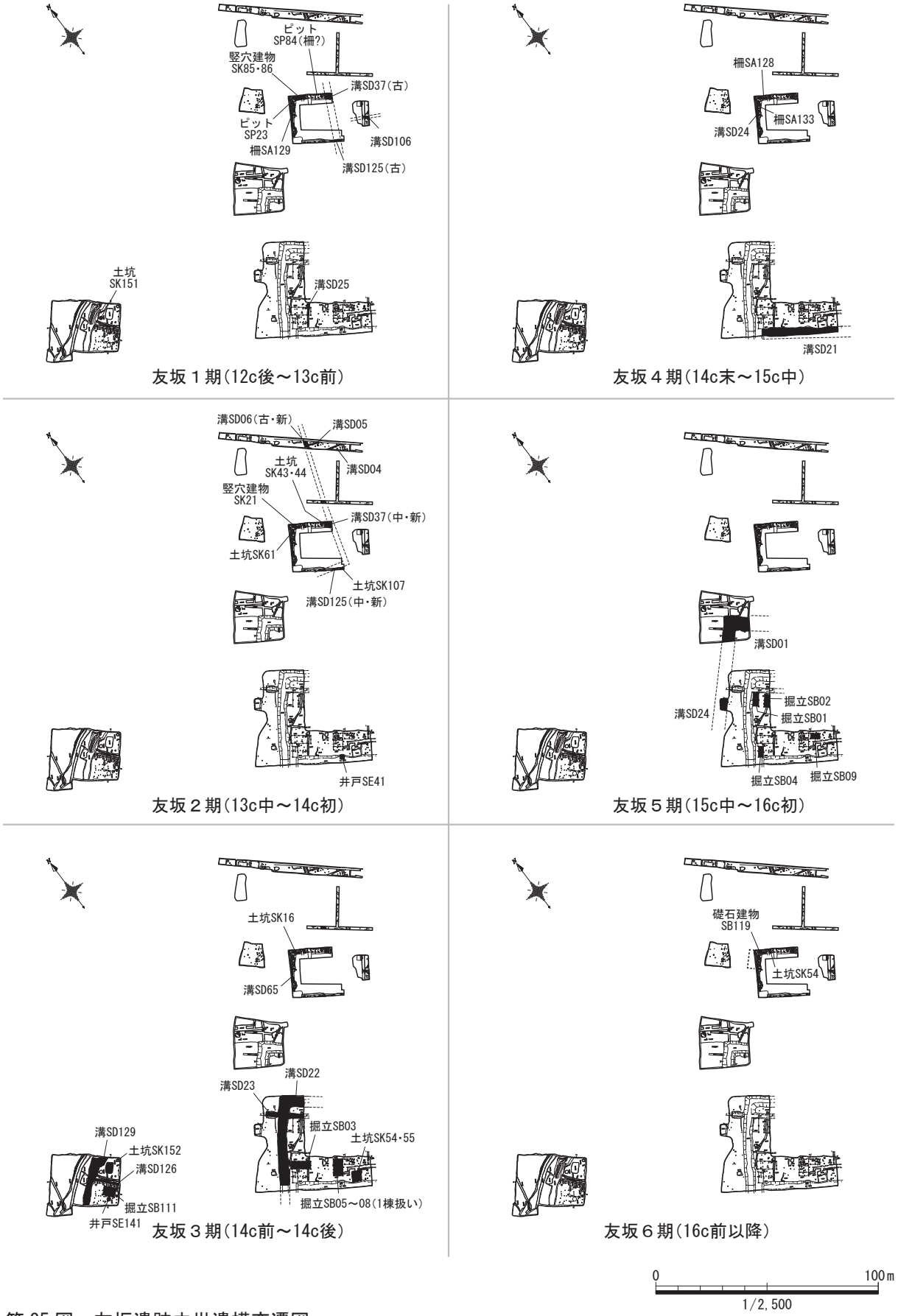
友坂２期（13 世紀中頃～ 14 世紀初頭）　今回の調査で最も多く遺構・遺物が検出された時期である。１期 SD37・125 古段階の埋没後に、規模の縮小と方位の変更を伴って改修された SD37・125 の中･新段階があり、さらに両段階の間には土師器皿の廃棄土坑 SK107 も介在し、３時期に細分される。SD37・125（中・新）は、地割 A・B と異なる方位を採用し、調査区南端で折れ曲がると想定される。北側は農道 SD06 まで続いており、60 m以上の長さがある。農道 SD06 は掘り直しによる古・新段階があり、SD37・125 の中・新段階に対応する。SD125 の西側は第４次調査 A 地区までは延びていない。SD37 中段階は珪藻･花粉分析により、常時の滞水はなく、頻繁に乾く環境にあったとされることから、これらの溝はＬ字に区画する閉鎖的な溝であったと考えられる。区画内部には、竪穴建物 SK21 や土坑 43・44・61 などがある。SK107 は土師器皿が大量廃棄された土坑であるが、炭化物の年代測定で 13 世紀後半の数値が得られたこと、SD125 新段階で 14 世紀代の八尾が出土することから、SD125 の中・新段階の間に位置付けられる。区画内側から土師器皿が廃棄されることから、SD125 新段階への改修の前に、溝の屈曲点において土師器皿を大量に使用する行為が行われたことが想定される。また SD37 に近接する SK43 は、掘立柱建物の柱穴としては規模が大きいため、SD37 に懸かる橋を想定した場合に橋脚となる可能性がある。SK43 は３期までに抜き取り穴（SK44）により消滅する。２期は、今回の調査区に遺構が偏在する傾向や竪穴建物の継続が１期を踏襲するが、１期とは方位や区画の広がりが異なる。一方で、３期に方形館が成立する第１次調査区には井戸が存在するものの、全体として３期に繋がる要素が見受けられない。遺物は土師器皿、珠洲、白磁などがある。

友坂３期（14 世紀前半～後半）　３期は第１次調査区に 40 m超の方形館が成立する時期である。主軸方位は、堀 SD22 の示すＮ－ 37°－Ｅへと大きく変化し、以後５期まで 36 ～ 39°で推移する。これは前代までと異なる新たな地割Ｂに基づいている。方形館内には２×５間の側柱建物 SB03、２×４間の総柱建物（SB05 ～ 08 を１棟扱い）がＬ字に配置される。この総柱建物と同尺（14 尺）の幅をもつ竪穴状土坑 SK54・55 は、この時期の竪穴建物と考えられる。同様に第２次調査区においても区画溝と掘立柱建物、井戸、竪穴状土坑の組合せがある。今回の調査区では、堀 SD22 の延長線上に位置する溝 SD65 があり、その SD65 が途切れた先には、直交する土坑 SK16 がある。SK16 は溝状の土坑で、SD65 とあわせてＬ字の区画が形成される。３期は、新たな地割に基づいた方形館を中核に、複数の区画が取り巻く複郭の構造がみてとれる。遺物は土師器皿、八尾、珠洲、青磁がある。

友坂４期（14 世紀末～ 15 世紀中頃）　４期は第１次調査区の堀 SD21 の時期である。３期の SD22 は土層断面に掘り直しの形跡があり、自然堆積を示していることから、当期まで残存した可能性がある。その場合には SD21 と SD22 の間が土橋状の通路となり、南北 35 mほどの区画が形成されることになる。今回の調査区では、３期に引き続いて SD22 の延長線上にある溝 SD24 と柵 SA133、直交する柵 SA128 により、Ｌ字の区画が形成される。４期は、３期の方形館を継承したものであるが、建物が検出されず、居館の活動が低調な印象が見受けられる。遺物は土師器皿、珠洲がある。

第 15 表　友坂遺跡遺構変遷

年代	時期区分	主要遺構						主軸方位
		令和元年度調査			昭和56・昭和57・平成4年度調査（※は平成8年度農道調査）			
		礎石建物・竪穴建物・柵	溝	土坑・ピット	掘立柱建物	溝	土坑・井戸	
1150								
1200	友坂1期	SK85 SA129 SK86	SD37（古） SD125（古） SD106	SP23 SP84（SA?） SK61		SD25	SK151	N-26°～28°-E
1250	友坂2期	SK21	SD37（中） SD125（中）	SK43・44 SK107		※SD06（古） ※SD04	SE41	N-17°-E
1300			SD37（新） SD125（新）			※SD05 ※SD06（新）		N-17°-E
1350	友坂3期		SD65	SK16	SB03・05～08 SB111	SD22・23 SD126・129	SE141 SK152	N-36°-E N-49°-E
1400	友坂4期	SA128・133	SD24			SD21		N-35°-E
1450	友坂5期				SB01・02・04・09	SD24（H4・SD01）		N-38°～39°-E
1500	友坂6期	SB119		SK54				N-43°-E



第 35 図　友坂遺跡中世遺構変遷図

友坂5期(15世紀中頃～16世紀初頭)　堀SD21・22が埋没し、新たに堀SD24(第1次調査)・SD01(第4次調査)が出現する。60m超の方形館となり、内部には1×2間の掘立柱建物が分散して配置される。今回の調査区や第2次調査区では遺構が検出されていない。5期は、方形館の大型化に伴って、方形区画内に居住を集約化した時期といえる。遺物は土師器皿、珠洲、古瀬戸、青磁などがあるが、今回の調査区ではほとんど出土していない。

友坂6期（16世紀前半以降）　方形館の堀が全て埋没し、居館としての機能が失われた時期である。ただし、今回の調査区では礎石建物SB119が検出されており、同所が1・3・4期におけるL字型区画の角に位置する場所であったことから、SB119が何らかの象徴性を帯びた建物であった可能性も考えられる。この時期、友坂遺跡内には第7次調査A地区で区画溝、鍛冶工房、井戸が、平成25年度調査区では溝、土坑が検出されており、集落は中世末から近世まで継続する。

2　中世の地割

現在の県道68号線は、延喜式内社に比定される熊野神社及びその別当寺である友坂寺(現在の永源寺)に至る参道であったと推測されている(第1図)。友坂遺跡や友坂天神遺跡において7世紀後半から遺物が出土し始め、8世紀末頃の井田川の氾濫を被りながらも、10世紀まで集落が維持されることは、古代の信仰地としての性格に起因したものであろう。この参道を境に、南北で字名が異なり、地割にも違いがある。一町(109m)四方の方格線をあてはめると、参道南側では26°東、北側では37°東へ傾いている(第1図地割A・B)。旧河道などの地形的影響もあろうが、参道が旧鳥居推定地の東側で折れ曲がることに関連したしたものと考えられる。参道北側では、この屈折地点を基準にすると、ちょうど二町先に第1次調査のSD22とSD23の交点がある(第2図)。SD22に沿う方格線はさらに今回調査のSD06・24・65・93が並走する地点に重なっており、これは地割に基づき、同一地点に繰り返し区画溝を設けたものと判断される。このように参道北側では、友坂3期に地割Bの施行と方形館の成立があり、大きな画期として捉えられる。現在の県道59号線もこの地割に沿っており、その東側に想定される近世飛騨街道の脇道も地割Bの影響を残したものといえよう。友坂3期の段階においても、飛騨街道の前身にあたる道路は十分に想定され、それに直交するように参道が折り曲げられた可能性がある。

これに対し、地割Aは旧鳥居推定地西側で直線的に延びる参道と、それに直交する現集落内の南北道が基準となる。古代以来の伝統的な地割と考えられ、中世の館跡周辺の集落もこの地割を踏襲した可能性が高い。第7次調査のSD02は、古代の溝を中世に復旧したものであるが、地割Aの方格線に一致することから、一町四方の地割が古代まで遡ることを示す証左となる。

3　おわりに

友坂遺跡のある下条地区は古代以来の信仰地であったが、交通の要衝にあるが故に、軍事的・政治的重要性の高まった中世において居館としての機能が付加された。方形館成立以前の1・2期においては、方形館の原型となりうる区画性をもった居住域が既に出現しており、今回の調査区がその中心部に位置することが特筆される。下条の地は文明16(1484)年の文献には、室町幕府奉公衆の小田氏の所領と記されることから、5期の居館跡については小田氏に関わるものと判断される。一方で方形館が成立する14世紀前半は鎌倉幕府滅亡の動乱期にあたり、県内では下村加茂遺跡の調査で、その動乱に起因した館跡の廃絶が想定されている。本遺跡の方形館の成立にあたっては、従来の地割を踏襲せず、新たな地割を採用していることから、鎌倉幕府滅亡の動乱を契機として新たな政治勢力が進出したとも捉えられる。それが小田氏とどう結びつけられるかは今後に残された課題である。(常深)

引用・参考文献

粟島義明 2012「コハクの利用と縄文社会」『考古学ジャーナル』№.627　ニューサイエンス社
井口村教育委員会 1990『井口城跡発掘調査概要』
越前慎子 1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
大野　究 2011「薮田薬師中世墓再考」『平成 22 年度 氷見市立博物館年報』第 29 号 氷見市立博物館
小矢部市教育委員会 1990『北反畝遺跡』
佐伯哲也 2017「12　白鳥城」『戦国の北陸動乱と城郭』 戎光祥出版
下村教育委員会 1999『下村加茂遺跡発掘調査報告』
高瀬重雄監修 1994『日本歴史地名体系 16　富山県の地名』 平凡社
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅱ遺跡、持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2015『平岡遺跡発掘調査報告』
(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2016『野下・新開遺跡発掘調査報告』
富山県埋蔵文化財センター 1992『古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告－中老田Ｃ遺跡・塚越Ａ遺跡－』
富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
富山市教育委員会 1970『金草第１号窯址発掘中間報告書』
富山市教育委員会 1973a『呉羽丘陵城山南部の自然科学および文化史跡調査報告書』
富山市教育委員会 1973b『上堤池遺跡』
富山市教育委員会 1974『境野新遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1975a『富山市古沢遺跡発掘調査報告』
富山市教育委員会 1975b『杉谷（Ａ・Ｇ・Ｈ）遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1976『古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』
富山市教育委員会 1983『古沢Ａ遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1984『呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会 1985『野下遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1988『昭和 62 年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 1999a『栃谷南遺跡』
富山市教育委員会 1999b『金屋南遺跡 (1)』
富山市教育委員会 2000a『向野池遺跡』
富山市教育委員会 2000b『西金屋窯跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2001a『開ヶ丘中山Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2001b『向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002a『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡　開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　開ヶ丘中山Ⅴ遺跡　開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002b『境野新南Ⅱ遺跡　池多東遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002c『向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002d『御坊山遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002e『栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山市教育委員会 2002f『開ヶ丘中山Ⅰ遺跡　開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　開ヶ丘中遺跡　開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003a『北押川Ｃ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003b『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003c『開ヶ丘中遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003d『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ヶ丘中山Ⅰ遺跡　開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2004a『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』

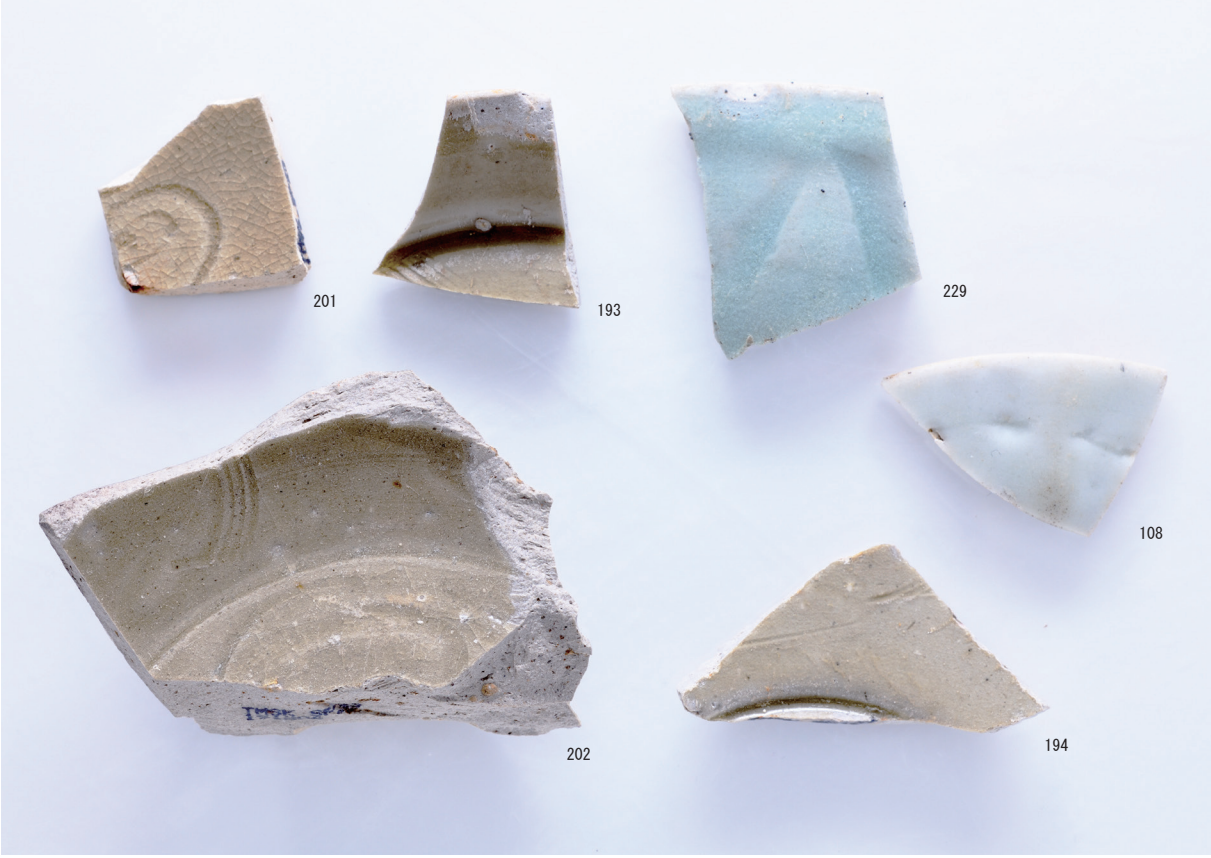
富山市教育委員会 2004b『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007a『開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007b『金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
富山市教育委員会 2008a『北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008b『富崎遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008c『北押川Ｃ遺跡　御坊山遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2009『北押川Ｂ遺跡　北押川Ｃ遺跡　池多東遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012a『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ　－西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡－』
富山市教育委員会 2012b『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』
富山市教育委員会 2012c『二本榎遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014a『富山市内遺跡発掘調査概要 XI　－北代村巻Ｖ遺跡・友坂遺跡・吉作遺跡－』
富山市教育委員会 2014b「西金屋遺跡」『富山市の遺跡物語　№.15』
富山市教育委員会 2014c『新庄城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2015『二本榎遺跡確認調査報告書』
富山市教育委員会 2017『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅧ－境野新南Ⅲ遺跡－』
富山市教育委員会 2019『富山市内遺跡発掘調査概要 21　－友坂遺跡－』
富山市教育委員会 2020『黒崎種田遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2000『富山市西金屋窯跡発掘調査概要』
富山市郷土博物館 2010『特別展　秀吉越中出陣　－「佐々攻め」と富山城』
西井龍儀・小林高範 2005「呉羽山古道の調査」『大境』第 25 号　富山考古学会
婦中町教育委員会 1984『友坂遺跡発掘調査報告書』
婦中町教育委員会 1986『新町Ⅱ遺跡の調査』
婦中町教育委員会 1993『友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』
婦中町教育委員会 1996『堀Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 1997『友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』
婦中町教育委員会 2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2003『鍛冶町遺跡発掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2004『砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2005『砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』
堀内大介 2019「越中における近世成立期の土師器皿の諸様相－富山城跡出土資料から－」『北陸にみる近世成立期の土器･陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に－』(公財)石川県埋蔵文化財センター
堀沢祐一 2008「富山市花ノ木Ｃ遺跡の祭祀具について」『富山市考古資料館報　№.45』 富山市考古資料館
宮田進一 1992「越中における中世土師器の編年」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
宮田進一 1997「越中における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
森隆 2003「富山県の中世土器（資料編）－県東部・富山平野を中心とした地域における－」『富山考古学研究』第 6 号　(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆 2005「富山県の中世土器（資料編 2）－道場Ⅰ遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括－」『富山考古学研究』第 6 号　(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆 2006「富山県における古代末・中世の回転台土師器（資料編)」『富山考古学研究』第 9 号　(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
山本信夫 2000「4, 陶磁器分類 」『大宰府条坊跡 XV』太宰府市教育員会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

調査区全景（空撮、南東から）

礎石建物 SB119 全景（南東から）

図版〇二　遺物（1）

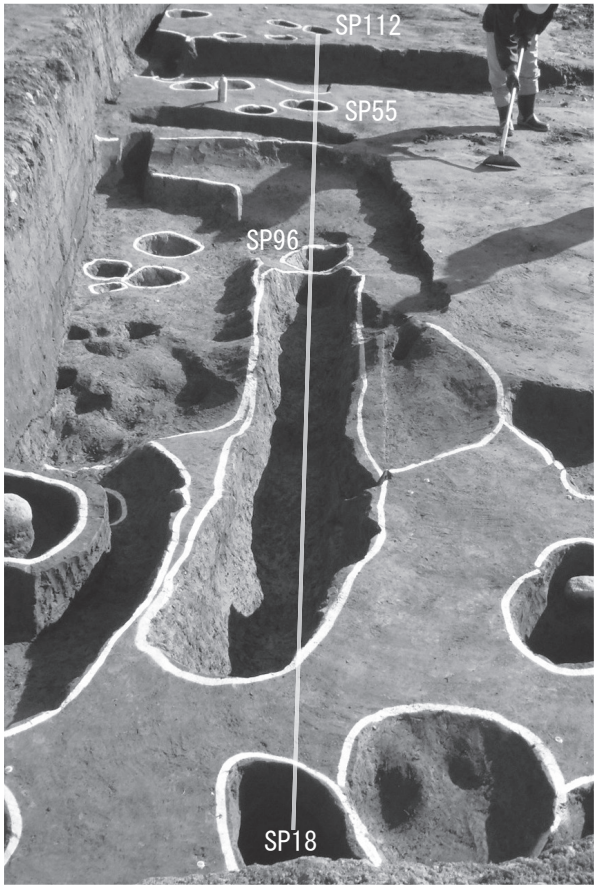
中世土師器（SK107）



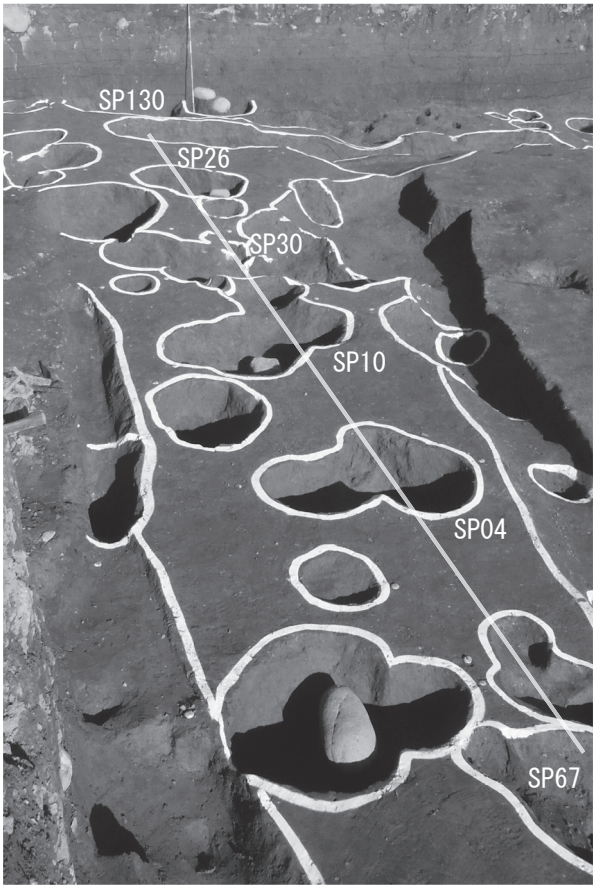
青磁・白磁

調査地区全景（空撮、南から）

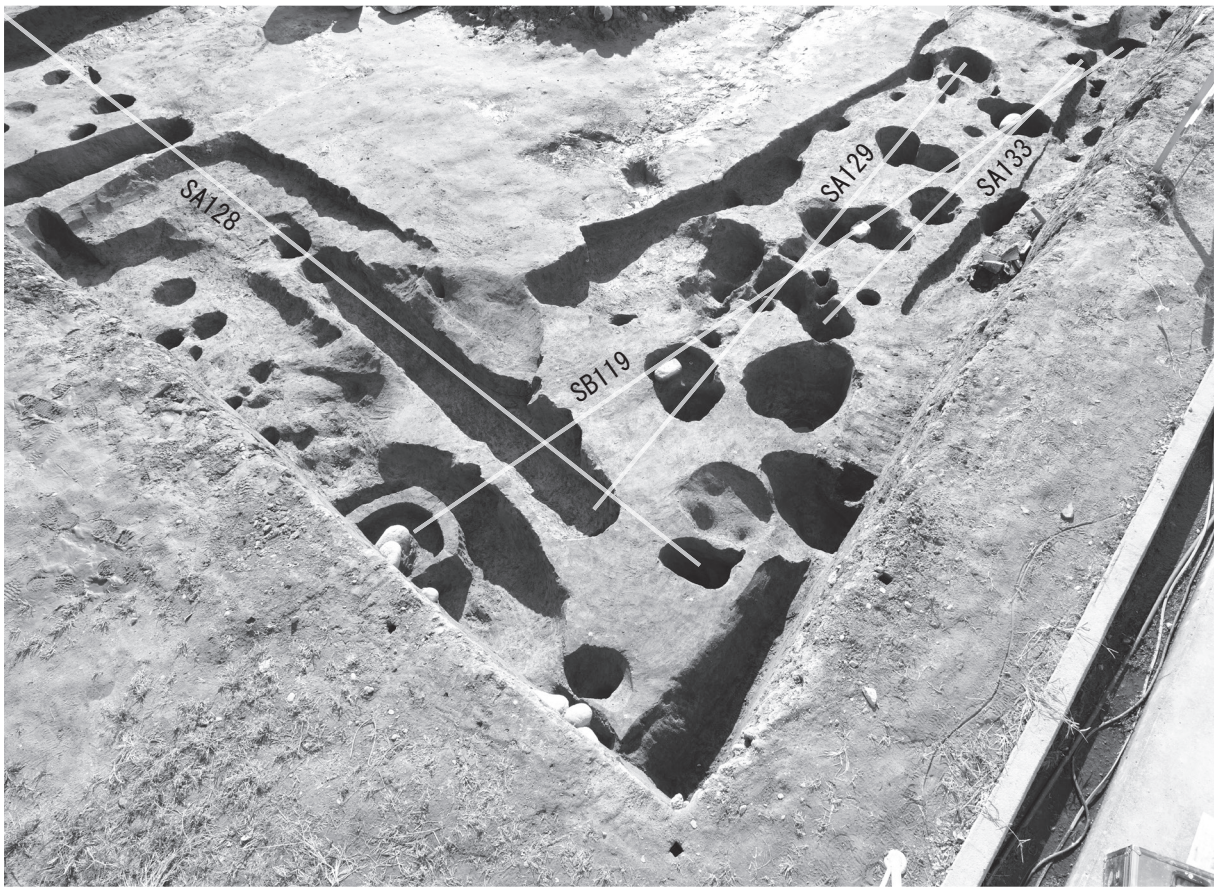
調査地区全景（空撮、右下が北）



SA128 全景（北西から）



SA129 全景（南西から）

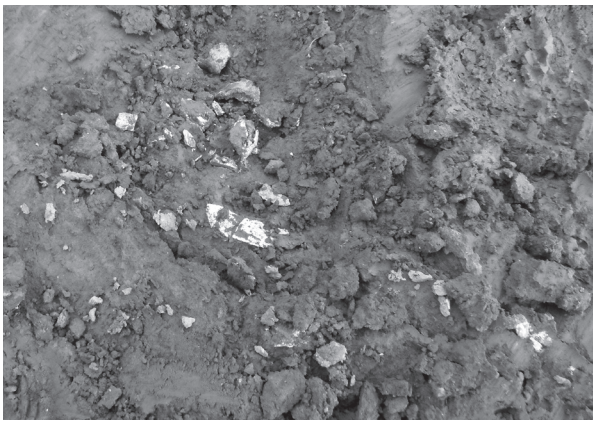


SA128・129・133, SB119 全景（北から）

SB119-SP07 礎石検出状況（南東から）

SB119-SP26 礎石検出状況（北西から）

SB119-SP20 礎石検出状況（北西から）


SK05 人骨検出状況（南東から）

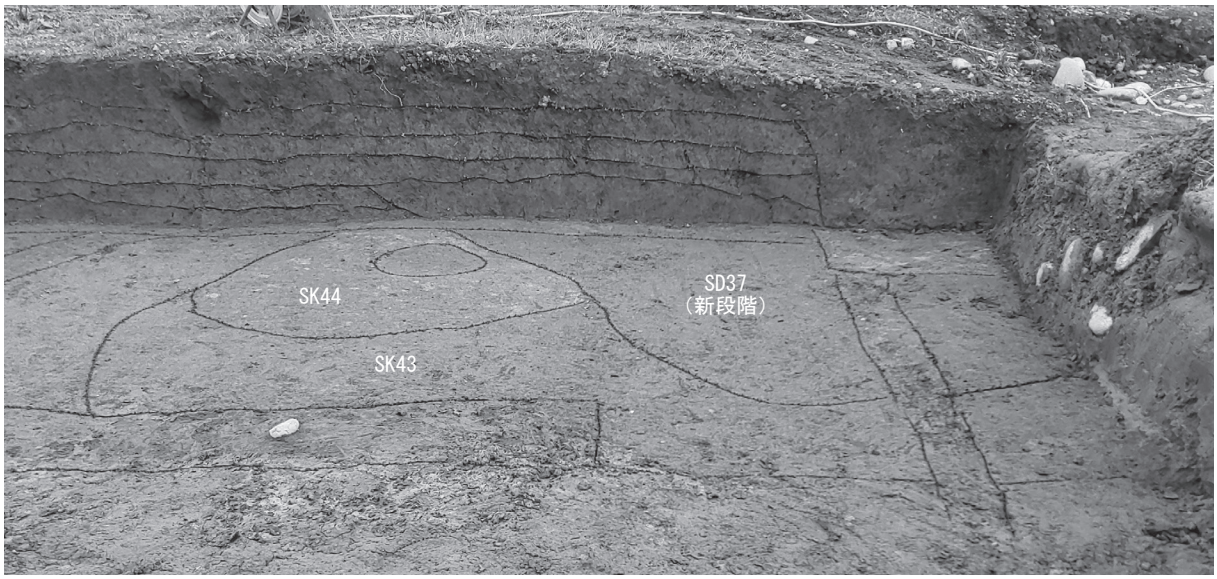
SK16・61 全景（南東から）

SD106 全景（北西から）

SK21 全景（西から）

SK86 全景（南から）

SD37 全景（南西から）



SD37, SK43・44 検出状況（南西から）

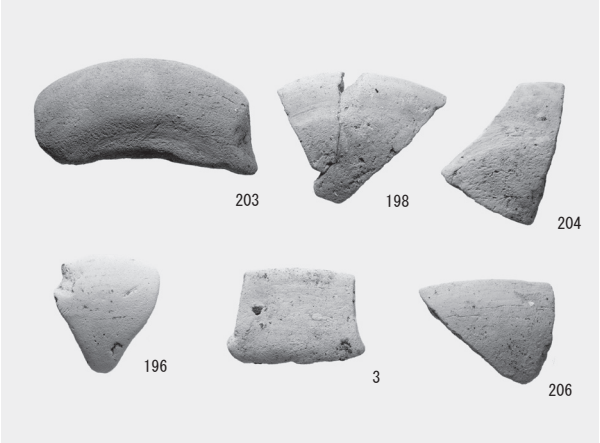
SK43・44 全景（南東から）

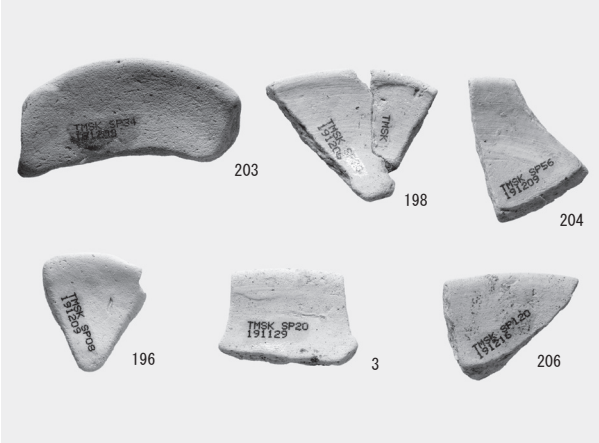
SD36 全景（西から）

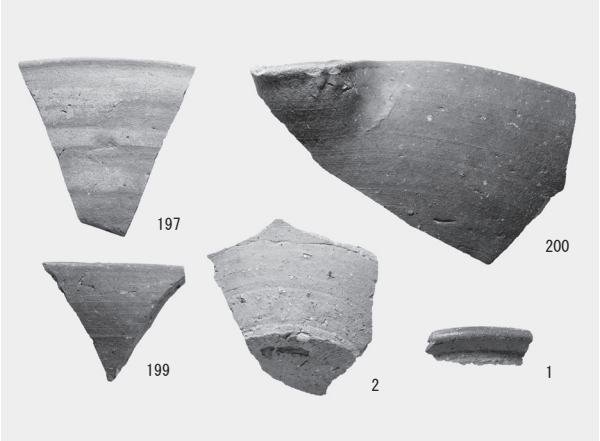
SK107 全景（北から）

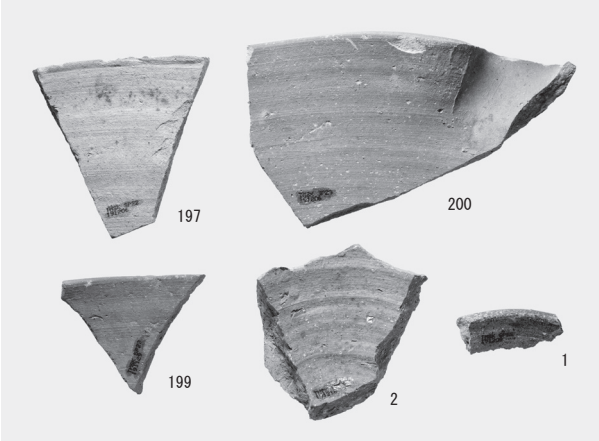
SD125 全景（南東から）

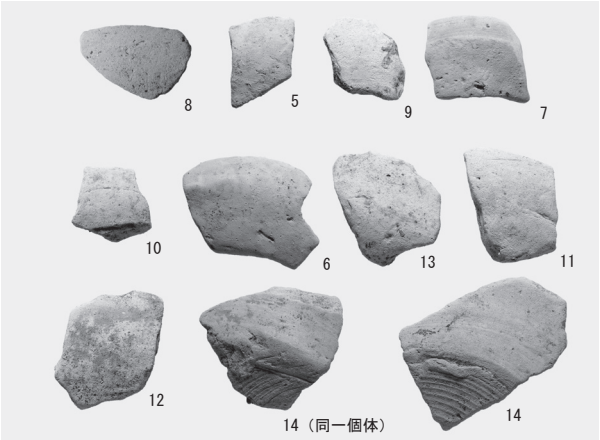
SD125 全景（北西から）

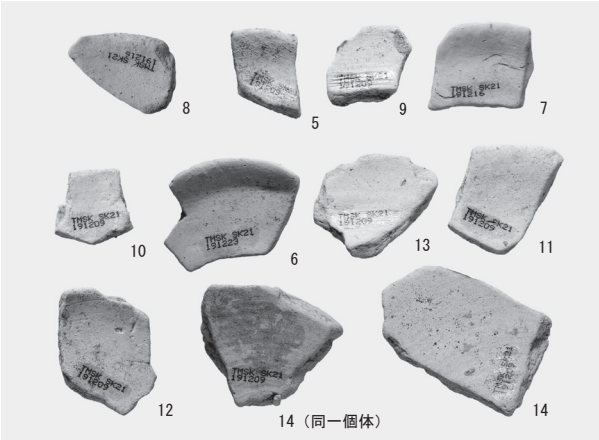


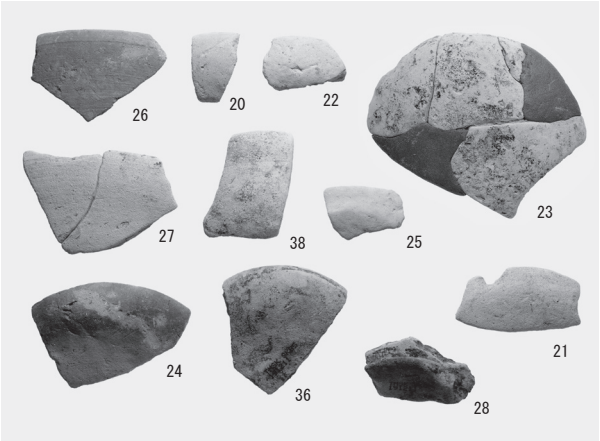


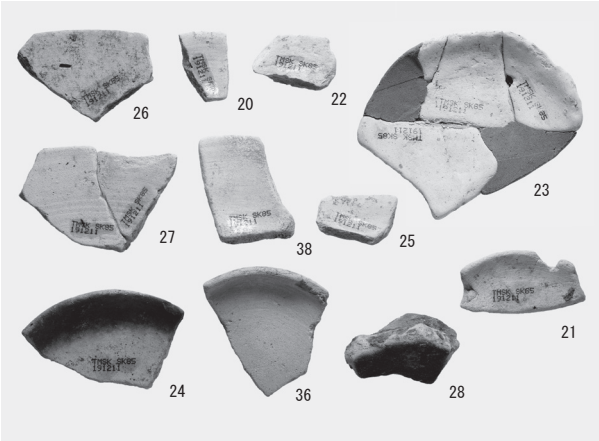




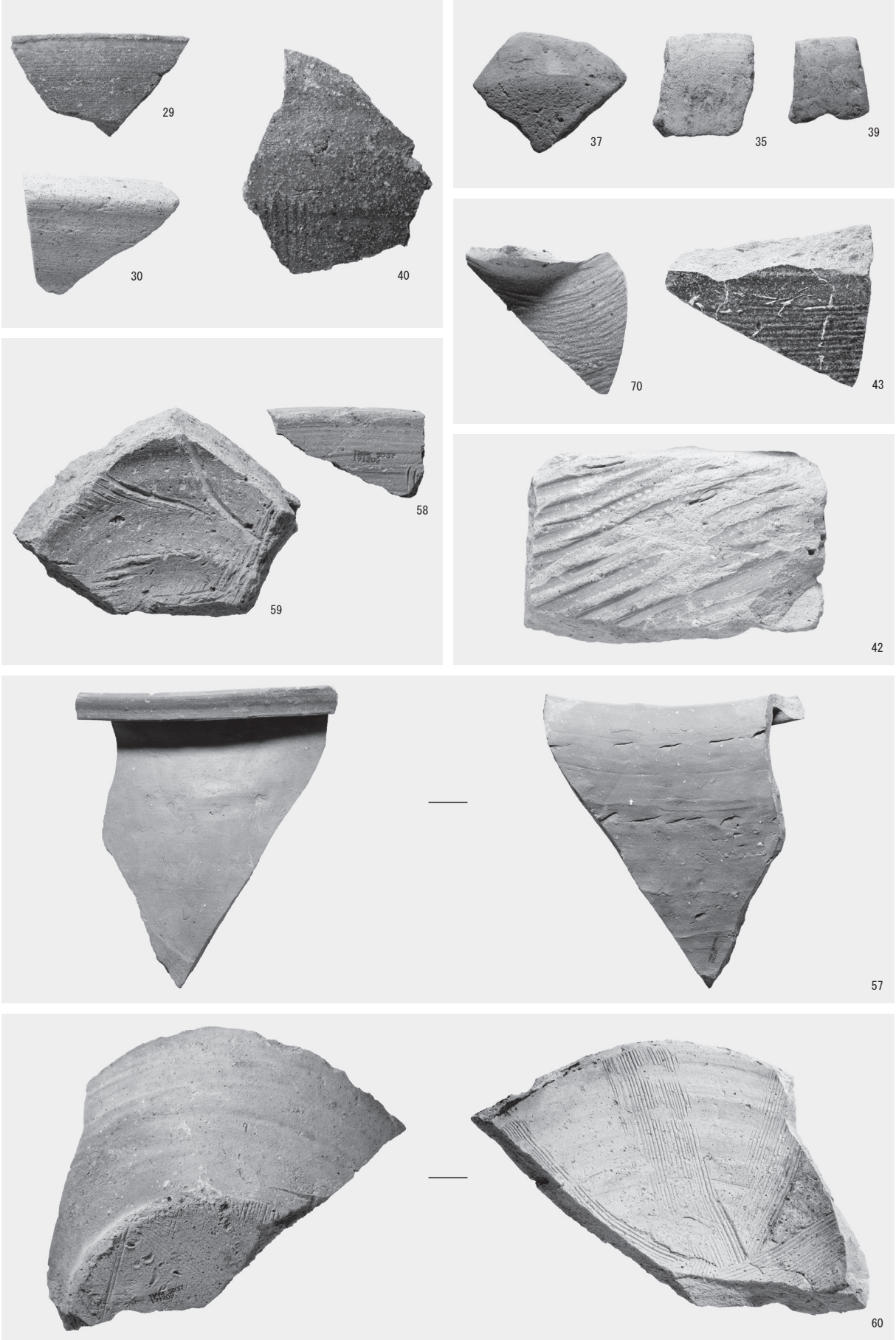




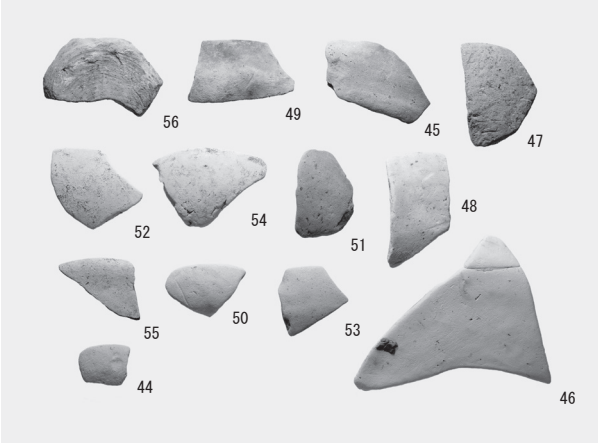


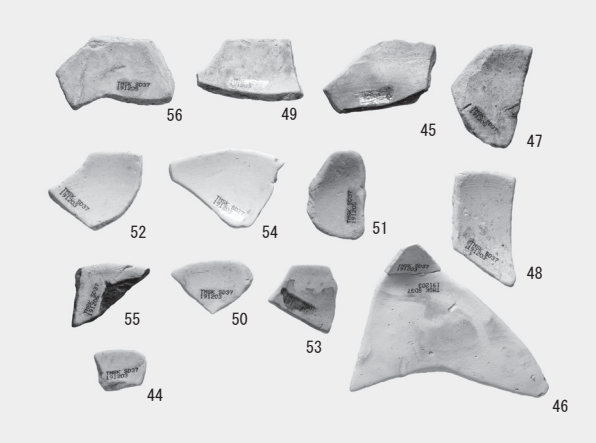


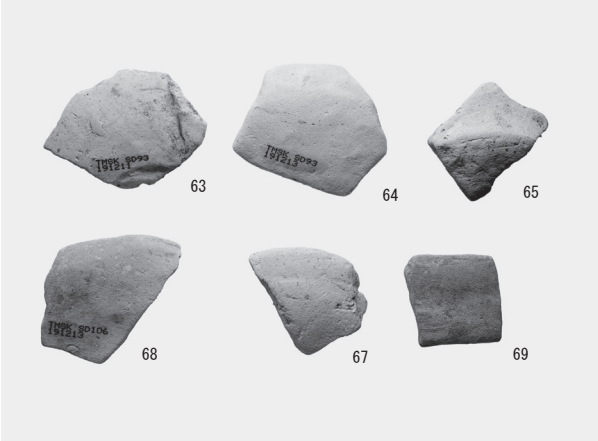
SA128, SB119, SK21・85・86, SP08・22・23・34・120・124 出土遺物

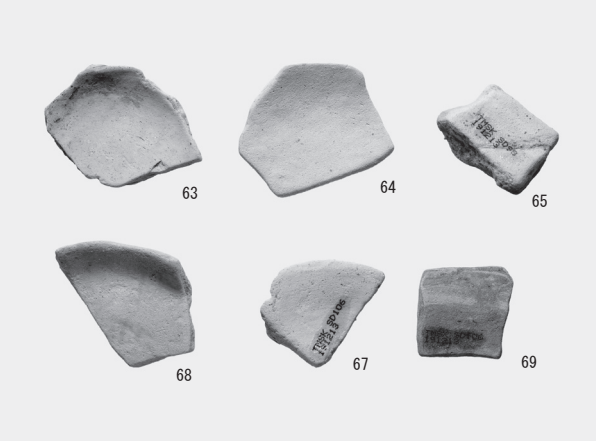


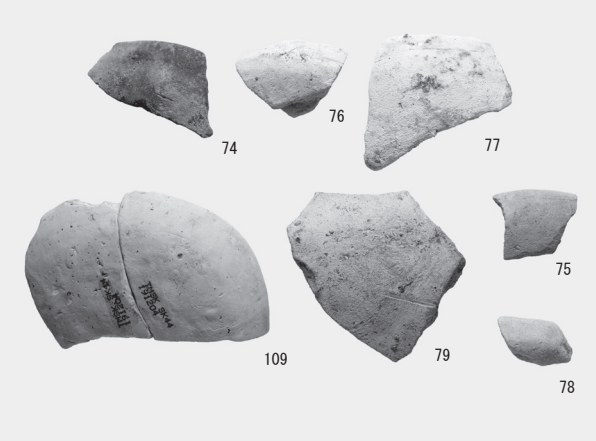
SD06・36・37・106,SK85・86 出土遺物

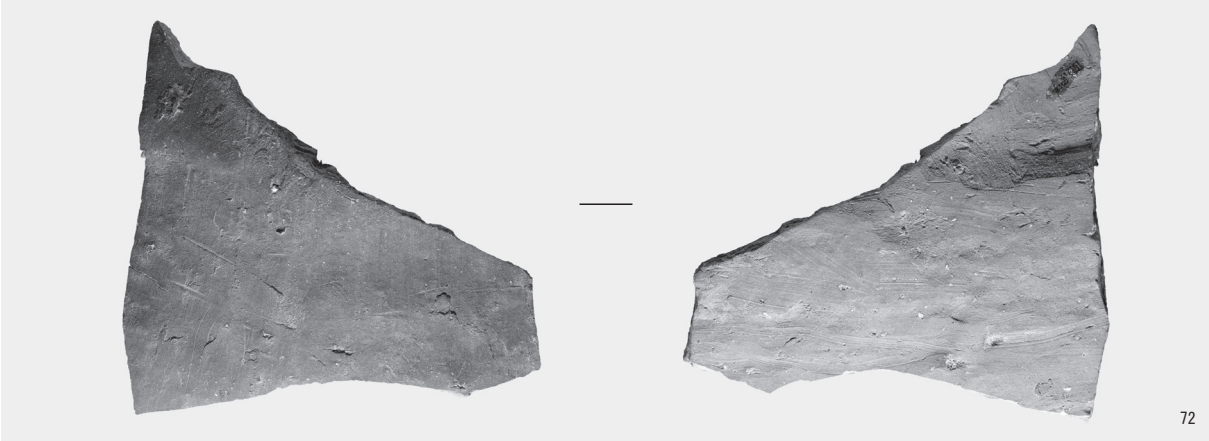






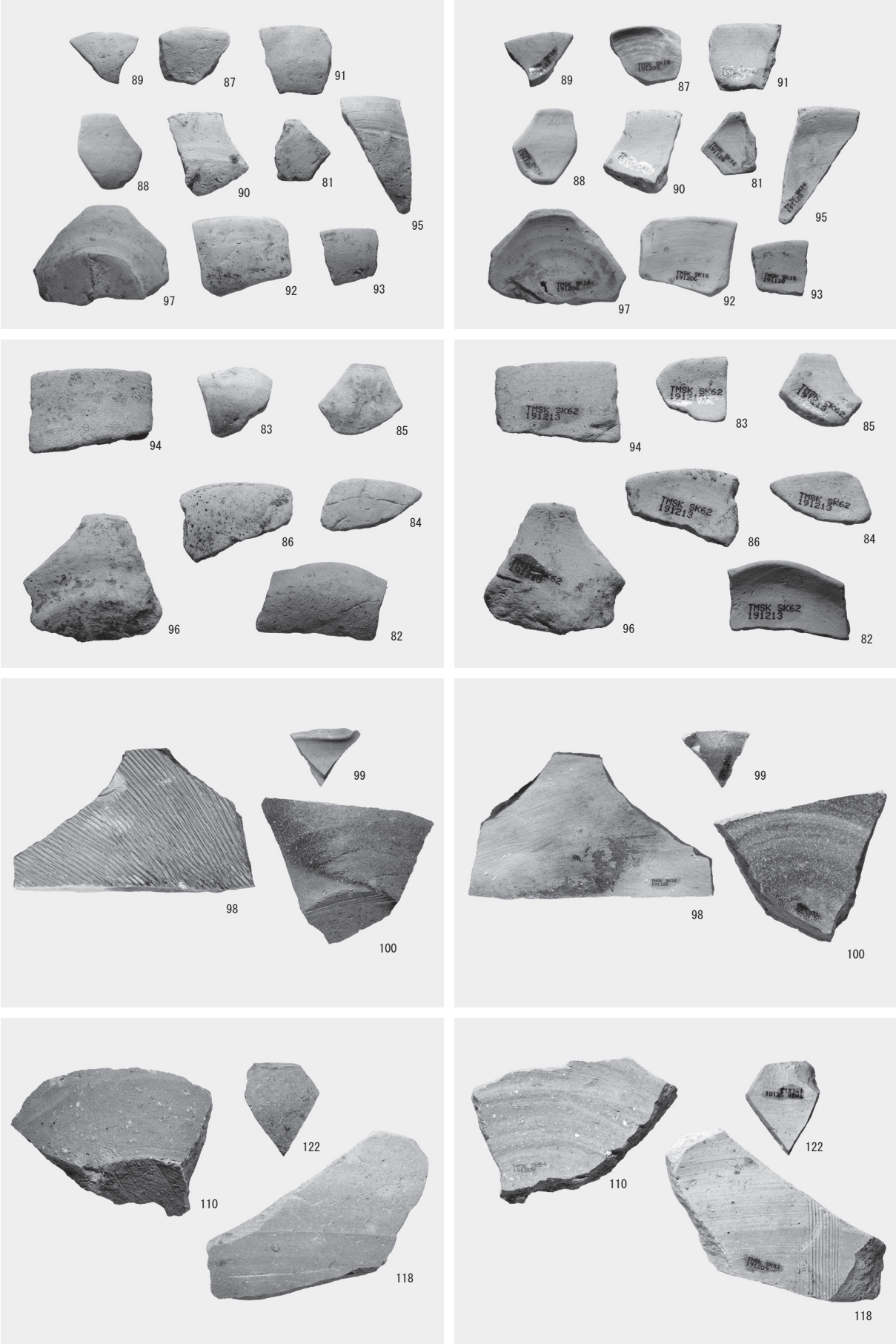




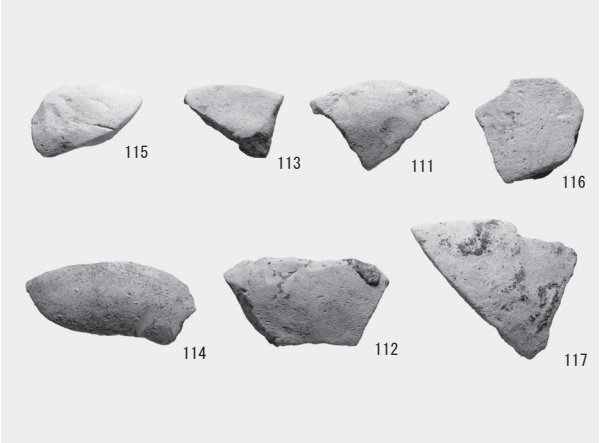


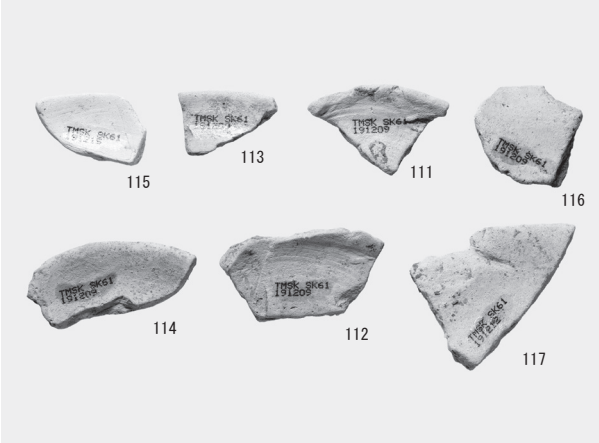
SD37・93・106・125,SK05 出土遺物

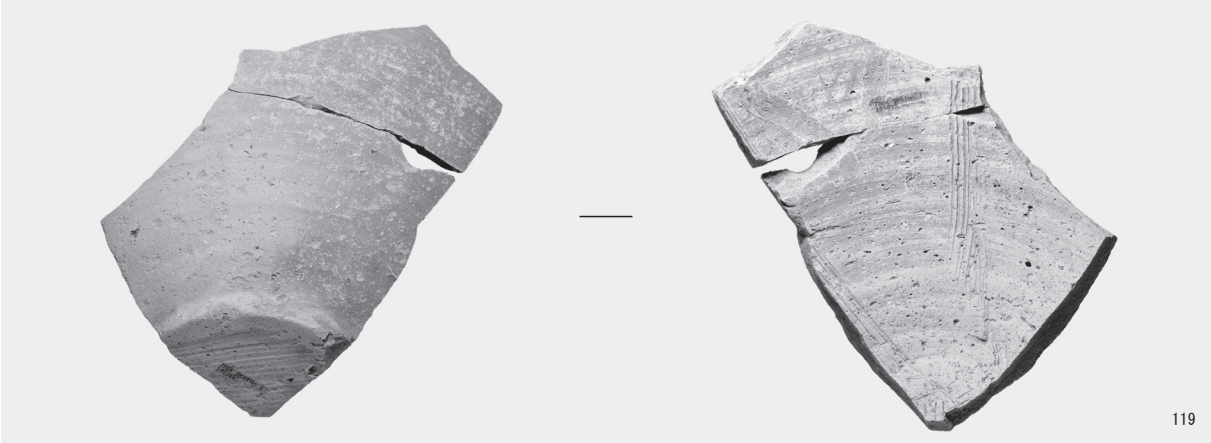
図版一二　遺物(5)

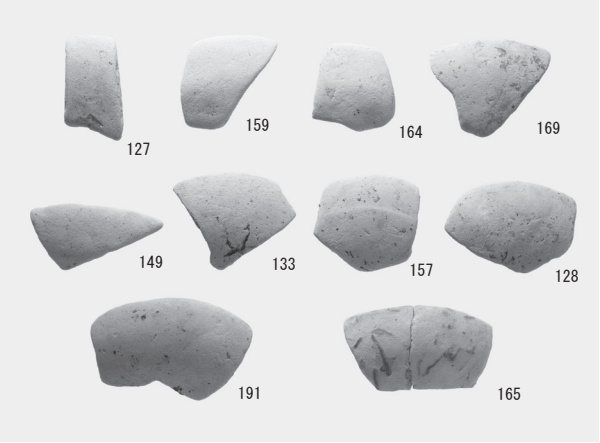


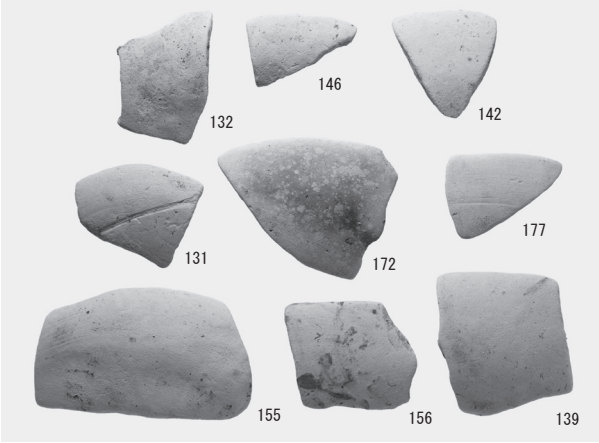
SK16・54・61・101 出土遺物











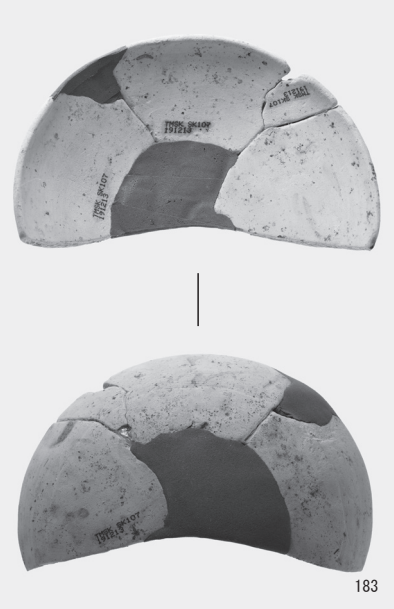
SK61・101・107 出土遺物

205

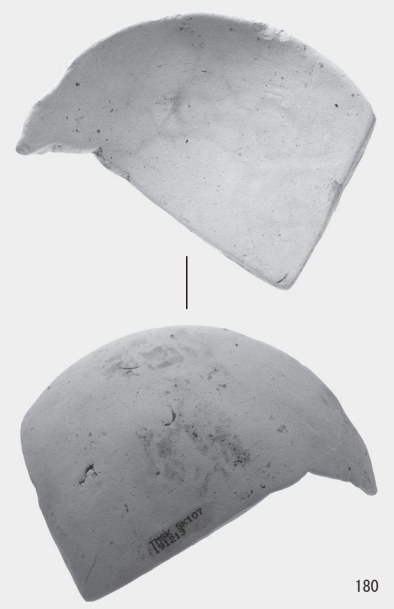
185

184

178

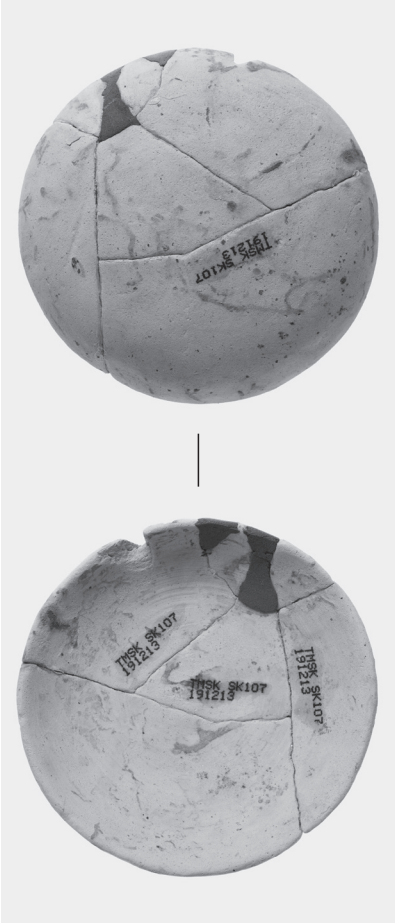


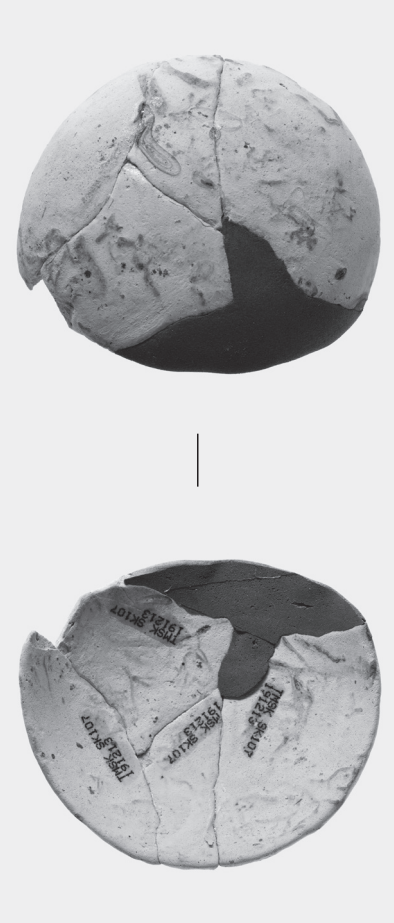
183



180

SK107, SP84 出土遺物

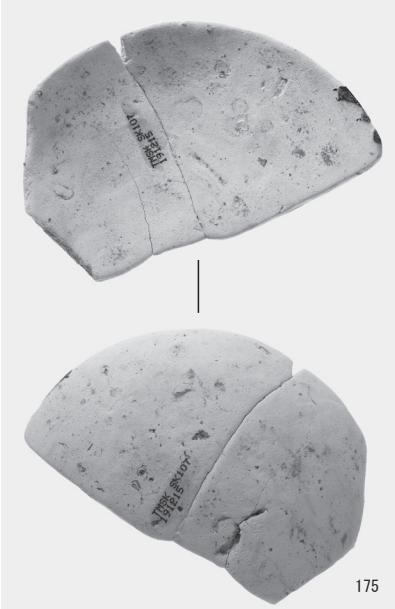




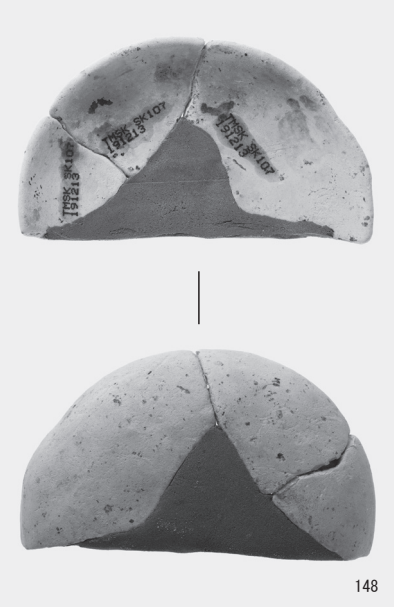
147

168

126



175

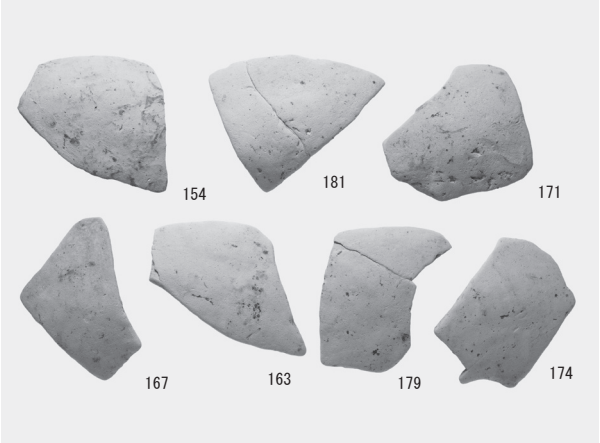


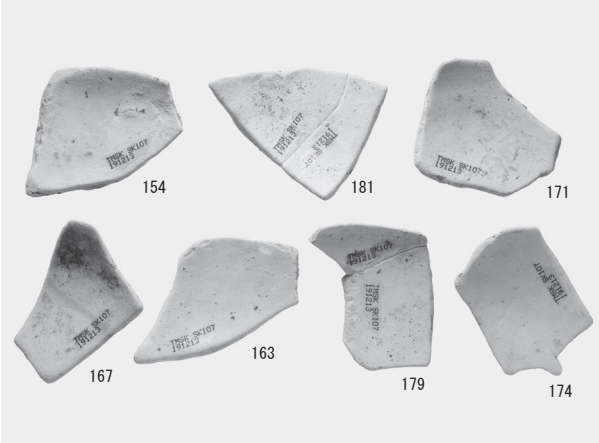
148

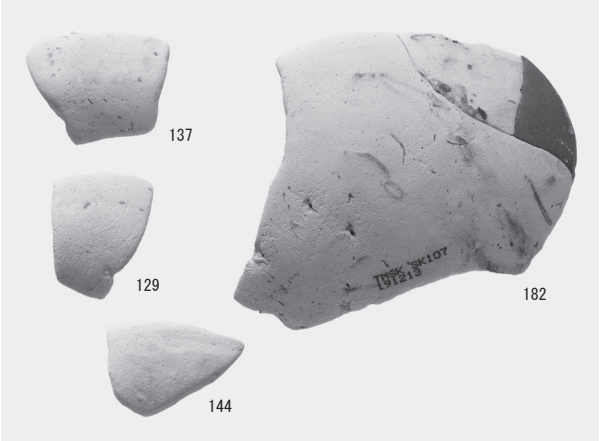
192

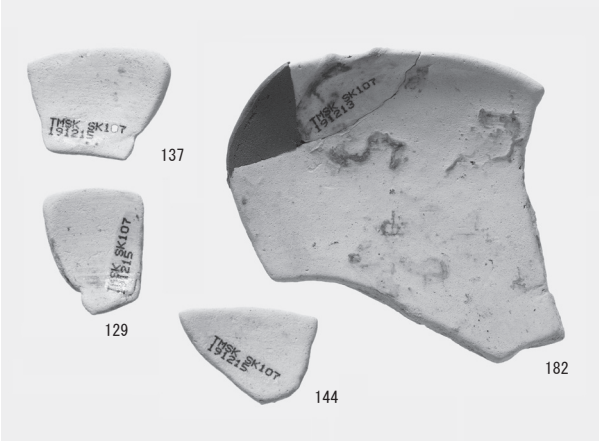
SK107 出土遺物

図版一六　遺物(9)

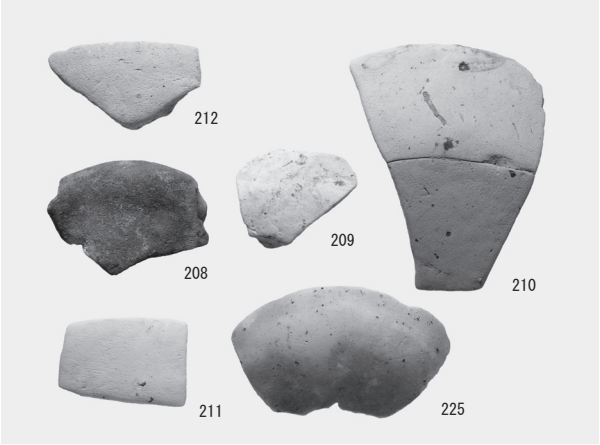


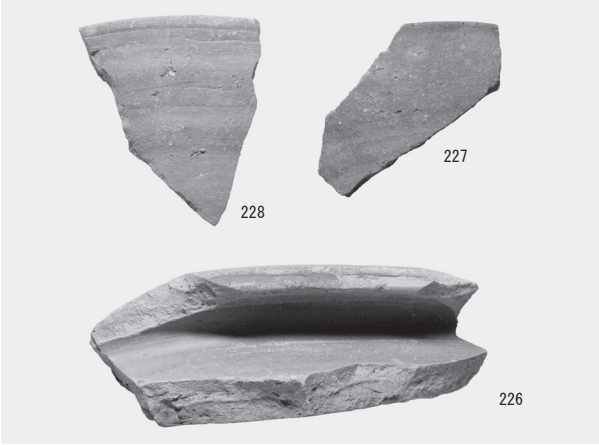


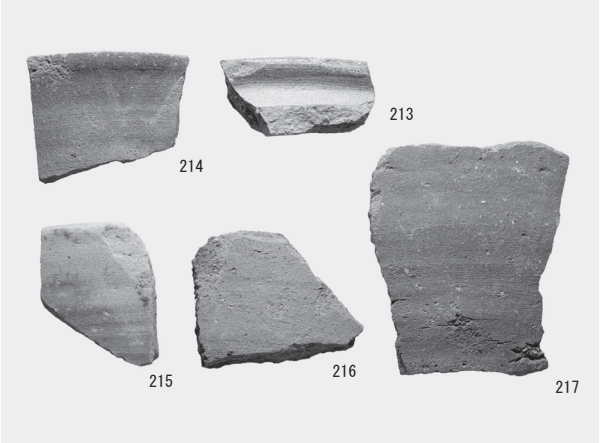


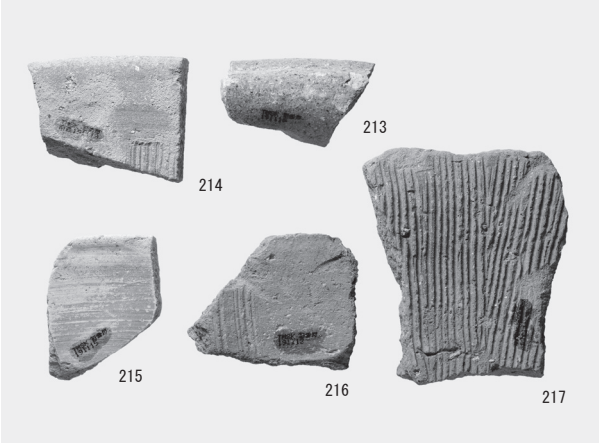


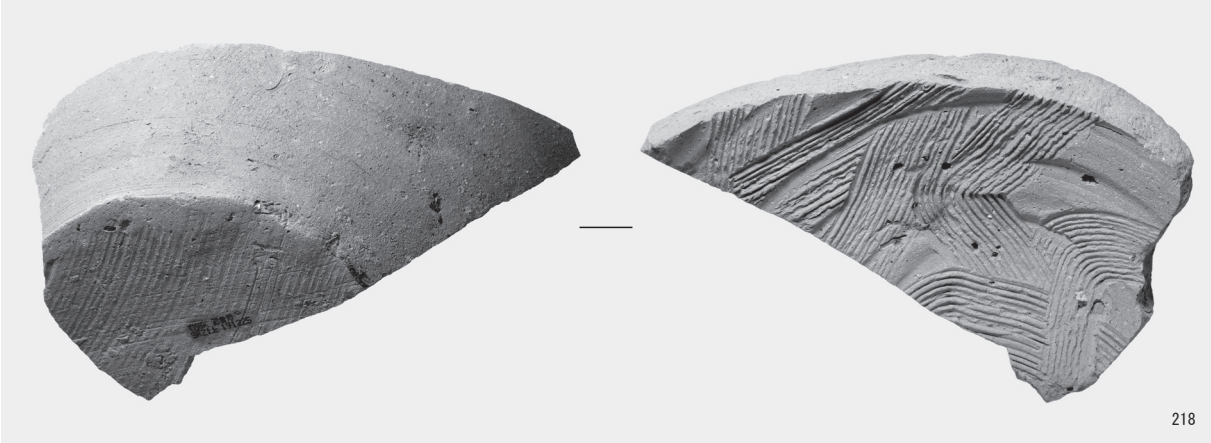
SK107 出土遺物











包含層出土遺物，表採遺物，石製品，土製品

図版一八　遺物（11）

鉄製品，土製品

報告書抄録

ふりがな	とやましともさかいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市友坂遺跡発掘調査報告書
副書名	朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	103
編著者名	堀内大介（富山市埋蔵文化財センター）、常深 尚（有限会社毛野考古学研究所）、 パリノ・サーヴェイ株式会社、佐伯史子・澤田純明（新潟医療福祉大学）
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 富山支所
所在地	〒933-0351　富山県射水市戸破1679－3－A
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒939-2798　富山県富山市婦中町速星754　℡ 076-465-2146
発行年月日	西暦 2020年12月25日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ともさかいせき 友坂遺跡	とやまけんとやましし 富山県富山市 ふちゅうまちともさか 婦中町友坂	16201	2010429	36° 40′ 32″	137° 8′ 58″	20191113 ～ 20191226	152㎡	プール建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
友坂遺跡	散布地	古代		須恵器、土製支脚	中世館跡に伴う柵や溝を検出。
	城館	中世	柵、礎石建物、竪穴建物、溝、土坑、ピット	中世土師器、八尾、珠洲、青磁、白磁、土錘、鞴羽口、砥石、釘、刀子、鋏	

要約

友坂遺跡は、富山市北西部に位置し、井田川左岸の氾濫平野に立地する。西側 500 mには南北に延びる呉羽丘陵がある。

調査では中世の柵 3 条、礎石建物 1 棟、竪穴建物 3 基、溝 13 条、土坑 13 基、ピット 77 基を検出した。友坂遺跡の過去調査で確認されている館跡に関連する遺構と考えられた。出土遺物は 12 ～ 15 世紀に及び、館跡の変遷を 6 時期で捉えることができた。

過去調査を含めて 6 時期を概観すると、方形館成立以前の友坂 1・2 期（12 世紀後半～ 13 世紀）には、古代から続く地割を踏襲しながら、区画性を帯びた小規模な居住空間が形成される。友坂 3 期（14 世紀前半）になると新たな地割に基づいた方形館が成立し、友坂 4･5 期の二度の改修を経て、16 世紀初頭まで継続する。館内には柵、掘立柱建物、井戸、竪穴状土坑などが検出される。友坂 6 期（16 世紀前半以降）には館跡は廃絶すると考えられる。今回の調査では 16 世紀前半以降の礎石建物を検出し、過去調査では周辺に戦国末から近世までの遺構が確認されている。

富山市埋蔵文化財調査報告 103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

－朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2020（令和 2）年12月25日発行

発　行　富山市教育委員会

編　集　有限会社毛野考古学研究所富山支所

印　刷　中村印刷工業株式会社